

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する人類学研究の歴史と現状：  
日本人による文化人類学的研究を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2016-05-17 キーワード: 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00006018">https://doi.org/10.15021/00006018</a>

# 環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する 人類学研究の歴史と現状

— 日本人による文化人類学的研究を中心に —

岸上 伸啓

(国立民族学博物館)

- |                                   |                                 |
|-----------------------------------|---------------------------------|
| 1 はじめに                            | 8 文化人類学者・民族学者による環北太平洋沿岸先住民文化の研究 |
| 2 ジェサップ北太平洋探検とその後                 | 8.1 北海道・千島列島・サハリン地域             |
| 3 北海道立北方民族博物館の第1回国際シンポジウムと渡辺仁の研究  | 8.2 極東地域                        |
| 4 スミソニアン協会国立自然史博物館の「大陸の交差点」プロジェクト | 8.3 カムチャツカ半島・チュコト半島地域           |
| 5 宮岡伯人の言語プロジェクト                   | 8.4 アラスカ地域・アリューシャン地域            |
| 6 JESAUP II プロジェクトの展開             | 8.5 北アメリカ北西海岸地域                 |
| 7 国立民族学博物館で開催されたシンポジウムと展示プロジェクト   | 9 環北太平洋沿岸先住民文化の比較研究             |
|                                   | 10 検討                           |
|                                   | 11 結語                           |

## 1 はじめに

環北太平洋沿岸地域とは、日本列島北部を出発点として北上すると、サハリン、沿海州地域、アムール川流域、千島列島、カムチャツカ半島、チュコト半島、アリューシャン列島を経て、北アメリカ大陸のアラスカ沿岸、北アメリカ北西海岸地域へと至る広大な地理的空間を指す(地図1)。それはほぼ北緯30度以北の太平洋を挟んだ新旧両大陸の沿岸地域であり、渡辺仁(1988, 1992)が「北太平洋沿岸」や「北洋文化圏」と呼んだ領域である。

同地域はサケ・マス類が毎年、遡上する地域(地図2)であるという共通性が認められ、同地域の先住民はサケ・マスを利用し、サケ文化ともいえる経済基盤や生活様式を作り上げてきた。さらにその沖や沿岸にはアザラシ類や鯨類のような海獣も豊富に生息するため、沿岸地域の人びとは食料資源や交易品として海獣資源も利用してきたという歴史がある。これらの生態的な共通基盤は、類似した文化を各地で独立して生み出す条件になったかもしれないし、人の移動や文化要素の伝播を容易にする条件になったかも

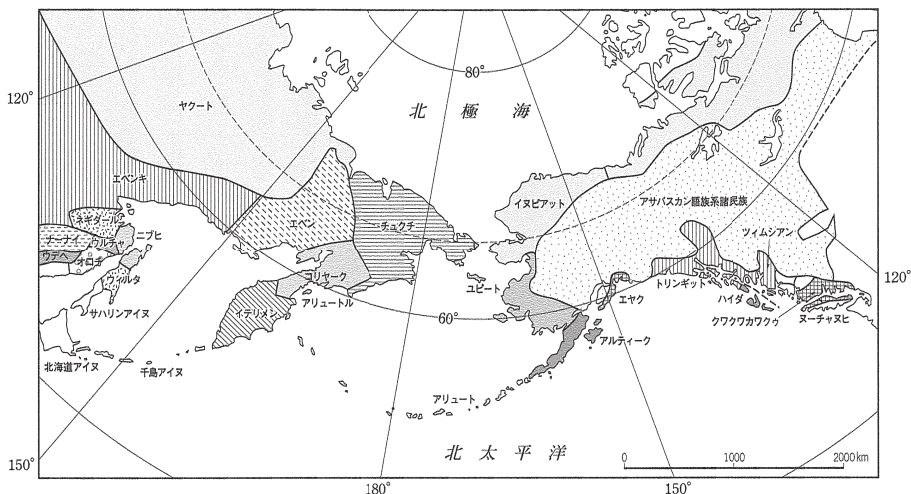
しれない。

ところで、新大陸の人類はベーリング海峡を渡って旧大陸から渡ってきたということが、定説になっているが、いつ、どのような経路で北米大陸に達し、拡散していったかに関しては未だ十分に解明されているとはいいがたい。また、この100年あまりの研究によって、ワタリガラス神話やサケの初漁儀礼のような、新旧両大陸の先住民族間で非常に類似している文化要素や文化実践が多数存在していることも明らかになった。それらの文化要素が広域にわたって分布している理由として、生態学的環境の共通性や歴史的関係性が想定されているが、これらについても十分納得のいくような説明はなされていない。

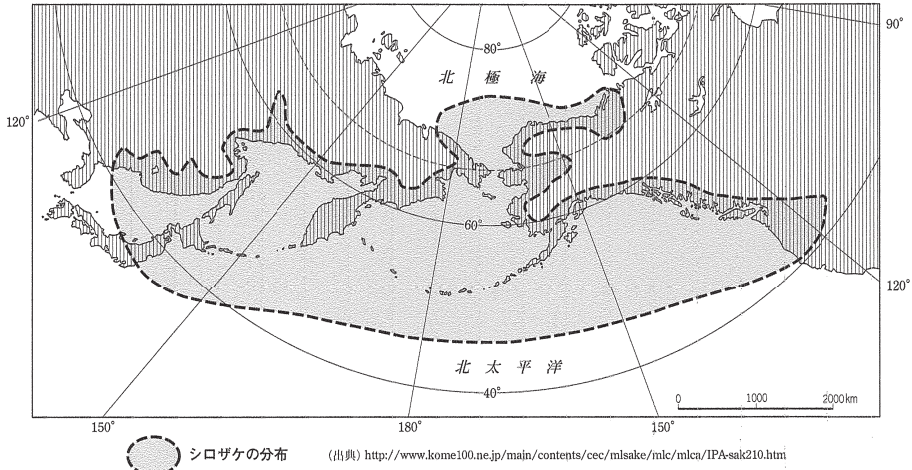
以上で概略した研究においては、過去100年にわたって欧米人やロシア人の研究者が主導的な役割を果たしてきた。しかし、この20年あまりの間に日本人の言語学者や文化人類学者も環北太平洋沿岸地域のさまざまな先住民族社会で現地調査を行い、その成果も蓄積されてきた。それらは質の高い研究成果であるにもかかわらず、欧米人やロシア人の研究者によって参照されることがきわめて少ない。

筆者は、これまで欧米人やロシア人がおもに実施してきた同地域の文化人類学的研究に日本人の研究成果を加味して全体を検討する必要があると考える。

本稿では、日本人が同地域でどのような調査や研究を実施してきたかに力点を置きながら、国内外の主要な研究者による研究成果を時間の流れに沿って整理、検討したうえで、最後に今後の課題を提起する。なお、同地域における考古学や言語学の膨大な研究成果を網羅して紹介することは筆者の能力を超えているため、本稿ではおもに日本人による文化人類学的研究におもな対象を絞ることを断っておきたい。



地図1 北太平洋沿岸地域の諸民族の分布地図



地図2 シロザケの分布域

## 2 ジェサップ北太平洋探検とその後

フランツ・ボアズ (Franz Boas) は、1897年から1902年にかけてアメリカ自然史博物館を拠点として、新旧両大陸の北太平洋沿岸の先住民社会の歴史的関係を解明するための大規模な調査プロジェクトを組織し、実施した。その野心的なプロジェクトは、同博物館の館長で、スポンサーでもあったモリス・ジェサップ (Morris Jesup) にちなみ、ジェサップ北太平洋探検 (The Jesup North Pacific Expedition) と呼ばれている。このプロジェクトには、自然人類学者から文化人類学者までさまざまなロシア人やアメリカ人の研究者が多数参加していたので、学際的かつ国際的な研究プロジェクトであった。

ロシアと米国の研究者は、両大陸の沿岸地域で現地調査を実施し、同プロジェクトの成果として、11巻、31分冊にわたる膨大な著作を出版した。その中には W・ボゴラス (Bogoras) のチュクチ民族誌 (1904-1909) や W・ヨヘルソン (Johelson) のコリヤーク民族誌 (1908) など、古典的で、かつ基礎的な民族誌が含まれている。ボアズ自身は研究成果を比較することによって、両大陸の先住民族間の歴史的関係を検証するという当初の目的を達成しようと考えていたはずだが、各地の民族の言語や文化について深く知れば知るほど、共通性ととも差異や多様性が顕在化したため、彼自身は明確な結論に到達することはなかった (Boas 1968, 2001)。また、北海道とサハリン島のアイヌについては、当初は調査が予定されていたが、成果としては出版されなかった。このプロジェクトの成果は、その後の環北太平洋沿岸地域の先住民文化研究の基盤となった。

研究成果の総合や一般化は、ボアズの次の世代に託されたが、1922年のソ連の成立によって、米ソは、自由主義社会と社会主義社会に分かれ、対立関係が続いたために、そ

れまで相互に協力しながら調査を行ってきた両国の研究者間の学术交流が難しくなった。さらに第2次世界大戦が終結した1945年からいわゆる東西冷戦時代に突入した。冷戦が終焉を迎える1989年までのこの期間には、完全にとはいえないにしても、研究者の学术交流はほとんど見られず、アメリカ人はロシア側では調査できないし、ロシア人はアメリカ側では調査ができないという事態に陥った。このような理由から旧ソ連が崩壊する1989年頃まで、環北太平洋地域の研究は停滞した。

しかし、その冷戦の時代にこの地域に関する研究がまったく行われなかったわけではなかった。例えば、1920年代に米国のE・ガンサー (Gunther)、1940年代にフランスのA・ルロワ＝グーラン (Leroi-Gourhan)、1960年代に米国のF・デ・ラグナ (de Laguna) とC・S・チャード (Chard) らがそれぞれ、研究を発表している。

E・ガンサーは1926年に『American Anthropologist』誌において最初に遡上し、捕獲されたサケに対する儀礼 (the First Salmon Ceremony) の分析を行い、北アメリカ北西海岸地域全域に分布するサケ儀礼に注目した上で、アジア側とアメリカ側の両方におけるサケの重要性やサケ儀礼の類似性を指摘した (Gunther 1926)。彼女は2年後にその成果をさらに発展させた分析結果を公表している (Gunther 1928)。第2次世界大戦後、フランスの高名な考古学者、A・ルロワ＝グーランが『北太平洋の考古学』(1946) を出版した。彼は、日本から北上し、アラスカに至り、そこからカナダのブリティッシュコロンビア州にかけての沿岸地域において共通に見られる、海獣狩猟用銛頭など15の文化要素に関して分析し、地図上にその分布を示した。また、1960年にはF・デ・ラグナがモノグラフを著し、北太平洋の文化移動や新旧両大陸における文化の並行現象や類似現象の存在を指摘した (de Laguna 1960)。さらに、ほぼ同じ時期に、今度は考古学者のC・S・チャードは、1960年7月にウィーンで開かれた第34回アメリカニスト会議において、「北太平洋における海洋文化」という報告を行った。彼は発表原稿を改稿し、1961年に日本語で出版したが、同論文において彼はカリフォルニアから日本列島に至る環北太平洋沿岸の先史の特徴と文化の起源の問題を検討した。チャードは、「まだ特殊化していないエスキモー文化の伝統と結びついたこの海岸文化は、B.C.2000年ごろに西南アラスカに起こり、—中略—B.C.1000年紀の間に飛躍的に拡大した。北はベーリング海峡を越えて進み、南は北太平洋の海岸沿いに、一方は北海道まで、他方はピュージェット湾まで到達し、この広大な地域におけるその後の文化発展の基礎をつくった。太平洋沿岸の諸文化の間にしばしば認められる奇妙な一致は、この考え方の上に立って解釈するのが一番無理がないように思われる」(チャード 1961: 66) と主張している<sup>1)</sup>。つまりチャードは新旧両大陸沿岸地域における文化的類似性を歴史的な文化の拡散や伝播として説明しようとした。

### 3 北海道立北方民族博物館の第1回国際シンポジウムと渡辺仁の研究

日本においては、網走市で北海道立北方民族博物館が開館されるのに先立ち、1986年から毎年、北方文化に関する国際シンポジウムが開催されるようになった。同館は毎年、国際シンポジウムを開催し、環北太平洋地域の先住民文化に関する研究が多数発表され、その成果はプロシーディングスとして刊行されている。それを出発点として同北方民族博物館は日本における北方研究の拠点のひとつとして大きな成果をあげてきた（北海道立北方民族博物館編 2006）。

第1回シンポジウムは1986年に札幌と網走で開かれた。このときにアルバータ大学のミルトン・フリーマン（Milton Freeman）と元東京大学の渡辺仁の2人が環北太平洋地域に関する基調演説を行っている。

フリーマンは、海洋環境の物理的・生物的特徴から見ると北緯30度以北からベーリング海峡までの北太平洋がひとつの生態的なユニットを形成していることを報告した。さらに、同海域は同地域の先住民に生存の基盤となる生物資源を提供している点を強調している（Freeman 1986）。一方、渡辺仁は、北太平洋沿岸文化圏の研究構想について報告している。この報告は、後に、「北太平洋沿岸文化圏—狩猟採集民からの視点I—」という論文として『国立民族学博物館研究報告』から出版されている（渡辺仁 1988）。

渡辺仁（1988）は、ほぼ北緯30度、日本からカリフォルニア北部に至る北太平洋地域を「北太平洋沿岸文化圏（The Northern Pacific Maritime Culture Zone）」と名付け、その地域の構造や歴史、特徴を探ることを提案している。この地域にはサケが上る「サケ川」が分布しているという共通点があるほか、歴史的に非常に高度な、もしくは複雑な狩猟採集民社会が形成されてきたという共通点がある。彼は、この地域に共通している文化要素を次のように大きく4つのカテゴリーに分け、比較研究を行った。

- 1 住生活関連要素群（features concerned with dwelling habit）
  - 1) 定住性（sedentism）、2) 線形集落（linear settlement）、3) 竪穴住居（quadrangle pit dwelling）、4) 棟持柱（posts supporting a ridgepole）、5) 家の空間構造（complicated structure of the home base）、6) 木器の発達（wooden receptacles）
- 2 食生活関連要素群（features concerned with food economy）
  - 1) 鮭鱒漁（salmon fishing）、2) 漁具と漁法（fishing gears and methods）、3) 海舟（sea-going boats）、4) 魚食性（fish-eating habit）、5) 干魚（drying fish）、6) 魚卵食（habit of eating fish eggs）、7) 貝食（habit of eating shellfish）、8) ウニ食（habit of eating sea urchin）、9) 海草食（habit of eating seaweeds）
- 3 社会生活関係要素群（features concerned with social life）
  - 1) 文身（tattooing）、2) 笠（hats）、3) 鮭儀礼（salmon rites）、4) 禊（purification）

rites), 5) 特殊化狩猟 (specialized hunting), 6) 階層化社会 (social stratification)

#### 4 戦争関係要素群 (features concerned with war or defense and offence)

- 1) 戦争 (warfare), 2) 鎧 (body armor), 3) 首級 (enemies' heads as trophies),
- 4) 仇討ち (vendetta), 5) 防御施設 (fortification)

第1のカテゴリーは文化要素の中でも住生活関連要素群で、渡辺仁は定住性や線形集落がこの地域にはあまねく存在していることなど、6つの文化要素に関して分析した。第2のカテゴリーは食生活関連要素群で、サケ漁や漁具と漁法など、9つの文化要素の共通性に関して分析を行った(渡辺仁 1988)。後年、彼は、第3と第4のカテゴリーの文化要素を分析した(渡辺仁 1992)。第3のカテゴリーは社会生活関係要素群で、サケ儀礼や社会の階層化など6つの文化要素であり、第4のカテゴリーは戦争関係要素群で、戦争など5つの関連する文化要素である。

渡辺の研究方法は特定の文化要素の地理的分布を比較するという、きわめて機械的な文化要素の比較のように見えるが、共通要素を一般的(構造的)類似要素と特殊(個別的)類似要素の2種類に分けることによって、適応的で並行的な発展と伝播という2つの文化要素生成のメカニズムを考慮に入れている(渡辺仁 1992: 70-71)。渡辺によると、一般的類似要素とは、大枠や構造における類似であって、定住性や階層性などを指し、共通の環境条件や社会・経済的条件などへの適応の結果、生み出された共通要素である。一方、特殊類似要素とは、細部の類似を示す双頭回転式鉞先やサケ儀礼などであり、起源を同じくし、伝播や人の移動によって地域の共通要素として分布するようになった可能性が高いものである。渡辺は前者の要素として定住性、住宅と倉庫、魚干し棚の3要素から構成される家の空間構造、漁具や漁法、魚介食、貝食、海藻食、社会的階層化に関係する諸文化要素を指摘し、分析している(渡辺仁 1992: 71-91)。一方、後者としては双頭回転式鉞先や流し網漁、サケ儀礼複合体、木製食器類、丸太梯子式高床倉庫、笠、鎧をあげ、分析を加えている(渡辺仁 1992: 95-107)。また、狩猟採集民の移動と定住性の観点からこの文化圏に検討を加えている(Watanabe 1993)。

興味深い成果として、渡辺はこの比較研究によって、新大陸への人の移動について一つの仮説を出している。人々はベーリング海峡もしくはベーリンジアを通して旧大陸から新大陸に渡ったという仮説が定説だが、あえて渡辺はアリューシャン列島経由による人の移動や文化交流が重要だったのではないかと主張している(渡辺仁 1992: 91-95)。

## 4 スミソニアン協会国立自然史博物館の「大陸の交差点」プロジェクト

1991年12月25日にゴルバチョフ大統領の辞任とソ連共産党の解体により、ソ連体制は消滅し、ロシア共和国が生まれた。このソ連体制の末期に、米国と旧ソ連、カナダの研究者が協力し、スミソニアン協会国立自然史博物館のウィリアム・フィッツヒュー

(William Fitzhugh) 博士をリーダーとして環北太平洋地域の先住民文化に関する国際共同研究プロジェクトが実施された。その成果として、1988年の「大陸の交差点：シベリアとアラスカの諸文化 (Crossroads of Continents: Cultures of Siberia and Alaska)」展が同自然史博物館で開催された<sup>2)</sup>。この展示は、19世紀の環北太平洋地域の先住民文化の物質文化に焦点を合わせた、これまでにない包括的で、画期的な展示であった。同展覧会の図録では、同地域の諸民族の概略、ロシア人やアメリカ人による同地域の調査、同地域の先史文化、同地域の言語や伝承、経済活動、居住パターン、世界観、戦争、交易、ダンス、工芸、現在の先住民文化および現代アートについて網羅的に記述されている (Fitzhugh and Crowell eds. 1988)。

また、この展示会との関連で環北太平洋地域の先住民文化に関する国際シンポジウムが開催され、アメリカと旧ソ連を代表する30名を超える研究者がつどい、活発な意見交換を行った。その成果は、『環北太平洋沿岸地域の人類学』(Fitzhugh and Chaussonnet eds. 1994) として刊行された。同書は新旧大陸の関係やこの地域における儀礼・象徴の問題、戦争や平和的な交流などさまざまな問題について、ジュサップ調査プロジェクト以来数十年ぶりにソ連とアメリカの研究者が検討し、寄稿した画期的な成果であった。

## 5 宮岡伯人の言語プロジェクト

スミソニアン協会の「大陸の交差点」プロジェクトが進行していたほぼ同時期に、日本でも環北太平洋地域の先住民言語に関する研究が始まった。宮岡伯人は、北太平洋沿岸地域の言語に関する研究チームを組織し、1990年にシンポジウム「北の言語—類型と歴史」を実施し、その成果として1992年に『北の言語：類型と歴史』を刊行した (宮岡編 1992)。

同書において宮岡は、環北太平洋地域の先住民言語について2つの大きな特徴を指摘している。第1は、北東アジアの諸言語についてである。北東アジアの言語は、広域に分布するアルタイ諸語、日本語、朝鮮語を除くと、アイヌ語やニヴフ語やチュクチ語のように系統関係が不明な孤立言語が多い。また、言語数が少ない少語族が多い (宮岡 1992: 5)。第2は、北アメリカ北西海岸地域の言語についてである。北アメリカ北西海岸地域の言語には孤立語、言語数が少ない少語族や話者数が少ない小言語が多いという特徴とともに、北西海岸地域には非常に多数の語族が密集しているという特徴がある。しかも、それらの言語の系統が非常に多様で、類型、すなわち文法構造もさまざまである (宮岡 1992: 6)。

北アメリカ北西海岸地域における諸言語の分布状況から相対的な古さを考察し、宮岡は旧大陸から新大陸への人類の移動と拡散について仮説を提起している。現時点では、旧大陸からやってきた人びとはアメリカ大陸の無氷回廊、すなわち人類はマッケンジー・

コルディレラを通過して南下したというのが有力な仮説であるが、宮岡は言語学的に見ると北アメリカ大陸北西海岸沿岸地域を南下したのではないかという仮説を提起している。これは日本人による環北太平洋地域の先住民研究への大きな貢献であると考えられる（宮岡 1992: 50-51）。

宮岡らは、1995年度以降、科学研究費補助金による「環北太平洋の危機に瀕した原住民言語に関する緊急調査」（1995年度～2003年度）や「環北太平洋地域における危機言語の総合的調査研究」（2000年度～2002年度）、「アラスカとカナダ北西部の先住民言語の緊急調査」（2000年度～2002年度）、「北方諸言語の類型的比較研究」（2003年度～2005年度）を実施した。これらの研究プロジェクトは、多数の大学院生を現地に派遣し、調査に従事させることによって若手研究者の育成に貢献した。また、環北太平洋地域における先住民言語に関する記述言語的情報が飛躍的に蓄積された（Miyaoka, Sakiyama and Krauss eds, 2007）。これらのプロジェクトに参加したおもな研究者の氏名と調査対象言語（民族名）は次の通りである。ニヴフについては白石英才、ナーナイについては東京外国語大学の風間信次郎、ウイльтаについては北海道大学の津曲敏郎、ユカギールについては和歌山大学の遠藤史、コリヤークについては富山大学の呉人恵と小樽商科大学の大島稔、アリュートルについては永山ゆかり、イテリメンについては千葉大学の小野智香子、チュクチについては東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の呉人徳司、シベリア・ユピックについては永井佳代、アラスカのユピックについては宮岡伯人、イヌピアットについては永井忠孝、アリュートルについては大島稔、ハイダについては静岡大学の堀博文、ツィムシアンについては大阪学院大学の笠間史子、ヌートカ（ヌーチャヌヒ）については東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の中山俊秀、海岸セイリッシュについては香川大学の渡辺己が調査を行い、成果を発表している<sup>3)</sup>。

宮岡や大島は、言語のみならず人びとの生業や世界観に関する記述を残しているが、若い世代の研究者は言語学的視点から先住民言語のみを研究し、言語に関する専門的論文や調査報告書を出版する傾向が顕著に見られる。また、文化人類学者らとの学术交流があまり行われていないという問題がある。このため、日本では文化人類学者が言語学者による重要な言語学的成果を活用できない状況、またその逆の状況が現在も続いている。

## 6 JESAUP II プロジェクトの展開

1992年にカナダのケベック市で第1回目の極北社会科学国際会議（International Congress of Arctic Social Sciences）が開催された。その時に、スミソニアン協会国立自然史博物館・極北研究センターのイーゴリ・クルプニク（Igor Krpunik）が、環北太平洋先住民文化研究に関するシンポジウムを開催し、「ジェサップ2」を実施しようと提案した。それ

以降、「ジェサップ2」プロジェクトのシンポジウムが、1993年にワシントンD.C., 1994年にアンカレッジ, 1997年にニューヨークで開催された。ニューヨークのアメリカ自然史博物館で開催されたシンポジウムでは、ジェサップ北太平洋調査以降の100年の間にみられた北太平洋沿岸地域の先住民社会における変化の状況と原因について検討が行われた。これらのシンポジウムは、クルブニクとフィッツヒューが中心となり、ニューヨークにあるアメリカ自然史博物館の研究者やロシア人研究者と連携して実施された。その成果として『出入り口 (Gateways)』(Krupnik and Fitzhugh eds. 2001) と『過去と現在の文化を構築する (Constructing Cultures Then and Now)』(Kendall and Krupnik eds. 2003) として成果が刊行された<sup>4)</sup>(クルブニク 2009)。

2000年には谷本一之と井上紘一がロシア人とアメリカ人、日本人の研究者を招へいし、第5回目のシンポジウム「ワタリガラスのアーチ (The Raven's Arch)」を札幌で開催した。この会議には、日本人の中堅および若手の研究者も参加した。このシンポジウムの後、谷本は国立民族学博物館において共同研究「ジェサップ北太平洋調査を追試する(1902-2002)」を組織し、実施した。シンポジウムと共同研究の成果は、谷本一之・井上紘一編『「渡鴉のアーチ」(1903-2002) — ジェサップ北太平洋調査を追試検証する』(2009)として出版された。

ジェサップ2プロジェクトは、ジェサップ北太平洋調査隊が収集した標本資料や写真、民族誌情報の再検討が中心であった。しかし、力点が環北太平洋沿岸地域の先住民文化の過去に置かれ、現在や将来についてはほとんど検討されていない。また、一部の例外を除けば(ベリヨスキン 2009)、新旧大陸間の先住民文化の比較研究を行っていない点に問題が残った。さらに、まったく無いわけではないが、ジェサップ2においてもアイヌ関連の研究がきわめて少ない。

## 7 国立民族学博物館で開催されたシンポジウムと展示プロジェクト

1974年に創設された国立民族学博物館では、館員が北太平洋地域の先住民文化に関するさまざまな国際シンポジウムや展示会を実施してきた。その中で特筆すべき6件のプロジェクトを紹介したい。

第1は、小谷凱宣が中心となって1978年8月に国立民族学博物館で実施したアラスカ先住民に関する国際シンポジウム(第2回谷口シンポジウム)の成果である(Kotani and Workman eds. 1980)。当時、30歳代から40歳代の新進気鋭の日米の研究者を中心としたこのシンポジウムでは、ドン・ジュモン(Don Dumond)やウィリアム・ワークマン(William Workman)、岡田宏明、小谷凱宣、ダグラス・アンダーソン(Douglas Anderson)らによる最新の考古学的研究から蒲生正男や宮岡伯人ら日本人研究者によるアラスカ調査の成果まで多様な報告がなされた。とくにジョアン・タウンゼント(Joan Tonwnsend

1980) は、18～19世紀におけるアラスカ南西地域の先住民社会における階層化の問題を多角的に比較検討した。アーネスト・バーチ (Earnest Burch 1980) はアラスカのイヌピアット社会が海岸集団と内陸集団の大きな2つに分類されてきた点を批判し、1816年から1842年までの期間には25のイヌピアット社会が存在していたことを報告した。さらに、彼はそれぞれの社会が戦争や交易によって相互に関係しながら存在した政治経済的社会単位であることを例証した。また、リチャード・ネルソン (Richard Nelson 1980) はアラスカ内陸のアサバスカン系先住民の生業による環境適応について論じ、ロジータ・ウォール (Rosita Worl 1980) はイヌピアットの現代の捕鯨複合について紹介している。このシンポジウムの成果は、当時のアラスカ先住民に関する最先端の研究であった。

第2は、小山修三が中心となって1979年6月に国立民族学博物館で実施した北半球の太平洋沿岸の採捕民 (forager) の経済的な豊かさに関する国際シンポジウム (第3回谷口シンポジウム) の成果である (Koyama and Thomas eds. 1981)。このシンポジウムでは、日本列島の縄文文化と北アメリカ大陸の北西海岸先住民文化の間に見られる定住性や人口密度の高さ、経済的豊かさ、社会的複雑さの問題、そして狩猟採集から農耕への歴史的变化などが比較検討された。これらの研究は、共時的な通文化研究というよりも、1000年以上の時間的な変化を視野に入れた通文化研究であった。たとえば、マーク・コーエン (Mark Cohen) は、両地域の並行的な複雑な社会組織の生成は、食糧資源の豊かさではなく、高い人口密度と経済的な不安定さ (脆弱性) によって生み出されたとする仮説を提起している (Cohen 1981)。また、メルヴィン・エイキンズ (Melvin Aikens) は、社会的な複雑さが日本における稲作と北アメリカ東部の森林地域のトウモロコシ栽培の発展を生み出したのであり、農耕が社会的複雑さを生み出したのでは無いと主張している (Aikens 1981)。

第3は、加藤九祚を研究代表者として1984年度から1985年度にかけて実施された科学研究費プロジェクト「ピウスツキ北方資料を基礎とする日本周辺北方諸文化の総合的研究」である。このプロジェクトでは、1900年代初頭にジェサップ北太平洋調査プロジェクトに参加したポーランドの民族学者プロニスワフ・ピウスツキがサハリン・アイヌの間で旧式の録音蠟管に収録した音声を再生するとともに、彼が残した著作物や未公開草稿類を分析した。その研究成果の一部として、ピウスツキの悲劇的生涯や学問的業績、蠟管からの工学的音声再生とその録音内容、およびピウスツキによる研究に関するアイヌを含む北方先住民文化に関する諸論考からなる報告論文集が出版されている (加藤・小谷編 1987)。このプロジェクトはポーランドとの国際共同研究プロジェクトであるとともに、科学者が蠟管録音の光学式音声再生を行った学際的なプロジェクトであった。このプロジェクトは、その後の小谷凱宣による在米アイヌ資料調査プロジェクトへと発展していった<sup>5)</sup>。

第4は、1998年に国立民族学博物館が主催した第8回狩猟採集社会国際会議 (the 8th

Conference of Hunting and Gathering Societies) の成果のひとつである。羽生淳子らは、北太平洋沿岸地域の狩猟採集社会を考古学や民族学の立場から比較検討し、その成果を出版した (Habu, Savelle, Koyama and Hongo eds. 2003)。本研究は、日本列島と環北太平洋沿岸地域に存在している複雑な狩猟採集社会の研究であるが、三つの特徴がある。一つ目は、同書は複雑な狩猟採集社会がいかに形成されてきたかという問題を理論的に分析している。たとえば、ベン・フィッツヒューは、進化生態学的視点からコディアク島における社会進化に検討を加え、定住性の増大や人口が集住した生活様式、制度化された社会的不平等の出現、威信経済、戦争、エリートによる交易は、個人々の動機を持った行動の結果であるという主張を行っている (Fitzhugh 2003)。二つ目は、歴史的要因の重要性の指摘である。シュヴァイツァーは、この北太平洋における狩猟採集民の歴史や彼らの環境との関係や多様性を解明するためには、単に進化だけではなく、伝播という影響も重要だと指摘する (Schweitzer 2003)。さらに、本研究では、三内丸山遺跡を北アメリカ北西海岸の先住民社会と比較し、検討を加えた研究の成果が発表されている (Okada 2003)。

第5は、大塚和義が代表を務め、佐々木史郎と岸上伸啓が実行委員として参加した2001年度国立民族学博物館特別展示「ラッコとガラス玉」プロジェクトの成果である (大塚編 2001, 2003)。このプロジェクトは、ある意味で「大陸の交差点」プロジェクトの日本版である。しかし、両者の間の大きな違いは、本プロジェクトが環北太平洋地域の先住民文化の盛衰を交易に着目して把握しようと試みた点である。代表者の大塚の専門がアイヌ文化の研究であったため、第1の焦点をアイヌ社会と和人社会の交易に置き、第2の焦点は、アイヌ社会と近隣北方諸民族社会との交易、とくに毛皮交易やガラス製ビーズの流通に中心を置いた (大塚編 2001, 2003; 佐々木 1996, 1997a; 手塚 2011)。第3の焦点を、カムチャツカ半島を経てチュコト半島へ広がり、旧大陸から新大陸へと至り、さらに北西海岸地域にまで到達する先住民間交易、および環北太平洋地域での欧米人との毛皮交易に置いた (岸上 2001; 木村 2002)。そして、環北太平洋沿岸地域の先住民は決して貧しい人々ではなく、先住民間交易、それから毛皮交易を通して富を蓄積し、その結果、非常に豊かなで素晴らしいアートとも呼べる作品や工芸品を作り出したということを明らかにした。この展示は、交易によって生み出された先住民文化の豊かさを例証したという点で画期的な試みであった。

第6は、佐々木史郎による国際シンポジウムと共同研究である。佐々木は、1999年度から2000年度の2カ年にわたり共同研究「東アジア狩猟採集文化の研究」を実施するとともに、2001年3月に国立民族学博物館重点研究プロジェクトの一部として国際シンポジウム「東アジア・北太平洋地域の狩猟採集文化の新たな地平」を開催した。日本の北方地域と沿海州の狩猟文化に関するその成果 (佐々木編 2002) は、その後のロシア人研究者との国際共同研究の成果 (Sasaki ed. 2009) とともに出版されている。また、北東アジア

アにおける商業的森林利用と先住民との関係を取り扱った論文集を出版している（佐々木編 2006）。

## 8 文化人類学者・民族学者による環北太平洋沿岸先住民文化の研究

本節では、海外での環北太平洋沿岸先住民文化に関する研究の潮流を参照しつつ、日本における研究成果を概観する。海外の研究を網羅することは難しいので、筆者が代表的と考える研究のみを紹介することをお断りしておく。

### 8.1 北海道・千島列島・サハリン地域

北海道のアイヌ文化に関する記述は、江戸時代にまでさかのぼり、アイヌ民族を日本国家の中に強制的に編入した明治時代にはアイヌ民族の起源問題や言語、神話が研究されるようになったが、民族学的研究の嚆矢は1951年に実施された石田英一郎らによるアイヌ調査（石田 1952）であるといわれている<sup>6)</sup> (Yamada 2003)。1970年代以降は先住民民族問題という政治的側面や差別・格差問題という社会・経済的側面の顕在化によってアイヌ文化そのものに関する民族学的研究は、停滞する。一方的に研究対象とされてきたアイヌ民族による研究者への嫌悪感や反発、さらに調査者自身が遵守すべき調査倫理問題の顕在化が原因で、文化人類学者が直接、アイヌ民族の生活の調査を実施することが難しくなったが、そうした問題に直接かかわらない音楽や工芸、歴史、物質文化<sup>7)</sup>、考古学的資料に関する研究は続けられてきた (Irimoto 1992, 2004b; Yamada 2003)。

1980年代にはヨーゼフ・クライナーが、ドイツ連邦共和国学術研究財団 (DFG) とトヨタ財団から助成を受けて、在欧アイヌ資料調査を実施した (クライナー 1987)。また、1990年代以降は小谷凱宣や萩原真子らが中心となり江戸時代末から大正時代にかけて国外に流出したアイヌ資料に関する調査を欧米の博物館で行い、国内外のアイヌ研究者とともに資料情報を整理し、公開した (萩原・ゴルバチョーヴァ・古原編 2007; 小谷 1996; 小谷編 1997, 2001, 2004; 小谷・萩原編 2004; 佐々木・古原・小谷編 2008)。これら一連の研究は、日本には現存していない稀少な衣類や儀礼具が海外に残っていることを明らかにし、これまで不明であった物質文化の歴史的变化や地域差の理解を促進させ、アイヌの物質文化研究に大きく貢献した。さらに、在外アイヌ・コレクションがどのように形成されたかに関するコレクション・ヒストリーの研究も存在している (たとえば、小谷 1993, 1994; 出利葉 1997a, 1997b)。

1990年代に入ると、アイヌを日本の先住民として認め、その文化を振興させるためのアイヌ新法が成立した。この結果、アイヌの日本の中における位置づけの変化、アイヌ民族出身のアイヌ文化研究者の出現などによって、アイヌと研究者の関係に変化が見られ、アイヌ文化研究に新たな展開が見られた。研究テーマとしては、伝統的なアイヌ文

化の復元よりも、アイヌ文化の観光、文化復興運動、アイヌ独自の精神世界やエスニシティ、工芸・アート、開発、教育史などの問題に焦点があてられるようになった<sup>8)</sup>(大林 1993, 1994; 大塚 1995; 小川 1997; Irimoto 1992, 2004c; Yamada 2003)。ここでは1990年代後半以降のアイヌ文化をめぐる研究動向を中心に紹介したい。

これまで先住民居住地の観光地化や先住民の芸能の観光化は、先住民文化を破壊するものだと考えられてきたが、北海道におけるアイヌ観光に関する研究が進むと、アイヌ観の形成や伝統の継承に深く関わっていることが明らかになってきた。アイヌ観光が盛んになることによってアイヌの舞踊や工芸作りなどの需要が高まり、伝承されてきたことが指摘されるようになった(大塚 1996; 齋藤 1996, 1999; Otsuka 1999)。また、文化復興運動や儀礼の復活、まりも祭りのような新しい祭りの実施が、アイヌの人びとの民族アイデンティティの高揚や維持に深く関わっていることが解明された(煎本 2001, 2007a; Irimoto 2011; Yamada 2000, 2001)。

岩崎まさみは北海道の沙流川における二風谷ダムの建設が地域住民、とくにアイヌの人々の食生活や社会生活に及ぼす影響に関する応用人類学的な調査をアイヌの視点や知識に基づきながら実施し、成果を公開している(岩崎 2005a, 2005b, 2005c, 2007a, 2007b, 2009)。アイヌ研究の中に応用人類学的研究が出てきたことはアイヌ研究史においても注目に値すると考える。

小川真人は、アイヌ児童を対象としたアイヌ学校の設置からその特設制度廃止まで(1870年代~1930年代)に焦点を合わせ、アイヌ教育の展開過程を解明した(小川 1997)。小川の研究は文化人類学研究ではないが、綿密な実態分析に基づくアイヌ教育史としてきわめて重要な研究である。その後も小川は、精力的にアイヌの教育に関する研究を続けている(たとえば、小川 2013)。

山田孝子(1994)は、アイヌの世界観を宇宙や靈魂、カムイ(神)、動植物などさまざまな現象に関する認識体系と捉え、認識人類学的視点から彼らの「言葉」を分析し、アイヌによる世界の認識の深層構造を解明しようと試みた。煎本は、アイヌの狩猟活動を動物と人間の関係をめぐる世界観を通して動物や環境に働きかける行動として理解しようと試みた(Irimoto 1994; 煎本 1988)。また、アイヌの靈魂観やアイヌのシャーマニズムに関する研究も行われた(大林 1993; Irimoto 1997; Obayashi 1996, 1997; Wada 1996)。

菊池俊彦は考古学と歴史学の成果を統合してオホーツク文化に焦点を合わせて、北東アジア古代文化について研究を行った。菊池はオホーツク文化の形成や特徴について日本列島や大陸沿海州地域、サハリン地域、千島列島、カムチャツカ半島の諸民族との交流や交易の観点から解明を試みている(菊池俊彦 1995, 2004)。手塚や出利業らは、北海道や千島列島のアイヌの歴史を北東アジアの交易ネットワークとの関連から再検討し、アイヌが単なる狩猟民や漁撈民ではなく、きわめて活発な交易者であることを例証した(大西 2009; 佐々木亨 1996; 手塚 2003, 2010, 2011; 出利業 1993, 1995, 2002; 出利業・

手塚 1994; Deriha 2009; Onishi 2014; Takakura 2007; Tezuka 1998, 2009)。本田優子は、歴史学者や言語学者とともにアイヌの歴史を口頭伝承から再考するほか、アイヌのクマ送り儀礼<sup>9)</sup>について学際的な視点から検討を加えている(本田編 2010; 木村・本田編 2007)。天野哲也は、アイヌのクマの胆嚢が交易品として重要であった点に焦点を合わせ、クマ送り儀礼との関連で論じている(天野 1990)。同様に、大塚(1987)や菊池勇夫(1994)、岸上(1997c)らは、動物の送り儀礼と交易との間に密接な関係があることを指摘している。その後、アイヌのクマ送り儀礼については、考古学者や歴史学者によって極東アジアにおける民族交流や交易の歴史の中に位置づけながら、その起源や変遷を探ろうとする動きが見られた(天野 2003, 2008; 池田 2007; 佐藤 2013)。煎本は、アイヌのクマ送り儀礼に関する既存の研究の成果を総合し、地域的な差異や時間的な変化を検討し、その起源を生態人類学的な視点から論じている(煎本 2010; Irimoto 2014)。

アイヌ絵の解釈を再検討した研究(佐々木利和 2004)やアイヌ絵に描かれた音楽や舞踏を分析したアイヌの芸能文化研究(谷本 2000)なども出版された。また、本田は、近世から近代にかけての北海道におけるアイヌの樹皮衣の商品としての生産や流通について地道な研究を進めるとともに(本田 2002, 2003)、文献資料や絵画資料、口承文芸を利用してアイヌの衣服に関する研究を展開した(本田 2004, 2005)。これらの研究は、従来のアイヌは狩猟採集民であるというアイヌ観を変えつつある。

アイヌの作家が制作する工芸品やアート作品は、彼らの生活の糧となるとともに、民族性を象徴するモノでもある。若手研究者は、アイヌの作家の作品制作を支援し、作品が市場に流通し、彼らの著作権が守られるようにするための実践的な研究を展開している(山崎・伊藤編 2012)。また、研修や展示によってアイヌの作家の育成に国立民族学博物館や北海道大学アイヌ・先住民研究センターが積極的に関わることも多くなった(大塚 2002, 2011; 山崎 2008)。さらに、アイヌ民族の現状についても国内外に啓蒙的な情報を発信するようになった(Stewart et al eds. 2014)。

本多と葉月は、日本の博物館におけるアイヌ展示の表象に関する調査を行い、ほとんどの展示が「伝統」を強調し、アイヌを過去に封じ込め、永遠の未開性を演示させる仕掛けになっていることを指摘した(本多・葉月 2006)。一方、関口やワトソンらは、北海道を離れ、東京に住む現代のアイヌに関する研究を行い、現在のアイヌの多様な生き様を描き出している(宇井 2009; 大塚 1999; 関口 2007; Watson 2014)。また、外国人研究者が北海道の阿寒町や東京で現地調査を行ない、日本人の研究者とアイヌのアーティストや活動家とともにアイヌ研究のあり方を検討している(Hudson, Lewallen, and Watson eds. 2014)。

出利葉は、博物館とアイヌ民族との関係について取り上げ、道立の北海道開拓記念館という博物館が、アイヌ民族のアイデンティティをどのように理解し、展示を通して民族表象をいかに政治的に構築しているかを検討している。また、アイヌの工芸家がアイ

ヌ文化の展示物に手で触れることができなかつた事例などを取り上げ、展示物の管理権限について論じている（出利葉 2012）。

過去20年のアイヌ文化研究において特筆すべきことは、アイヌ民族出身者が自らの文化について学術的研究を行い、博士号を取得したことである。アイヌ文化の復興や保全に尽力した故萱野茂は、自らが沙流川流域で古老から収集した情報をもとにアイヌ民族の神送りの研究で博士論文を総合研究大学院大学に提出した（萱野 2001, 2003）。千葉大学で学位を取得した北原次郎太は、アイヌの宗教や物質文化の研究を行い、『アイヌの祭具 イナウの研究』（2014）を刊行した。アイヌ衣とアイヌ刺繍の制作者である津田命子は、アイヌ衣の総合的研究を博士論文としてまとめ、総合研究大学院大学に提出した（津田 2014）。アイヌ人研究者はいまだ数少ないが、日本人や欧米人の研究者とは違った視点や立場から優れた研究を生み出しつつある（たとえば、野本 1998; Nomoto 2001）。

近年、日本人とアイヌとの歴史的関係を再考し、日本人研究者による一方的でかつ収奪的なアイヌ研究のあり方そのものや調査倫理を自省的に問い直し、新たなアイヌ研究に向かおうとする動きが認められる（北海道大学アイヌ・先住民研究センター編 2010）。調査のあり方や方法にも変化が見られ、日本人研究者とアイヌの人びとが協働して行うことも多くなってきた（たとえば、山崎・伊藤編 2012; Iwasaki-Goodman and Nomoto 2013）。このように日本におけるアイヌ文化研究は新たな局面を迎えつつある。

サハリンのアイヌやニヴフについても1990年代に新たな展開が見られた。大塚は、サハリン島での調査をもとにニヴフによるアザラシの捕獲と利用、送り儀礼について民族誌的報告を行った。とくに、この送り儀礼について8世紀から12世紀に栄えたオホーツク文化に起源を持つという仮説を提起している（大塚 1994）。また、長田英己は、1993年末から1994年10月にかけてサハリン島北東海岸に居住するニヴフの氏族経営体<sup>10</sup>ケツクルヴォの活動を調査し、ペレストロイカ後の漁撈や狩猟などの生業活動について報告している。その中で捕獲物の多くは自家消費されているとともに、飼いイヌのエサとして利用されていること、また、自家消費量以上の多くの魚類をロシア人との物々交換の品としていることが報告されている（長田 1999）。北海道立北方民族博物館に寄贈された言語学者服部健の資料を基にしたニヴフの布地や毛皮の縫い方に関するユニークな研究も存在している（白石・笹倉 2007）。

和田完は、ピウスツキが書き残したサハリン・アイヌのシャーマニズムとクマ祭りに関する論文を日本語に翻訳し、自らの論考とともに出版した（和田編著 1999）。田村将人（2006, 2007, 2011）は20世紀前半の樺太アイヌの村落や集住化政策、日露戦争への樺太アイヌの反応について研究成果を出版している。ブルース・グラント（Bruce Grant）は、1925年ごろにソ連の社会主義体制に取りこまれてから、ペレストロイカ期をへてソ連が崩壊するまでの約70年間の間に国家の諸事業がニヴフの伝統や民族アイデンティティをどのように創り出したか、また再構築してきたかを論じている（Grant 1995）。

日本では、サハリン在住のタチヤーナ・ローンによる、18世紀から20世紀半ばにおけるサハリンのウイルタの経済と物質文化に関する歴史民族学的研究が日本語に翻訳され、出版された（ローン 2005）。笹倉はウイルタの刺繍や儀礼用首飾りについて紹介している（笹倉 1998, 2009）。井上紘一は、サハリン島で見られた過去100年の間に見られたウイルタのトナカイ飼育の盛衰について1930年代から1950年代までの繁栄期と、1960年代以降の衰退期の2つの時期に分け、報告している。トナカイ飼育の衰退は、1970年代以降のサハリン島東海岸での油田開発やそれに伴う環境破壊、1980年代末のソ連体制の崩壊とその後の経済的混乱などによって引き起こされてきたことを論じている（井上 2009）。また、サハリン大陸棚での石油・天然ガス開発がどのような影響を先住民に及ぼしたかについても2000年秋に実施された現地調査に基づき報告している（井上 2003）。

クォンは、狩猟とトナカイ飼育に従事しているウイルタの狩猟技術について調査し、狩猟はそれ自体、人びとの生き方の象徴となっており、イデオロギー的な構築物であると主張している（Kwon 1998）。また、田村将人（2013）は、第2次世界大戦後および冷戦期におけるサハリン先住民ウイルタおよびニヴフの日本への移住やソ連連邦内への残留について調査し、彼らの移動に関して興味深い研究を行っている。移住も残留も、さらには帰国も先住民民族にとっては厳しい現実であったことが分かる。

## 8.2 極東地域

1990年代からユーラシア大陸極東地域のアムール河流域において日本の文化人類学者や考古学者が現地調査を実施してきた。佐々木史郎は、18世紀から19世紀にかけてアムール河下流域とサハリン島でウルチやニヴフの祖先であるサンタン人らが北海道アイヌや中国人商人を相手におもに絹と毛皮の交易活動に従事していたことを歴史資料に依拠しつつ復元し、その地域の先住民が単なる狩猟民や漁撈民でなかったことを例証した<sup>11)</sup>。そしてその交易活動が、ロシアの進出と近代化政策の実施によって衰退していったことを描き出した（佐々木 1996, 1997a）。

さらに、佐々木（1997b）は、極東の狩猟採集民ウデへの狩猟の変化について報告している。ウデへは、清朝による支配によって東アジアの交易システムに組み込まれ、クロテンやギンギツネ、カワウソの毛皮および麝香や鹿の枝角、熊の胆嚢などを交易品とするようになった。その後、1860年の北京条約によって沿海州地域がロシア帝国領になったため、ウデへは中国の社会経済システムを脱して、ヨーロッパ的な社会経済システムの中に編入された。ソ連時代にはコルホーズ化やソフホーズ化を体験したが、国家によって狩猟は保護された。その一方で沿海州における森林開発や流域地域の開発が進み、狩猟をとりまく自然環境が悪化した（佐々木 2006, 2015a）。そして1991年のソ連崩壊後には、資本主義経済が導入され、国家による保護も無くなったため、狩猟活動に依存するウデへの人びとは存続の危機に直面することになった。しかし、佐々木は、ウデへに

とって狩猟活動は社会的威信を伴う活動であり、アイデンティティの源泉でもあり続けていると主張している。また、沿海州の毛皮獣用の罨猟の技術についても紹介している (Sasaki 2000, 2009)。さらに、ウデへの聖なる場所や狩漁の主に関する研究 (Sasaki 2011) や社会主義体制のもとでのウデへの人びとの近代化体験に関する研究 (Sasaki 2010) も行っている。

近年、佐々木は沿海州の文化領域をナラ林文化の一つとして位置づけ、研究しようと試みている。さらに、中国黒竜江省のナナイの歴史表象と文化表象を研究することによって、人類学や民族学による歴史研究の方法論や民族誌の内容の通時的相対化の問題を検討している (佐々木 2015b)。

民族考古学者の佐藤宏之は、1994年から1996年にかけてウデへの狩猟文化に関する民族学・歴史学・考古学・言語学的調査を組織し、実施し、その成果を公刊している (佐藤 1996; 佐藤編 1998ほか)。また、その後、2004年まで同地域で民族考古学的な調査を実施し、伝統的な生業システムと居住形態の関係を明らかにしている (大貫・佐藤編 2005)。この調査隊の一員であった田口洋美 (2002) は、沿海州地域とアムール河流域のウデへ、ナナイ、ウルチの狩猟漁労活動と、東シベリアのヤクートやエヴェンらの狩猟漁労活動について比較研究を行っている。

北海道開拓記念館 (現北海道博物館) は、1999年度から5年計画で「北の文化・交流事業」を開始した。この事業の目的は、中国黒竜江省およびソ連邦極東地域の博物館や研究所と提携し、中国黒竜江流域からソ連邦アムール川流域、そしてサハリンを経て北海道につながる壮大な民族の道の文化交流を明らかにすること (北海道開拓記念館編 1991: 5) であった。この第1次事業では、オホーツク文化と山丹交易の解明がおもな目標であった。この事業の終了後、第2次プロジェクト「北の文化交流事業」、第3次プロジェクト「18世紀以降の北海道とサハリン州・黒竜江省・アルバータ州における諸民族と文化」、第4次プロジェクト「北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史」や第5次プロジェクト「北方地域の人と環境の関係史についての研究」が実施され、北海道、サハリン島、千島、沿海州地域の先住民族文化に関する研究が活発に行われてきた (北海道開拓記念館編 1991, 1995, 1998, 2003, 2005, 2008, 2020, 2013)。たとえば、その成果のひとつとして、手塚と水島はハバロフスク地方のエヴェンキやネギダール、オロチの植物利用について出版している (手塚・水島 1997)。

### 8.3 カムチャツカ半島・チュコト半島地域

カムチャツカ半島では、谷本一之を中心とした先住民族の芸能に関する調査が1990年代に開始され、その後、大島稔や渡部裕によってコリヤークやイテリメンについての研究へと継続されていった (谷本 1992, 1994 1998)。また、谷本は、シベリアのユピートやチュクチの音楽や舞踏に関する調査を実施した (谷本 2009)。大島稔は、1990年代に

カムチャツカ半島およびその周辺のコリヤーク村落をほぼくまなく踏査し、民族芸能や言語、生業活動、社会変化に関する調査を行った(大島 1995, 1998a, 1998b, 1998c, 2002a, 2002b, 2002c, 2004, 2005; Oshima 1997, 1999, 2000a)。1990年代前半から半ばにかけて谷本や大島の調査隊に参加した岸上は、コリヤークの宗教(岸上 1995, 1997a)やエツソ村のコリヤークとエヴェンの生業、狩猟儀礼、命名や名前、民俗暦、信仰について調査を実施した(岸上 1997b; Kishigami 1998)。2000年代に入ると、スイス出身のP. プラテ(Plattet)が、カムチャツカ半島西岸のレスナヤ村およびその周辺に住む海岸コリヤークとトナカイコリヤークの間で儀礼や信仰、葬儀などに関する調査を実施し、発表している(Plattet 2003, 2005, 2011; Plattet and Vaté 2008)。言語学者の呉人恵は、気候条件がきわめて厳しいにマガダン州北部に住むトナカイ遊牧コリヤークが植物を食物や生活用具、燃料、薬、染料、儀礼、遊びなど多様な用途で利用していることを報告している(呉人・齋藤 2005)。笹倉いる美(1996)は、コリヤークの守護神やお守りについて報告している。

煎本孝は、カムチャツカ半島北部の付け根にあたるコルフ(Korf)やパハチ(Pakhachi)周辺のトナカイ・コリヤークの間で現地調査を1991年から2001年にかけて2度、実施し、トナカイの供犠やトナカイ・コリヤークの一年の暮らし、婚姻、世界観、儀礼と祭り、生活や社会の変化などについて報告している。煎本は、トナカイ・コリヤークがその生態と世界観を結びつける儀礼を通して、自然と宇宙における生と死の永遠の循環の中で生きていることを明らかにした(煎本 2007b; Irimoto 2004b)。

P・レスマン(Rethmann)は、1992年から1994年までの約14カ月間、カムチャツカ半島北東部でトナカイ牧畜に従事するコリヤークの村でおもにコリヤークの女性について調査を行い、彼女たちがコリヤーク人とロシア人の男性双方から飲酒問題や性的行動について女性であるという点から社会的に軽視され、排除されているという社会的不平等の実態の解明を試みた(Rethmann 2000a; 2001)。また、コリヤークの女性が男性に恋人となってもらうために求愛する時に、彼女らが男性に送るトナカイ皮製や皮革製の手作りの贈り物の意味を研究した。レスマンは、その贈り物は欲望を喚起し、魅力的な主体を創り出す具現化されたメタファー(embodied metaphor)であると主張している(Rethmann 2000b)。さらに、ポストソ連期の文化を人類学的に研究する意義を検討している(Rethmann 1997)。

A・キング(King)は、1995年夏からカムチャツカ半島でコリヤーク文化に関する現地調査を開始した。彼の専門分野は言語人類学や口頭伝承研究である。彼の研究のユニークな点は、彼がコリヤークの日常生活を参与観察し、その結果を民族誌として書くというのではなく、コリヤークの文化について彼ら自身による語りに関する民族誌的研究であることである(King 2011)。たとえば、コリヤークのダンスについて、学校教育では教師による権威的な文字化された語りが存在する一方、実際のダンスについての教

師や学生による無意識な語りの中から、キングはダンスを含む現在のコリヤーク文化がよりダイナミックであることを例証している。彼は、エドワード・サビアの「真の文化」とは伝統を実践することによって常に作り続けられている、という見解に賛意を示している。このほか1900年から1901年にかけての冬季に蠟管に録音されたコリヤークの2つの語りに関して民族詩学理論 (ethnopedics theory) の視点から詳細な分析を行った研究 (King 2013a) やコリヤークの霊界についての語りの分析研究 (King 1999)、トナカイ牧畜に従事するチュクチやコリヤークの語りから、彼らにとってトナカイは彼らの文化の指標や象徴であることを分析した研究 (King 2002) などがある。現在、キングはコリヤーク語を記録にとどめることを目的とする調査プロジェクト「コリヤークの民族詩学-牧畜民や沿岸部居住者からの話」を実施中である (King 2013b)。

D・ケスター (Koester) は、ソ連崩壊後のカムチャツカ半島のイテリメン社会で音楽、政治的なアイデンティティ、宗教復興、狩猟やサケ漁、消滅の危機に瀕している言語保全、映像記録などさまざまなテーマについて調査を行ってきた (Koester 2011, 2012; Koester and Niglas 2011)。また、イテリメンの教育者であったタチアナ・ペトロヴナ・ルカシキナ (Tatiana Petrovna Lukashkina) のライフヒストリーを記録する作業を行っている。ロシアとその社会支援制度が崩壊した後の1993年にコヴランのイテリメンの人々が彼らの窮状を訴えた手紙を、ロシア政府でなく、国際連合に送ったことを事例として、彼らの先住民運動や先住権への関心が地域や国を超えて国際化、グローバル化しつつあることを論じている (Koester 2005a, 2005b)。

ヴィクトル・シュニレルマンは、イテリメン社会がロシア人と接触する18世紀初めごろには、効率的な生業経済を営み、比較的高い人口密度をもつ大規模集落を形成していたと指摘している。また、彼らは新たにパートナーを作ることや婚姻によって集落間の人間関係を拡大させていた。これらの点を総合し、接触前後のイテリメン社会にはすでに萌芽的な階層分化が始まっていたのではないかと指摘している (シュニレルマン 2002; Shnirelman 2001)。

渡部裕は、1997年から2009年にかけて、そして2012年にカムチャツカ半島において (1) 先住民の生業活動およびそれらの活動に関連する儀礼、(2) 日露講和条約発効から太平洋戦争期に至るまでの間の日本人漁業者と先住民の文化接触、(3) 先住民社会への国家の政治経済体制の諸影響について調査を実施した。渡部は、ペレストロイカ後の経済体制崩壊による経済的混乱期であった20世紀末のカムチャツカ半島の先住民社会において生業の状況について調査している。多くの先住民が狩猟やサケ漁など漁労、採集や栽培によって食料を調達して生活を維持している一方、トナカイ飼育は衰退の一步をたどっていることを報告している (渡部 1999, 2000)。また、トナカイ飼育の衰退には地域差が見られる点やトナカイ肉は先住民経済の中では食料や現金収入源としてあまり重要でない点を指摘している (渡部 2000: 83)。

北洋漁業の展開に伴い明治時代後半から第二次世界大戦末まで、カムチャツカ半島において多数の日本人がサケ漁や加工労働に従事した。その数は、1913年（大正2年）には1万2千人ほどに達し、その後も増加した。この結果、1920年代までカムチャツカ半島の人口において日本人は先住民とともにその大部分を占めていた。渡部は、先住民と日本人漁業従事者との文化接触のあり方について聞き取り調査をもとに再構成している（渡部 2001, 2003）。さらに渡部は、カムチャツカ先住民社会におけるソ連体制下での集団化や集落再編およびそれらの諸影響について調査し、集団化の試みは人々の心理的ストレスを増大させたことや、環境との歴史的なつながりを断ち切ってきたことを指摘している（渡部 2006, 2012: 50）。

上記の課題以外にも渡部は、ソ連期およびポストソ連期における先住民経済の変化（渡部 2002）、現金収入を得るための毛皮獣狩猟と伝統的な食生活を維持するための海獣狩猟の重要性（渡部 2004）、ソ連体制下でのトナカイ飼育産業の展開（渡部 2005）とポストソ連期のトナカイ飼育の現状と課題（渡部 2007, 2008a）、先住民によるサケ資源の利用とあり方（渡部 2008b）、ベレストロイカ以降の先住民社会の動向と将来（渡部 2010）、先住民文化を対象としたツーリズムの現状（渡部 2009）に関する調査を進めてきた。これらの研究の総括として、「伝統的資源利用のあり方からみたカムチャツカ先住民社会と政治・経済体制との関係」（渡部 2015）を出版している。

チュコト半島にはチュクチやユピート（ユピック）が居住している。近年、ロシア人を含む欧米人が調査を実施し、成果をあげている。最新の情報は、2007年の『イヌイット研究』（第31巻1・2号）の特集号「チュコトカ」に掲載されているが、文化変化、宗教運動、強制移住、ハンターとアーティスト、食事の変化、土地利用、先住民運動、言語とアイデンティティ、言語、儀礼、トナカイ牧畜、衣文化、伝統的知識など多様なテーマが研究されている（Csonka ed. 2007）。このほかに、アンナ・ケルツラ（Anna Kerttula）、イゴリ・I・クルプニク（Igor I. Krupnik）、ニコライ・B・ヴァフチン（NiColai B. Vakhtin）、ペティ・A・グレイ（Patty A. Gray）らが現地調査を実施している。グレイは、ソ連崩壊後のチュコト半島における先住民運動やトナカイ牧畜について報告している（Gray 2000, 2005）。ケルツラは、トナカイ・チュクチとユピートの環境をめぐる在来知を調査し、「ツンドラ」と「海」がそれぞれの民族集団にとって根源的なメタファーとして機能しており、それらに基づいて自らの世界観やアイデンティティが構築されていることを解明した（Kerttula 1997, 2000）。

クルプニクとヴァフチンは、チュコト半島のチュクチとユピートの環境をめぐる土着的知識の変化について調査し、「線状変換」と「混成変換」が存在することを指摘した（クルプニク・ヴァフチン 2009; Krupnik and Vakhtin 1997）。線状変換とは、ある文化の中核的シンボルや価値観を重要なものとして極端に強調することにより、超越的な価値のレベルまで高め、その持続を明瞭に提示するような変化である。トナカイ・チュクチ

におけるツンドラやトナカイが彼らの世界観の中で急激に重要になったような変化がこれにあたる。一方、混成変換とは、文化に関する情報が極度に欠落する場合に、他の文化伝統から借用したモノやアイデアで充填するような変化である。ユピートが海棲哺乳動物を捕獲するのは、それが「われわれのエコシステム」であるからと彼ら自身が発言するようになった変化がこれにあたる。チュクチ社会を研究したヴァテは、同社会はトナカイ牧畜の民と海獣狩猟の民から構成される二重社会であるが、この社会が長い間、分裂せず、統合状態が保持されてきたのは、交換と婚姻、儀礼を通して両者が結びつけられてきたからだと指摘している (Vaté 2005)。

チュクチのシャーマニズムやロシア帝国への抵抗の歴史に関する研究は存在するが (荻原 1992; 黒田 1992)、第2次世界大戦以降1990年代後半に至るまで、谷本一之を例外として日本人による現地調査はほとんど行われていなかった。池谷和信は1990年代後半から2000年代初頭にかけてチュコト半島でトナカイ遊牧や捕鯨について調査を行っている<sup>12)</sup>。1997年の現地調査をもとにチュクチのトナカイ牧畜は旧ソ連の崩壊後もソフォーゾが維持されており、生産牧畜であると同時にかつての遊牧形態が認められると報告している。さらにシベリアにおけるトナカイ牧畜を、上記の特徴を持つチュクチやコリヤークのような牧畜型、ウイльтаやエヴェンのような生産遊牧を中心とする飼育型、個人所有のトナカイの割合の多いネネツのような遊牧型に分け、比較考察を行っている。チュクチの牧畜は、他のタイプと比較すると、「伝統的」なツンドラ牧畜の形態が残っている点と国有化の影響が根強く続いている点に特徴があるという。チュクチの牧畜の将来については明言できないが、彼らは国家に管理されつつも、牧畜テリトリーの再編や近隣集団との婚姻などによって変化に主体的に対応してきた点を強調している (池谷 1999: 26-27; Ikeya 2001: 97-98)。また、チュクチの牧畜の変化とアイデンティティについて論じている (池谷 2007a; Ikeya 2004)。さらに、池谷はチュクチ半島ロリノ村でコクジラ鯨の調査を行い、捕鯨の実態を報告するとともに、地域経済における捕鯨の意義や捕鯨の経営体について報告している。狩猟集団は、公的企業「ケベル」の職員から構成されていることや産物の鯨肉や脂などは村人の食用や油用、イヌや飼育キツネの餌に利用されていることなどを報告している (池谷 2006, 2007b)。回遊するコクジラは、出現の予測が難しいため、狩猟テリトリーを形成することに意味が無い点も指摘している (池谷 2007c: 106-109)。

ラーネ・ヴィラースレヴ (Rane Willerslev) は、ユカギールの中で6カ月にわたり現地調査を実施し、ソ連崩壊後に森林地域で自給自足の生活に戻った人々の民族誌を書いている (Willerslev 2004, 2007)。彼は、ハンターが動物や「超自然的存在」と取り結ぶ関係について報告し、検討を加えている。たとえば、彼らはオオヘラジカに人格を認め、その形姿をまねることによって、それをひきつけ、狩猟する様を描き出している。このことを理解するためには、現象学的な知見に頼りながら、ミメーシスの概念を導入し、

世界と同化しつつも、同時に自己を再帰的に差異化するような存在様態として理解することの必要性を説いている。本書は、理論的に「存在論的転回<sup>13)</sup>」の一翼を担うものと見なすことができ、彼の研究は現代人類学の潮流のひとつを代表していると考えられる。また、同氏は地球温暖化がユカギールの狩猟活動や生活に及ぼす影響について研究し、地球の温暖化に由来する生態系の変化は、彼らの生業活動やそれに関連する世界観に大きな変化をもたらさなかった点を指摘し、生態条件の変化が文化様式を変化させるという従来の見方に異を唱えている (Willerslev 2012)。

#### 8.4 アラスカ地域・アリューシャン地域

アラスカでは、1960年以降岡正雄や蒲生正男、祖父江孝男、谷本一之、岡田宏明、岡田淳子、宮岡伯人、小谷凱宣らの日本人研究者がアラスカ・エスキモーについて文化人類学や考古学、言語学、民族音楽学の研究を実施し、多大な業績をあげてきた (宮岡 1978, 1987; 1992; 岡田淳子 1999; 岡田淳子編 2000; 岡田宏明 1994; 岡田宏明・岡田淳子編 1992; 祖父江 1972; 谷本・森田 1992; 渡辺・岡・杉原編 1961; Gamo 1980a, 1980b; Kotani and Workman eds. 1980; Okada and Okada 2000)。また、1970年代以降、アリューシャン列島に住むアリュートについてはスチュアートヘンリや大島稔が民族学調査や言語調査を実施してきた (スチュアート 1987b, 1993a; Oshima 1994)。これらの研究については別稿 (岸上 2005; Kishigami 2004) で紹介したので、ここでは1990年代以降に同地域で展開された日本人研究者による主要な研究を紹介する<sup>14)</sup>。

アラスカ北西地域の沿岸部と内陸部には、イヌピアットが居住している。E・バーチ (Ernest Burch, JR.) と R. スペンサー (Robert Spencer) は1950年代後半以降、同地域で調査を実施し、民族誌や多数の研究成果を発表した。とくにバーチは、イヌピアットの家族と親族、その他の社会制度、狩猟・漁撈や交易、同盟と戦争、世界観などの多様なテーマについて調査してきた (Burch 1975, 1998, 2005, 2006)。彼の研究は、晩年の3冊の著書に集約されている。『北西アラスカのイヌピアット・エスキモー・ネーションズ』(1998) では、1800年代のイヌピアット内の諸集団の活動領域と活動内容、また諸集団間の同盟関係や交易、紛争について詳細に報告している。『同盟と紛争』(2005) では、1800年代のイヌピアットは、孤立した狩猟採集民ではなく、すでにロシアや他の先住民民族集団と交易や戦争に従事しており、毛皮交易などを通して世界システムの一部となっていたことを詳述している。そして『北西アラスカにおける社会生活』(2006) では、1800年代のイヌピアット・ネーションを物質文化から親族、経済活動、世界観に至るまでが統合された社会として、民族誌的にかつ体系的に記述している。これらの著作は、イヌピアットの社会と文化に関する基礎的な学術情報であるといえる。社会と環境との相互作用に着目しながらイヌピアットの伝統的社会を再構成した R・スペンサーの『北アラスカ・エスキモー』(1959) とともに基本文献である。

ノーマン・チャンス (Chance 1990) は、北西アラスカ地域におけるランドクレームの締結と石油開発などの影響を民族誌として書き上げた (Chance 1990)。また、G・シーハン (Sheehan) は、同地域の捕鯨は1200年頃から1800年代前半まで社会の経済的かつ文化的な基盤であり、人々の生活は捕鯨を核として組織されていたことを例証した (Sheehan 1997)。1980年代からは、バーバラ・ボードンホーン (Bodenhorn) がバローで家族や親族関係、食物分配や捕鯨、捕鯨キャプテン夫妻の役割などに関して調査を行った (Bodenhorn 1988, 1989, 1993, 2000a, 2000b, 2003, 2005)。捕鯨において捕鯨キャプテンよりもクジラを惹きつけるという彼の妻が象徴的に重要な役割を果たしている点をイヌピアットの世界観に基づいて解明したことで、彼女は高い学術的評価を得ている (Bodenhorn 1990)。

21世紀に入ると、この地域ではイクタヒロコ、榊原千絵、岸上伸啓ら日本人の文化人類学者や地理学者がバローやポイント・ホープで現地調査を行っている。イヌピアットのダンスの研究を専門とするイクタヒロコ (Ikuta 2004) は、約70年の中断を経て1988年に復活され、その後2年に1度の頻度でバローにおいて実施されている「使者祭」を調査し、それが伝統を再生させ、再評価する場となっていることを例証している (Ikuta 2007)。また、セント・ローレンス島のユピギート (Yupiget) の伝統的ダンスも調査し、イヌピアットの伝統的ダンスと比較している。両者のダンスは、それぞれ身体化された知識のシステムであり、動きを通して人々が環境について知っていることや彼らと環境との関係のあり様を反映していると指摘する。より具体的には、それらのダンスには、狩猟や漁撈の動作、男女の役割差、日常生活における慣習的行為や所作が表象されている。そして彼らのダンスは、アラスカにおける先住権を主張するさまざまな政治的場面において、人々が援用する政治的象徴装置もしくは表出手段となっていると主張する (Ikuta 2011)。

地理学者の榊原千絵は、2004年から2007年にかけてポイント・ホープとバローにおいてイヌピアット社会への温暖化の影響について調査し、気候変動の影響が出ている現在でも、クジラおよび捕鯨とそれに関連するさまざまな活動が「クジラの民」イヌピットの生活とアイデンティティの根幹をなしていると主張している。1977年にポイント・ホープ村は、海水面の上昇、海岸部の浸食、頻発する水害や嵐のために、その位置を標高のたかい場所に移動せざるを得なかった。榊原はポイント・ホープ村の移動についての語り (storytelling) を吟味し、物語を通して消えゆく場所との関係を維持させており、環境変化に対処する手段になっていると指摘している (Sakakibara 2008)。また、イヌピアットの表出文化や音楽実践、パフォーマンスなどへの気候変動の影響について調査し、クジラと人々の関係にどのような影響を及ぼしたかについて報告している。彼女は、イヌピアットはドラム音楽を作ることを通して情緒や文化的なレベルで温暖化に由来する変化に対処し、クジラとの関係を維持させようとしてきたことを例証している (Sakakibara

2009)。さらに気候変動によって将来の不確実性が高くなった現在、イヌピアットの人々はクジラとの関係をさらに強めることによって困難を乗り越り、文化的アイデンティティを維持・強化していると述べている (Sakakibara 2010)。

岸上伸啓は、2006年から2013年にかけてアラスカ州バローでクジラの肉や脂皮の分配について解明するために捕鯨活動、捕鯨集団の社会組織、捕鯨に関連する祭りや祝宴、気候変動の捕鯨に及ぼす諸影響などについて現地調査を実施した (岸上 2007, 2009, 2011, 2012a, 2012b, 2012c, 2013, 2014a, 2014b, 2015; Kishigami 2010, 2013b)。この結果、以下のような点を明らかにした。(1) 捕鯨および捕鯨に関連する諸活動は現在のバローの人々の生活やアイデンティティにとって基盤をなすものであり、文化・社会的に重要である。(2) 鯨肉や脂皮の分配のやり方には同じ村の捕鯨キャプテンによっても差異があるとともに、通時的にも簡略化が見られる。また、村が異なれば、分配のやり方が異なる。しかしながら捕鯨とその後の分配によってのみ、鯨肉と脂皮は村人の口に入るという点において重要な社会制度であり続けている。(3) 「先住民生存捕鯨」(Aboriginal Subsistence Whaling) としてのこの捕鯨には、商業性が認められておらず、産物を売買し、現金収入を得ることができない。その一方で、捕鯨を実施するためには、多額の資金を必要とする。現在、彼らが資金を調達できるのは、地域内の賃金職からの収入と石油開発からの配当金があるからだと考えられる。(4) 地球の温暖化による捕鯨の困難化や動物福祉団体や環境保護団体による反捕鯨活動の増大化が捕鯨の存続に負の影響を及ぼしている。岸上は、これらの成果を基に現代イヌピアットの捕鯨文化に関する報告書や論文、民族誌を出版している (岸上 2012a, 2012b, 2012d, 2014c; Kishigami 2013a, 2013c)。

アラスカ西部沿岸から西南部沿岸にかけて分布するユピート (ユピック) 文化については、1976年から1977年にかけてネルソン島で現地調査を行ったA・フィエナップ=リオードン (Fienup-Riordan) は、象徴論および構造論的な視点から優れた民族誌を出版している (Fienup-Riordan 1983)。また、生業、儀礼、仮面ダンス、名前、動物と人間の関係や人格を持つ動物についても深い洞察を行っている。そして彼女は、その後も継続して現地の古老との協働調査を進め、儀礼や語りを記録に残してきた (Fienup-Riordan 1986, 1990, 1991, 1994, 1995, 1996, 2000a, 2000b, 2001; Fienup-Riordan and Rearden 2005; Fienup-Riordan, Meade and Rearden 2005; Fienup-Riordan, Jammie, and Rearden 2007; Fienup-Riordan and Kaplan 2007)。同氏の研究は、現地の古老との協働の成果である。それは民族誌的に重要であるのみならず、ソースコミュニティの文化の継承活動にとっても、きわめて重要な情報であるといえる。その一方で、同氏の研究には「伝統文化」を固定化し、美化する傾向が認められる。

ユピック文化の研究については、セント・ローレンス島にある捕鯨コミュニティ、ガンベル (Gambell) における伝統的な信仰や価値観、キリスト教など宗教、家族やクランのきずな、そして過去や精神世界と深くつながる生業生活、女性の役割などに関するジ

ヨレスの研究 (Jolles and Oozeva 2002) や南西部アラスカのユピックの語りや言語表現、アイデンティティに関するモローとヘンセルの研究 (Hensel 1996; Hensel and Morrow 1992; Morrow 1990) などが存在している。

日本では、久保田亮がアラスカ西南部のチュピック村落で舞踏 (ダンス・パフォーマンス) や生業、学校教育、金鉱開発を事例として、社会変化および「伝統文化」やアイデンティティの継承に関する民族誌的調査を実施した (久保田 2005, 2006a, 2006b, 2008, 2009a, 2009b, 2012)。また、最近では、研究者が採録した歌をいかに現地に還元し、活用するかという研究 (久保田 2011) や気候変動が漁撈活動に及ぼす研究<sup>15)</sup> (久保田 2013) を発表している。久保田は、現代チュピック社会の舞踏や生業、生き方をキリスト教の宣教活動や連邦政府、資源開発、気候変動などとの関連で理解し、記述、分析し、調査村では伝統的な舞踏や生業活動が継承され、アイデンティティの維持に貢献していることを報告している。しかし、この自律的生活も彼の調査によれば、問題が無いわけでは無い。たとえば、チュピックの学校教育を例にとると教育方針や内容では自律化が進み、文化遺産プログラムを通して伝統文化の継承が行われてきた。しかし、その自律とは連邦政府の政策によって大きく翻弄されてしまう可能性があり、制限付きの自律であると指摘している (久保田 2009a)。彼の民族誌的記述は、現実を批判的に見るという点に特徴がある。

高野孝子はアラスカの中央ユピックの集落、ロシアン・ミッション村で先住民の教育プログラムに関する調査を行った。同村では2001年から学校教育に狩猟や漁撈を取り込み、生徒と大地 (自然) とのきずなを生みださせる教育プログラムを導入した。高野によると、その導入の結果、学校と地域社会との間にあったギャップはふさがり、子どもたちの自尊心やアイデンティティの育成を促進したと報告している (高野 2010)。高野の研究は、人類学の視点や調査方法を援用した教育学的研究といえる。研究の成果を学校教育の改善に応用することができるという意味で、広義の応用教育人類学的研究ともいえる。このような新しい視点からの先住民研究は、既存の研究への刺激となり、新たな研究を生み出す可能性がある。近年、一戸恒人がアラスカ州セント・ローレンス島でシベリア・ユピックの狩猟活動やそれが行われる「場」について風土論的な視点から現地調査を行っており、今後の展開が期待される。

手塚薫は、2003年から2005年までの期間にコディアック島のコディアックとオールドハーバーでアルティークのサケ漁および漁獲物の利用と流通について調査を実施し、その現状や資源管理のあり方を検討している。アルティークの人びとにとってサケは商業漁業の対象であるのみならず、自家消費食料や他所に住む家族や親族への贈り物として重要であることが指摘されている (手塚 2008)。高野孝子 (2009) は、現在のコディアック島において、失われつつある子どもと自然のきずなを回復させることを目的とする先住民の教育プログラムを紹介し、アイデンティティ構築の視点から検討を加えている。

アリュート研究についてはW・ラフリン (Laughlin 1980) の民族誌<sup>16)</sup>が有名であるが、その後、数十年、文化人類学的研究がほとんど行われてこなかった。最近ではK・L・レーディ＝マシュナー (Reedy-Maschner) がアラスカのキング・コーブ (King Cove) で調査を行い、東部アリュートに関する現代民族誌 (Reedy-Maschner 2010) を出版している。21世紀のアリュートの生活には、脆弱な水産業をめぐる国際政治や環境問題、政府の政策、市場要因が深く係わり、商業漁業が深く浸透している。彼らの商業漁業の参加や成功は、彼らの誇りや家族のきずな、食料、現金収入の源泉となっているという。また、商業漁業へ参加するために、生業活動への参加があまり盛んではない。彼女は、商業漁業における(富と権力、威信などからなる)地位構造が、どのようにアリュートの個人やコミュニティのアイデンティティを形作り、彼らの社会関係の基盤となっているかを分析し、商業漁業の参加や成功が彼らの文化的アイデンティティの形成や維持にとって不可欠であることを例証している。彼女は、アラスカの先住民性は「生業」と不可分に関係しているという従来の見解に反論するとともに、「伝統」は同時代的な脈絡に即して考えるべきであり、商業漁業も彼らの「伝統」の一部であると主張している。日本ではスチュートヘンリ (1987b, 1993a) がアリュートのミイラ<sup>17)</sup>について、大島稔が言語や生業、民族接触について研究 (大島 1984, 1989; Oshima 1982, 1994, 2000b, 2003) を行っている。また、岡田 (1997) はロシア領時代のアリュートの文化変化について報告している。

井上敏昭は、アラスカ内陸部にあるグイッチンの村落で調査を実施し、同社会におけるポトラッチ儀礼やビーズワーク、狩猟や獲物の分配がアイデンティティ構築に深く関わっていることを解明した (井上 1996, 1999, 2003a, 2007; Inoue 2001)。また、井上はグイッチンによる石油開発反対運動や石油開発・環境汚染への村人による対応について分析を行っている (井上 2012, 2015; Inoue 2004)。さらにサケ資源の社会資源<sup>18)</sup>や食料としての重要性およびその管理について論じている (井上 2003b, 2008, 2011)。井上は、サケが遡上するユーコン水系流域において、先住民政府が組織する協議会による活動を分析している。彼らが、目標として掲げられている環境改善のほかにサケ資源の管理も志向していること、それらの試みが、米加国境問題、西洋的方法論と先住民の方法論とのギャップ、先住民社会間の潜在的対立という3つの障壁となる問題を解消しようとする試みであると指摘している。近藤祉秋は、アラスカのクスコクイム川上流にあるニコライ村において、北方アサバスカン社会における動物を殺すことと生かすことを、野鳥の保護を事例として調査している (近藤 2014)。サケが遡上するユーコン水系流域の先住民社会に関する研究は、20世紀前半に行われた調査に基づいたC・オズグッド (Cornelius Osgood), R・スロボーディン (Richard Slobodin), R・マッケナン (Robert A. McKennan), R・K・ネルソン (Richard K. Nelson) などが成果 (Osgood 1936; Slobodin 1962; McKennan 1965; Nelson 1973, 1980, 1983; Diver 1995など) を出版しているが、井上や近藤の調査地

域は、1970年代以降、政治的な理由から人類学者が調査することが難しく、C・ミシュラー (Craig Mishler) や W・シメオーネ (William E. Simeone) による音楽やダンス、ポトラッチの研究 (Mishler 1993, Mishler & Simeone 2004, Simeone 1995) やアラスカ州漁業狩猟局 (The State of Alaska, Department of Fish & Game) によるサブシステム調査報告を例外として、ほとんど民族誌的な成果があがっていない。このため、井上ら日本人研究者の研究は貴重であり、アラスカ先住民社会の人類学的理解に大きく貢献すると考える。

## 8.5 北アメリカ北西海岸地域

北アメリカのアラスカ南部からオレゴン州にかけての海岸地域に住む先住民は、北西海岸先住民と総称されてきた。北アメリカ北西海岸地域の先住民文化については、フランツ・ボアズをはじめ多数の民族学的研究が実施され、数多くの民族誌が書かれている<sup>19)</sup> (たとえば, Boas and Hunt 1905, 1908, 1909; Swanton 1905)。1970年代後半以降、日本人の研究者もこの地域で調査を実施してきた。

アラスカ南西部に住むトリンギットについては、社会構造と社会生活に関する研究 (Olson 1967) や19世紀のトリンギットのポトラッチのほか、アラスカにおけるロシア正教会の歴史的展開とその200年以上にわたるトリンギット社会への影響に関する研究 (Kan 1989, 1999) などが存在する。近年では、T・ソーントン (Thornton) が「場所」に関する興味深い研究を行った。ソーントンは、トリンギットの言語や社会構造、経済、儀礼の中に認められる「場所」の概念を調査し、場所とは特定の地理的位置を示しているのみならず、個人や集団が自らを規定する独自のやり方と深く関わっていると主張している。場所とは、空間と時間と体験という3つの次元から構成されており、文化的にかつ環境的に構造化されているという<sup>20)</sup>。ソーントンは、18世紀以降の文化や環境の変化にもかかわらず、トリンギットは独自のやり方で場所や景観を概念化し、彼らの文化と関係づけ続けていることを例証した (Thornton 2008)。近年、彼はトリンギットのニシン漁やそれに関する土着の知識、公園の環境保全に関する研究を行っている (Thornton 2010; Thornton and Hebert 2014; Thornton and Kitka 2015; Thornton, Moss, Butler, Herbert and Funk 2010)。

益子待也 (1982) は1970年代半ばよりアラスカ南西部に住むトリンギットの研究を開始した。彼は死と再生をめぐる神話を吟味し、ポトラッチとは「第2の葬儀」であると指摘した。さらに、火の中に食物や毛布を投げ入れる慣行は、トリンギットの論理に従えば、富の破壊ではなく、死者に対する贈り物であると主張した。益子は、ポトラッチの意味やサケやワタリガラスの神話の分析も行っている (益子 1992, 1993, 2002; Mashiko 2006)。

多くのアラスカ先住民コミュニティは、失業やアルコール問題など深刻な社会経済問

題に直面している。しかし、例外も存在し、宣教師ダンカンによって作り出されたアラスカ南西部にあるツィムシアン<sup>1</sup>の村落であるメトラカトラ (Metlakatla)・コミュニティは安定した社会経済発展を遂げてきたことが知られている。岡田淳子は、調査団を編成し、1998年から2000年にかけて同コミュニティの社会経済発展を解明するための現地調査を実施した(岡田淳子 2000a, 2000b; 岡田淳子編 2000, 2013)。同調査では、岡田宏明(2000)がメトラカトラ住民の生業戦略、益子(2000)は伝統の創造、齋藤(2000, 2008)が観光と芸能・工芸制作活動について調査を行った。岡庭(松林)義行はツィムシアンのカナダからアラスカへの移住およびメトラカトラ・コミュニティの形成において、宣教師ウィリアム・ダンカンや教会の果たした役割について調査し、ダンカンが理想社会を実現するためのモデル(Duncan Society Model)に検討を加えている<sup>21)</sup>(松林 1998, Matsubayashi 1998; 岡庭 2000; 2004a)。また、アラスカ先住民土地請求問題処理法(ANCSA)との関連からメトラカトラの社会経済開発を論じている(岡庭 2008)。

渥美一弥は、北西海岸先住民の神話や地名、命名、自治権獲得運動、伝統文化の復興運動、学校教育、伝統文化の語り方などに関心を持ち、1980年代から現地調査を行ってきた(渥美 1991, 1996a, 1996b, 1998, 2005, 2008)。渥美(1996b)は、バンクーバー島南部に住む先住民サーニッチ(Saanich)がみずからの伝統をどのように捉えているかに焦点を合わせながら、彼らの伝統とヨーロッパ系カナダ人がサーニッチについて抱いているイメージとの関係について調査を行った。さらに1980年代以降、復興してきた神話や地名、個人名の今日的な意味について考察している。渥美は、サーニッチの主観的な伝統文化とは、カナダ主流社会との政治的相互作用の中で想像され、客体化された過去の「伝統」と新たに創造された「伝統」の両方からなっていると指摘した。その伝統の復興は、真正な先住民としてのサーニッチの存在を、カナダ主流社会に明示するためのものであった一方、それはカナダ主流社会からの集団としての認知、名付けであったと主張している。また、彼は神話や地名、先祖が製作したモノなどの民族誌「情報」を「資源」として捉えるという新たな視点からサーニッチによる文化復興活動や学校教育に検討を加えている(渥美 2005, 2008)。

サケ資源は、北西海岸先住民にとって食料資源としてだけでなく、その捕獲と利用は彼らのアイデンティティの基盤に深く関わる重要なものである。岩崎グッドマンまさみは、カナダ・バンクーバー島に住むクワクワカクウのサケ資源の利用と伝統的管理とカナダ政府による資源管理について研究した。クワクワカクウは時期を変えて川を遡上する数種類のサケを適度に漁獲しながら利用してきたが、現在のカナダ政府が認可しているサケの商業漁業は、海上でのサケの種類を考慮しない一括捕獲であり、資源量の管理ができていない点を指摘した。また、木材の搬出によるサケの産卵場所の攪乱も大問題であった。岩崎は、サケ資源の減少の遠因は、カナダ政府によるサケ資源管理の失敗やブリティッシュコロンビア州政府の林業振興策にある点を指摘した。また、政府が

認可するサケの商業漁業・養殖漁業と先住民が食料や儀礼のための生業としてのサケ漁とが両立できない状況に検討を加え、先住民の「生業」概念を再構築する必要性を主張している（岩崎 1998, 1999, 2002, 2003, 2004, 2006）。

立川陽仁は、1990年代末からカナダ・バンクーバー島のキャンベル・リバーでクワクワカクウの先住民漁民に関する民族誌的調査を実施してきた。彼は、クワクワカクウがみずから「サケの民」であるとする言説と彼らの現実の日常生活の実践との間に大きなギャップがあることを指摘し、その意味をカナダの先住民政治の脈絡の中で理解しようと試みている（立川 2004b）。このほかに、1850年頃から1920年頃までの漁撈活動を民族誌資料に基づいて再構成した上で、彼らが当時のサケの商業漁業や缶詰業に従事していたにもかかわらず、生業としての漁撈活動が存続していたことを指摘している（立川 2002a）。また、商業漁業を介して先住民の起業家が出現したことや彼らの戦略や活動について論述した研究（立川 2002b）、先住民の商業漁民の資源管理に関する考え方や政府への対応に関する研究（立川 2003）、先住民にとってのオヒョウの重要性に関する研究（立川 2006）などを発表している。さらに、先住民による現代のサケ商業漁業を支えたリクルーター制度や労働組合の内容と機能、現代の先住民のサケ商業漁師による非商業的な生業活動、先住民のサケ養殖業と養殖業協会に関する研究を行い、現代の先住民にとってのサケの経済的かつ文化的な重要性の解明を試みている（立川 2007, 2008a, 2008b, 2009, 2010）。

立川（1999a）は、ポトラッチの研究史を整理し、ネイティブ・アンソロポロジストや人類学者による対話を通じた多声的な研究の重要性を指摘している。また、立川はカナダ植民地統治期における北西海岸先住民の貴族層の衰退について研究し、ポトラッチにおけるヨーロッパ製品の利用や天然痘など外来の伝染病の流行が、いかに彼らの世界観や貴族層のランクに影響を及ぼしたか、さらにポトラッチがどのように変容してきたかを解明しようと試みた。そして、貴族層の衰退は、政治・経済的な要因のみならず、世界観の変容という宗教的な要因によっても引き起こされてきたと指摘している（立川 1999b）。立川はポトラッチについて人類学者はその意味を強調するのに対し、現在の先住民はその「型」や「形式」を重視するという、違いを指摘している（立川 2004a）。

近年、立川は、現代のクワクワカクウにおけるチーフ（首長）や歓待についての研究を行い、その成果を出版している（立川 2013, 2014）。立川の研究は北西海岸先住民の現状を民族誌的に取り扱った数少ない研究であり、今後の展開が期待される。

大貫（1977）は、北西海岸地域に見られるトーテム・ポールの機能について社会的かつ歴史的な視点から研究を行った。岡庭（2004b）は、クワクワカクウの冬儀礼であるツェカ儀礼をパフォーマンス論の視点から研究した。儀礼は、彼らの世界観を反映した表現としてのみならず、パフォーマンスとしても研究することができる。演じ手は観衆を巻き込むことが必要であるため、技能と観衆、演出の3側面を有機的に機能させる

ことが重要であると指摘している。岸上（2014d）は、バンクーバー島西海岸に住むヌーチャヌヒ（旧称ヌートカ）の捕鯨の復活の可能性について、先住権との関係から検討し、向こう20年の間の復活は難しいことを指摘した。

2013年に北西海岸地域の先住民アート研究の百科事典的集大成論集『北西海岸の先住民アート—変化する思考の歴史』（Townsend-Gault, Kramer, and Ki-Ke-In 2013）が刊行された。日本人も先住民アートを研究している。大村（1993, 2006）や笹倉（1994）は、北西海岸先住民の木製品や工芸作品、版画に描かれている図像の機能や表現、内容、造形素（基本部位）について論じている。また、齋藤らは、国立民族学博物館が所蔵している北西海岸先住民版画について研究し、その成果を出版している（齋藤・大村・岸上編 2010）。

## 9 環北太平洋沿岸先住民文化の比較研究

これまで環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関して大型研究プロジェクトや地域・民族ごとに研究を紹介してきた。この地域における比較研究については、ジェサップ調査隊プロジェクト以降、スミソニアン協会の「大陸の交差路プロジェクト」や「ジェサップⅡプロジェクト」、国立民族学博物館の「ラッコとガラス玉」展示プロジェクトなど組織的な研究活動以外にも、個人による比較研究が存在する。以下では、個人による代表的な比較研究を紹介する。

すでに渡辺仁の北洋文化圏研究については紹介したが、民族学の泰斗大林太良もアイヌのサケ儀礼や靈魂観などについて他の地域や民族の事例と比較研究を行っている。北太平洋地域、特にアメリカ大陸側のサケ儀礼については、ガンサーによる研究（Gunther 1926, 1928）が存在するが、北海道を含む日本列島や極東地域の事例については詳細さを欠いている。大林は、アイヌや本州北部住民、アムール川流域地域先住民、サハリン先住民のサケ捕獲に関する信仰や習俗を比較することによって、アムールランドから北海道を経て本州北部に至るまでのサケ儀礼を一つの連続体とみることを提案している。さらに、大林は太平洋側の北米先住民と北海道アイヌ、本州北部住民の間ではサケ儀礼が行われていることを確認し、比較することによって新旧大陸ともに「サケの主」の觀念や女性の穢れに対するタブーなどの共通する特徴の存在を指摘している。サケについての儀礼と信仰である本州の鮭の大助と鮭の小助の言い伝えは、大局的に見ると極北地域や亜極北地域に存在する動物種の主の表象と同類であると主張している（大林 1992, 1994; Obayashi 1996）。大林の研究は、北海道や旧大陸のサハリン・アムール地域の事例を追加することによって、既存の研究に厚みを持たせたといえよう。また、大林はアイヌの靈魂観を古代日本の靈魂観やサハリンのニヴフの靈魂観と比較した。その結果、アイヌと古代日本人の間には類似よりも相違が顕在化しているが、ニヴフの靈魂観とは

より類似性が見られると指摘し、北方ユーラシアの諸民族の靈魂観との比較研究の必要性を説いている（大林 1993）。さらに、比較研究を続けた結果、アイヌの靈魂観は、アムール地域や沿海州に住むツングース系諸民族の靈魂観と同一の靈魂観の領域にはいるであろうと指摘している<sup>22)</sup>（大林 1996; Obayashi 1997）。

北海道立北方民族博物館を基盤として研究を展開してきた渡部裕は、既存の民族誌を渉猟し、北海道からチュコト半島にかけての北東アジア地域に居住しているアイヌ民族やニヅフ、イテリメン、コリヤークなどの先住民の狩猟・漁撈活動を比較検討している（渡部 1992, 1994, 1995, 1996, 1997）。海獣狩猟や漁撈における捕獲技術や獲物の種類と利用方法、精神文化について民族比較を行い、アザラシ類とサケ類は北東アジア沿岸地域の諸民族にとって共通する捕獲対象であり、重要な食料資源であると主張する。また、海獣資源の捕獲と利用に着目することにより、北東アジア地域は極北・亜極北領域、環オホーツク海領域、無海水・小海水-島嶼領域の3つの文化・経済領域に分けることができると指摘している（渡部 1995: 81-83）。さらに、同地域では乾燥させて長期保存するためには含有脂肪の低いサケ類が望ましいことや乾燥したサケ類をアザラシなどの脂肪や海獣油とともに食することなどの特徴を指摘し、栄養生態類型として「サケ-アザラシ油文化圏」を提唱している（渡部 1996: 99-100）。渡部は「伝統的な」海獣狩猟やサケ漁、商業捕獲の影響については研究しているものの、同地域における海獣狩猟やサケ漁およびそれらに関連する精神文化の歴史的变化に関する比較研究は行っていない。今後の課題であるといえよう。

北海道立北方民族博物館の齋藤玲子や中田篤もそれぞれ皮革やかご編み、犬の利用や犬ぞりについて比較研究を行っている。齋藤は、北太平洋沿岸地域では植物性繊維を利用したバスケット類や籠細工、編み袋を多用する文化が連続していることに着目し、同地域の諸先住民の製品の用途や素材、繊維素材の採集・調製・貯蔵、編織の技法について比較している。そして同地域において編織文化が発達した要因として環境的に植生が豊かであり繊維素材となる植物の採集が容易である点、食料を採集、運搬し、乾燥させて保存する用具として繊維製編織物が機能上優れている点、儀礼において重要であった可能性や交易品としての重要性を指摘している（齋藤 1995: 127-128）。本研究は最終的な成果というよりも、出発点となる基礎研究である。たとえば、アラスカのユピックの籠細工とアイヌのテンキの間には技法などにおいて偶然と考えるのは難しいほどの類似点が認められるが、この類似性は何に起因するのかなど解明するべき問題が残っており、今後の研究の展開が期待できる分野である。また、齋藤は、新旧両大陸の極北地域における毛皮革の利用と技術を比較し、寒冷地域において製革は普遍的な技術であり、ツンドラ地域よりも森林樹林帯で複雑な技術が認められると指摘したうえで、製革の文化は環境や生業、素材や使用目的など複数の条件や要因との相互作用として理解されるべきであると主張している（齋藤 1998: 81-82）。

中田篤は、北方地域におけるイヌによる犬ぞりの牽引、狩猟（獲物操作）、牧畜（家畜誘導）について北方諸民族の操作技術を通文化的に概観している（中田 1998）。また、日本国内の博物館収蔵資料を用いて、北海道周辺地域の犬ぞり文化の比較を行っている（中田 2000）。北方諸民族にとってイヌは生活を営む上で重要な動物であるにもかかわらず、十分な研究が行われてこなかった。したがって、中田の研究は学問的に重要であり、時間軸と空間軸にそった体系的な比較研究が期待される。

民族音楽研究者の谷本一之は、アイヌ音楽の研究を出発点とし、1980年代以降東はグリーンランドから西はシベリア西部にいたる広大な北方地域の各地において先住民の音楽や芸能に関するフィールドワークを精力的に実施した。谷本は、新大陸極北地域での民族音楽調査の成果を加味した結果、北太平洋沿岸の諸民族の間に広く分布している太鼓のタイプは一面太鼓であり<sup>23)</sup>、環北太平洋沿岸地域は、「一面太鼓領域」と呼ぶことができるかと主張している。また、チュコト半島東端を境にして、以西が「内側把手領域」、以东は「外側把手領域」であると指摘している（谷本2009: 237）。さらに谷本は、この地域の諸先住民にとって「のど歌」は、日常性の世界から呪術と儀礼の世界に入り込む仕掛けであると述べている（谷本 2009: 244）。谷本は、環北太平洋沿岸地域の諸民族の音楽の比較についてはあまり多くを出版していないが<sup>24)</sup>、自ら採録した膨大な音響資料を残した。その資料の多くは、現在、国立民族学博物館で保管されているが、ほとんど分析や研究がなされていない状態である。今後、これらの資料が整理され、研究されることが望まれる。

近年、注目を浴びている研究のひとつに、ユーリー・E・ベリョスキ（Yuri E. Berezkin）による新旧両大陸の神話のモチーフに関する壮大な比較研究がある。新旧両大陸の諸先住民の神話の中で繰り返し登場する要素の分布状況を比較検討することによって、いくつかの興味深い仮説を提起している。たとえば、彼は、コリヤークとアラスカ南部の神話のモチーフの間には顕著な類似性が見られること（ベリョスキ 2009: 65）、新大陸のロッキー山脈以东で収集される神話のモチーフは、ユーコン川とマッケンジー川の流域を経由された可能性が高いこと、新大陸の太平洋沿岸地域に見られるモチーフは南アラスカから海岸伝いに伝播した可能性が高いこと（ベリョスキ 2009: 79）、日本、カムチャッカ半島、北米北西海岸地域と南米東部を結びつけるモチーフが存在していること（ベリョスキ 2009: 80）など刺激的な仮説を提起している。さらに、比較研究に基づいて、「原初期における人類の移住は、海岸を経由するルートだけで行われたか、あるいは海岸ルートと内陸ルートが同時に併用されることもありえた」（ベリョスキ 2009: 82）と述べ、アメリカ大陸の無氷回廊、すなわちマッケンジー・コルディレラを南下したというのが有力な仮説とは異なるものとなっている。この見解は、渡辺仁（1992）や宮岡（1992）の仮説と同じであり、きわめて興味深い。日本では荻原真子が、北海道アイヌの口承文芸をサハリン及びアムール川流域の諸民族の神話伝承と綿密に比較した大

著を上梓している(荻原1996)。彼女は北東アジアの北方民族の創成神話や兄妹始祖神話、「主」の観念、アイヌの口承文芸について記述、分析し、類型化を試み、北方民族とアイヌとの間に認められる差異と類似性を析出し<sup>25)</sup>、今後の比較研究の道を開拓した点で高く評価できる(荻原 1995, 1996)。最近では、若手の言語学者や民族学者がカムチャツカ半島、サハリン島などの先住民の水や氷、雪に関する説話を集め、出版している(山田・永山・藤原編 2014)。同書が取り扱っている地域は広域では無く限定されているが、一種の比較の試みである。

北海道大学をベースとして煎本孝と山田孝子は、北方先住民族に関する国際シンポジウムや科学研究費補助金の助成による現地調査を実施し、その成果を出版している。その中のいくつかは環北太平洋沿岸地域の先住民族文化を取り扱っている。ここでは3つの国際シンポジウムを紹介する。第1は、1991年に北海道大学で開催された国際シンポジウム「北方ユーラシアと北アメリカにおける宗教と生態」(Region and Ecology in Northern Eurasia and North America)である(Irimoto and Yamada eds. 1994)である。このシンポジウムの成果本には、アイヌらを含む北方狩猟民の動物儀礼の研究(Spevakovsky 1994; Watanabe 1994)やアイヌの動物観の研究(Yamada 1994)、古代蝦夷の年周期の研究(Obayashi 1994)、欧米人との接触が生み出したイヌピアットの土着信仰への諸影響に関する研究(Tumer 1994)、イヌピアットのハンターによる資源利用における合理性に関する研究(Burch 1994)、言語から見たユピックの世界に関する研究(Miyaoka 1994)、アイヌの狩猟行動における宗教と生態との関係に関する研究(Irimoto 1994)、アムール川下流およびサハリン地域における経済・文化類型の研究(Sasaki 1994)など、環北太平洋沿岸地域の先住民族に関する研究が所収されている。

第2は、1995年に北海道大学で開催された国際シンポジウム「北方地域におけるアニミズムとシャーマニズム(Animism and Shamanism in the North)」である(Yamada, Takako and Takshi Irimoto eds. 1997)。このシンポジウムの成果本には、アイヌの靈魂観に関する研究(Obayashi 1997)やアイヌのシャーマニズムに関する研究(Irimoto 1997)、いたこの治癒術に関する研究(Sasamori 1997)、マタギとアイヌのクマ儀礼に関する研究(Ikeya 1997)、ベーリング海峡エスキモーのシャーマニズムおよびアニミズム的信仰に関する研究(Arutiunov 1997)、中部ユピックの口頭伝承やシャーマンの活動における「手」の威力についての研究(Fienup-Riordan 1997)など、環北太平洋沿岸地域の先住民族のアニミズムやシャーマニズムに関する研究が所収されている。

第3は、2000年に北海道大学で開催された国際シンポジウム「北方地域におけるエスニシティとアイデンティティ(Ethnicity and Identity in the North)」である(Irimoto and Yamada eds. 2004)。このシンポジウムの成果本には、アイヌの人びとのアイデンティティの維持に係わるマリモ祭りに関する研究(Irimoto 2004c)や中部ユピックのアイデンティティや文化伝承に関する研究(Charles 2004; Fienup-Riordan 2004)、イヌピアット社

会の核廃棄処理場問題を事例として現代の人類学の役割に関する研究 (Turner 2004), アラスカのグイッチンの人びとの石油開発反対の集会に関する研究 (Inoue 2004), チュクチ社会における牧畜の歴史的な変化とアイデンティティに関する研究 (Ikeya 2004), 抱合語であるコリヤーク語の特徴を論じた研究 (Kurebito 2004) などが所収されている。

これら3つのシンポジウムは新旧両大陸の北方全域を対象とした研究であり, 必ずしも環北太平洋沿岸地域の先住民文化の比較研究ではないが, 現地のデータや情報が報告されている点で重要である。煎本は研究代表者として平成11年度~13年度科学研究費補助金(基盤研究B(2))「東北アジア諸民族の文化変化とアイデンティティの形成に関する文化人類学的研究」および平成12年度~14年度国立民族学博物館共同研究「周極地域のエスニシティとアイデンティティに関する研究」を実施し, それぞれ研究成果を日本語の論文集として出版している(煎本編 2002; 煎本・山田編 2007)。前者の成果出版の中で岸上(2002b)は, 渡辺仁(1992)が北洋文化圏論の中でほとんど取り扱わなかった社会構造(家族組織, 結婚にともなう居住様式, 親族集団, 長の継承, 動産の相続規則, 階層化)について北海道アイヌ, サハリン・アイヌ, ニヅフ, ウイルタ, イテリメン, 海岸コリヤーク, 海岸チュクチ, シベリアエスキモーを事例として比較検討した。その試論では, これらの先住民の間では, 父方居住や父系出自, 父系相続の傾向が強く見られることが判明した。今後の課題として時間的変化を視野に入れた社会構造の比較が不可欠である。煎本はそれまでの研究成果を総合し, 北方文化の特質は「初原的同一性<sup>26)</sup>」, 「超自然的互酬性<sup>27)</sup>」, 「共生と循環の思想<sup>28)</sup>」であると主張している(煎本 2007c)。

近年, 注目を浴びている環北太平洋沿岸地域の比較研究として, 米国サンタフェの高等調査研究所(School for Advanced Research)が主催した「サケ」をめぐるセミナーの成果本『キーストーン・ネーションズ—北太平洋の先住民とサケ』がある(Colombi and Brooks eds. 2012)。北太平洋では, サケは先住民の生存と文化的アイデンティティの基盤であり, 先住民とは歴史的に見ても切っても切れない関係である。生態学用語としてキーストーン種(Keystone Species)とは, 生態系において比較的少ない生物量でありながらも生態系に大きな影響を及ぼす生物種を指す。本書の執筆者は, サケは北太平洋において生態学的にも文化的にもキーストーン種であるという共通認識を持っている。サハリン島のニヅフ(Wilson 2012), カムチャツカ半島のイテリメンとコリヤーク(Kasten 2012; Koester 2012; Sharakhmatova 2012), アリューシャン列島のアリュート(Reedy-Maschner 2012), コディアク半島のコディアク(Carothers 2012), カナダのブリティッシュコロンビア州北部のギツァーラ(Menzies 2012), 米国スネーク川のニミープース(Colombi 2012)やコロンビア河の上流および支流を利用しているネズ・パース等の先住民グループ(Diver 2012)を事例として, いかにサケがこれらの先住民の文化や歴史, 経済において重要な役割を果たしてきたかを論じている<sup>29)</sup>。本書は, 基礎的な文化人類

学研究でありながらもグローバル化が進む現代社会における協定や管理のあり方について、サケ漁業政策に提言可能な要素を含んでいるという意味で、単なる民族誌的な比較研究ではない。この比較研究によって北太平洋沿岸地域では、先住民のサケ漁が石油・天然ガス開発やダム建設によって危機的な問題に直面していることやサケ養殖が天然サケ漁業に悪影響を及ぼしていること、サケ資源の持続可能な利用は先住民族の主権や文化的アイデンティティの存続に係わる問題であることが明らかにされている。

## 10 検討

本稿において環北太平洋地域の先住民研究に関する研究状況を整理することによって、いくつかの傾向や課題が浮かび上がってきた。ここでは、それらについて検討したい。

第1に、環北太平洋地域を研究対象とする日本人研究者の研究動向とその問題点について指摘したい。1990年代まで環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する研究は、ボアズのジェサップ北太平洋調査プロジェクト（1897-1902）以降、おもに米国人やロシア人が中心となって牽引してきたが、1990年代以降チュコト半島やカムチャツカ半島ではドイツ人やスイス人、日本人など多様な背景を持つ文化人類学者が調査を行うようになった。また、宮岡伯人の環北太平洋言語プロジェクトの展開によって、言語学分野では1990年代以降日本人研究者の活躍が目立つ（表1）。当時、現地調査を行ったのは博士後期課程の大学院生であり、現在、30歳代後半から40歳代後半となり、大学教員として活躍している人が多い。同地域における文化人類学者による調査も1990年代以降増加している（表2）。このように見ると、かなりの数の日本人研究者が、環北太平洋沿岸地域の先住民族の言語や文化を研究していることが分かる。しかしながらいくつかの問題点が存在する。

問題点の第1は、日本人の文化人類学者は研究成果を日本語で出版することが多いため、国外ではその成果がほとんど知られていないことである。たとえば、渡辺仁（1988, 1992）の研究は、本稿で紹介したように理論的に重要な研究であるが、1980年代から1990年代にかけて日本語で出版されているため、海外の文献ではほとんど引用や言及がされていない。このような状況を改善するためには、研究成果を英語やロシア語で口頭発表することや出版することが必要であると考えられる。

問題点の第2は、日本においては環北太平洋沿岸地域の先住民族を研究している言語学者と文化人類学者の間ではほとんど学術交流がないことである。宮岡伯人や大島稔らは言語のみならず、その話者の文化にも関心を持っていたが、彼らの学生たちは言語のみを専門的に研究する傾向が強く見られ、文化人類学者との対話にほとんど関心を持っていないし、交流する機会も限られている。両者が連携すれば、より視野が広く、かつ深い民族文化研究を展開できると考えられるので、学術交流や現地調査の連携が必要で

あると考える。そのためには、国立民族学博物館や北海道立北方民族博物館がイニシアティブをとり、両分野の若手研究者の間で情報や意見を交換する機会を設けることが必要である。

さらに、言語学分野では、宮岡伯人による大型調査プロジェクトによって若手研究者が多数育ったが、文化人類学分野では後継者不足が顕在化している。これは文化人類学者の多くが個人の研究プロジェクトとして現地調査を実施してきたことと、教育の場である大学や大学院にこの地域を専門とする文化人類学者の数が少なかったことに起因していると考えられる。文化人類学分野では、当該地域を専門とする若手研究者の養成は急務である。これらの3点は、われわれが克服すべき大きな課題である。

第2に、日本人の文化人類学者の研究対象地域や民族に関する傾向について指摘したい。本稿で見たように2000年代に入ると多数の欧米人の文化人類学者がチュコト半島やカムチャツカ半島、サハリン島で調査を行っているが、それらの地域における日本人研究者による調査が減少する傾向にある。その一方で、アラスカのイヌピアット社会やユピート（ユピック）社会で調査に従事する日本人研究者が増加している。日本人の若手の文化人類学者は、これまでの研究蓄積を基に、より積極的にチュコト半島やカムチャツカ半島、サハリン島の先住民文化の研究をするべきであると考えられる。

第3の研究動向として、大型の研究プロジェクトが実施されていない現状が認められる。これまでの環北太平洋地域の先住民文化の研究を牽引してきたのは、アメリカ自然史博物館のジェサップ北太平洋調査プロジェクトやスミノニアン協会国立自然史博物館

表1 環北太平洋地域の先住民族名とおもな言語学者（2015年4月1日現在）

民族名	調査者名（所属機関名）
アイヌ	中川裕（千葉大学）、佐藤知己（北海道大学）ほか
ニヴフ（Nivkh）	白石英才（札幌学院大学）、丹菊逸治（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）
ナーナイ（Nanai）	風間伸次郎（東京外国語大学）
ウイルト（Uilta）	津曲敏郎（北海道大学）、山田佳子（北海道立北方民族博物館）
ユカギール（Yukaghir）	遠藤史（和歌山大学）
コリヤーク（Koryak）	呉人恵（富山大学）、大島稔（小樽商科大学）
アリュートル（Alutors）	永山ゆかり（北海道大学）
イテリメン（Itelmen）	小野智香子（千葉大学）
チュクチ（Chukchi）	呉人徳司（東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所）
シベリア・ユピック（Siberian Yupik）	永井佳代
ユピック（Yupik）	宮岡伯人（元京都大学、元北海道大学）
イヌピアック（Inupiaq）	永井忠孝（青山学院大学）
アリュート（Alut）	大島稔（小樽商科大学）
ツィムシアン（Tsimshian）	笹間史子（大阪学院大学）
ハイダ（Haida）	堀博文（静岡大学）
ヌートカ（Nootka, Nuu-Chaa-Nulth）	中山俊秀（東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所）
海岸セイリッシュ（Coast Salish）	渡辺己（東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所）

の北太平洋展示プロジェクトやジェサップⅡなどの国際的巨大大プロジェクトであった。日本においてこの分野の研究を牽引したのは、宮岡や岡田夫妻、谷本、大島、煎本らの科研調査プロジェクトや北海道立北方民族博物館の国際シンポジウム、国立民族学博物館の国際シンポジウムや展示プロジェクトなどであった。現時点では、同地域において日本人研究者が主導する大型調査プロジェクトは実施されていない。また、1990年代から現在にかけては、地球温暖化といった環境問題が社会科学・人文分野においても最重要の研究課題となったので、この地域を研究している文化人類学者も従来の民族文化や社会の研究ではなく、地球温暖化が先住民社会にどのような影響を及ぼしたのか、歴史的に先住民社会の人々がどのような知識を持ち、どのように環境変動に対処してきたのか、また、どのような知識を生み出してきたかといった問題を研究の中心に据えるよう

表2 環北太平洋地域の先住民名とおもな文化人類学者（2015年4月1日現在）

Name of Indigenous group or Region	Names of Researchers
アイヌ (Ainu, Aynu)	谷本一之 (元北海道教育大学, 元北海道立北方民族博物館), 大塚和義 (元国立民族学博物館, 大阪学院大学), 佐々木利和 (元国立民族学博物館, 北海道大学), 野本正博 (アイヌ民族博物館), 出利葉浩司 (北海道博物館), 手塚薫 (北海学園大学), 岩崎グッドマンまさみ (北海学園大学), 齋藤玲子 (元北海道立北方民族博物館, 国立民族学博物館), 北原次郎太 (北海道大学アイヌ・先住民研究センター), 山崎幸治 (北海道大学アイヌ・先住民研究センター), 本田優子 (札幌大学), 田村将人 (元北海道開拓記念館, 札幌大学) ほか
ウイльта (Uilta)	井上紘一 (元北海道大学)
ナーナイ (Nanai), アムール川地域 (Amur River Region)	佐々木史郎 (国立民族学博物館)
千島列島 (Kurile Islands)	手塚薫 (北海学園大学)
イテリメン (Itelmen)	渡部裕 (元北海道立北方民族博物館)
コリヤーク (Koryak)	大島稔 (小樽商科大学), 谷本一之 (元北海道教育大学, 元北海道立北方民族博物館)
チュクチ (Chukuchi)	池谷和信 (国立民族学博物館)
アリユート (Aluet)	大島稔 (小樽商科大学), スチュアートヘンリ (本多俊和, 元放送大学)
アルティーク (Alutiiq)	手塚薫 (北海学園大学)
イヌピアット (Inupiat)	榊原千絵 (米国オーバリン大学), イクタヒロコ (アラスカ州政府), 岸上伸啓 (国立民族学博物館)
ユピック, チュピック (Yupik, Cupik)	生田博子 (アラスカ州政府), 久保田亮 (大分大学), 一戸恒人 (京都大学)
グウィッチン (Gwich'in)	井上敏昭 (城西国際大学)
ツィムシアン (メトラカトラ) (Timishian in Metlakatla)	岡田宏明 (元北海道大学, 元北海道立北方民族博物館), 岡田淳子 (元北海道大学, 北海道立北方民族博物館), 岡庭義行 (帯広女子短期大学) ほか
トリンギット (Tlingit)	益子待也 (金沢学院大学)
クワクワカワク (Kwakwaka'wakw)	岩崎グッドマンまさみ (北海学園大学), 立川陽仁 (三重大)
サーニッチ (Saanich)	渥美一弥 (自治医科大学)

になった（たとえば、Grossman and Parker eds. 2012; Krupnik and Jolly eds. 2002）。このような流れの中でジェサップⅡプロジェクト以来、環北太平洋地域の先住民文化全体を対象にした大型研究プロジェクトは実施されておらず、将来的な研究の展開を考えると総合的かつ学際的な大型国際的調査プロジェクトの組織化と実施が望まれる。

第4に、環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関して多数の個別研究が実施され、成果も蓄積されてきたが、それら成果の比較や総合化がほとんど実行されていないことを指摘することができる。すでに見てきたように、宮岡（1992）や渡辺仁（1992）は、新大陸への人類の拡散について新たな仮説や研究の枠組みを提起している。研究成果が蓄積されてきた今こそ、体系的な比較調査・研究や仮説の検証が望まれる。また、日本の研究者に該当するが、本稿で紹介したように多数の研究や調査が行われながら、研究者間や研究プロジェクト間で相互の情報交換・共有がほとんどなされていないといえる。このことを克服するためには、環北太平洋沿岸の先住民文化が持っている文化資源、およびその文化資源に関連する情報に関して、それを保存し、共有し、共同利用するためのネットワークないしは学会を先住民団体、博物館、大学・研究所、さまざまな研究者らが協働して造りあげることが必要である。

第5に、これまでの研究は過去を再構成するものが多かった点を強調しておきたい。すなわち、これまでの大型調査プロジェクトでは、急激に変化しつつある環北太平洋沿岸地域の先住民文化や先住民言語を記録に残し、過去を再構成することがおもな研究の目的であった。また、現在の研究では、人類がどのようなルートで新大陸に入り、拡散したのか、新大陸と旧大陸の先住民文化の間の歴史的関係、ジェサップ調査の再評価という3点が焦点となっている。そこでは、先住民の文化や言語の現状と将来が正面から取り上げられていない。これまでの歴史的変化を研究するのは当然のことであるが、現在この地域に住んでいる人々の状況はどうなっているのか、そして、その将来はどうなっていくのかという、現在を見据え、未来に向かうための比較研究も重要であると考えられる。多くの先住民文化は、国家や外部社会とさまざまな関係を保ちつつ、伝統を重視しつつも新しい先住民文化を常につくり出しつつある。現状と未来についての比較研究も行われるべきであると考えられる。

## 11 結語

本稿では、19世紀末のジェサップ北太平洋調査プロジェクトから現在までの環北太平洋地域の先住民文化に関する研究の流れを概観し、1990年代以降の日本人研究者による文化人類学的研究を中心に紹介し、検討を加えた。その結果、文化人類学分野において日本人の研究者は大きな貢献をしてきた一方で、いくつかの傾向と課題があることが分かった。最後に、環北太平洋地域の先住民文化に関する研究を推進するために、今後

の課題を提示し、本稿の結びとしたい。

第1は、日本人研究者の成果発信の国際化である。日本人研究者は研究成果を日本語だけでなく、英語やロシア語など外国語でも積極的に発表すべきである。

第2は、学際的共同調査・研究の実施である。日本人研究者は、文化人類学や生物人類学、言語学、考古学、歴史学など学問の枠を超えて学術交流や共同調査を行うべきである。

第3は、若手研究者育成と北東アジア地域研究の重点化である。日本の文化人類学分野では、これまでの研究実績と成果の蓄積に基づき、若手研究者を育成することが急務である。とくに、日本人の若手の文化人類学者はチュコト半島やカムチャツカ半島、サハリン島の先住民文化について現地調査や研究を推進すべきである。

第4は、研究者ネットワークの形成の必要性である。研究者間や研究プロジェクト間でネットワークを形成し、学術情報の交換と共有を行いながら、国際的で、学際的な大型の調査・研究プロジェクトを組織化し、実施することが必要である。とくにジェサップ北太平洋調査プロジェクトの初心に立ち返り、文化人類学者や生物人類学者、考古学者、歴史学者などによる学際的かつ国際的共同研究を実施することが望まれる。このことを実現するためには、環北太平洋地域の先住民文化に関して国際的な学会や、研究者や現地社会の人びとなど多様なステークホルダーから構成される調査研究コンソーシアムの組織化が必要である。

第5は、環北太平洋地域の先住民文化の将来像を見据えた比較研究の実施である。環北太平洋沿岸地域の先住民文化の歴史的变化のみならず、現状や未来に関する比較研究を実施すべきである。

以上のような指摘に留意しつつ、今後、日本人研究者が、環北太平洋地域の先住民文化に関する人類学的研究において中心的な役割を担い、海外の研究者と協力しながら、推進していくことが望まれる。

## 謝 辞

本稿の草稿について北海道立北方民族博物館の渡部裕氏、城西国際大学の井上敏昭氏、北海道博物館（旧北海道開拓記念館）の出利葉浩司氏から貴重なコメントや文献情報を頂戴した。また、国立民族学博物館の中村真里絵さんと生田節子さんには本稿の編集上、ご助力を頂いた。記してこれらの方々に感謝の微意を表したい。

## 注

1) 本稿では、考古学的な比較研究については取り上げないが、1990年代半ばにハワイのホノルルにおいてA・P・マッカーートニーや岡田宏明、岡田淳子、W・B・ワークマン等が中心となり、北

洋およびベーリング海の海洋社会を考古学的に解明しようとした国際シンポジウムが開催され、その成果が『極北人類学』の特集号として公刊されている (McCartney, Okada, Okada, and Workman eds. 1998)。

- 2) 同展示の小規模展示が、先住民のためにアラスカやロシア極東地域で巡回された (Chaussonnet ed. 1995)。
- 3) これらの科研成果は、報告書などの形で多数、報告されている。本稿では逐一挙しないが、Languages of North Pacific Rim (15巻) が出版されている。詳しくは下記の京都大学と宮岡伯人の科研情報のホームページを見て欲しい。 <http://www.elpr.bun.kyoto-u.ac.jp> (2015年3月15日閲覧) および <https://kaken.nii.ac.jp/d/r/60002979.ja.html> (2015年3月16日閲覧)。
- 4) 欧文で書かれた「ジェサップ2」の2000年までの主要刊行物は、Krupnik (2001) を参照されたい。
- 5) この見解は、小谷から直接、話しを聞いた出利葉からのご教示による。
- 6) アイヌ民族に関する歴史的研究には、高倉新一郎の『アイヌ政策史』(1943)のほか、海保嶺夫や小林真人、浅倉有子、岩崎奈緒子、菊池勇夫、中村一之らによる著作が多数あるが、筆者の力量ではすべてを網羅できないので、本稿では取り扱わない点をお許し頂きたい。
- 7) 物質文化研究には、たとえば、マレクについて山浦清や前田潮らによる考古学研究が存在している。筆者の力量不足のため、本稿ではアイヌの物質文化についての考古学的研究を取り扱うことができなかつた点をお許し頂きたい。なお、民族学的な視点からの物質研究には、出利葉氏によるアイヌのマレクや罌に関する研究がある (出利葉 1989, 1995)。また、本稿では考古学的研究を紹介できないが、木山克彦、熊木俊郎、加藤博文、越田賢一郎、白杵勲、種石悠らが環オホーツク海地域の考古学研究で活躍している。
- 8) アイヌの伝統的な下紐(ウプソル)名称や素材、形、製作方法、機能、歴史的变化および関連する信仰に関する興味深い研究が存在している (鈴木 1996: 47-83)。
- 9) 巨視的な視点からクマ送り儀礼の研究については、大林 (1985) を参照されたい。
- 10) 氏族経営体とは、祖先を同じくする複数の家族集団から構成される特定の親族集団が狩猟や漁撈を行う、ソ連の政治体制下で作り出された公的企業体のことである。
- 11) 近世のサハリン島における日滿交易については、高倉新一郎による研究が存在している (高倉 1939)。
- 12) 池谷は、トナカイ・チュクチの17世紀から現代までの歴史の変容をロシア帝政時代、ソビエト社会主義時代、ポストソビエト時代の3時代に分けて記述している (池谷 2002)。
- 13) 文化人類学における「存在論的転換」については、春日 (2011) をお読み頂きたい。
- 14) 伊藤 (2007) は日本における北米先住民研究の研究動向についてレビューしているが、アラスカや北アメリカ北西海岸先住民についての研究についても紹介している。
- 15) 久保田 (2013) は、近年の気候変動は、チュピックの漁撈活動に大きな影響を与えていないことを指摘している。
- 16) 同書は、スチュートヘンリによって日本語に翻訳されている (ラフリン 1986)。
- 17) スチュアート (1987a, 1993b) はセント・ローレンス島のミイラについても論文を発表している。
- 18) サケを、ポトラッチで参加者に分配することや家族友人に贈ることによって、社会関係を創り出したり、維持させたりする手段となる。従って、サケは社会資源でもある。
- 19) 北西海岸先住民に関する民族誌は多数存在するので、ここでは割愛する。基本情報については、スミスニアン協会が出版している『北アメリカインディアン・ハンドブック』第7巻 (Suttles

- ed. 1990) をご覧いただきたい。
- 20) 環北太平洋沿岸地域というよりも環極北・亜極北地域における景観を論じた論集が出版されている。この比較研究によると、環極北・亜極北地域では、景観とは単なる物理的な実態ではなく、そこで長い間、生活を続けてきた先住民の世界観や宗教観が反映されたものであり、きわめて文化的な側面を持つことが指摘されている (Krupnik, Mason and Horton eds. 2004)。
  - 21) 松林義行と岡庭義行は同一人物である。
  - 22) 大林は、日本の神話伝説における北方的要素を検討するためには、新旧両方の北太平洋沿岸の海域やオホーツク海、日本海、東シナ海という海域の重要性を考慮する必要があると指摘している (大林1995: 13)。
  - 23) 谷本は、一面太鼓は環極北地域に分布していると指摘するとともに (谷本 2005)、一面太鼓は環北太平洋沿岸地域にも分布していると指摘している (谷本 2009)。
  - 24) 谷本は新旧大陸の極北諸民族や環北太平洋沿岸地域に住む諸民族の芸能について巨視的な視点から興味深い比較研究を行っている (谷本 1999)。
  - 25) 荻原は比較の結果を9頁にわたって要約している。荻原 (1996: 478-487) をお読みいただきたい。
  - 26) 「初原的同一性」とは、動物と人間とは本質的に変わらないとするという二つの異なるものが本来は同一であるとする思考のことを指す (煎本 2007c: 19)。
  - 27) 「超自然的互酬性」とは自然を人格化したうえで、人間と超自然との関係を贈与と返礼による相互関係として認識する思考を指す (煎本 2007c: 20)。
  - 28) 「共生と循環の思想」の共生とは肯定的な互酬性が恒常性を持ち、全体としてひとつの体系を形成している状態を指す (煎本 2007c: 23)。循環の思想とは、動物の生と死を神々の世界と人間の世界との間の靈魂の循環として捉える思考のことを指す (煎本 2007c: 25)。
  - 29) 個別のテーマとして、サケに関する先住民の知識、国家の漁業政策、水利権と漁業権、条約、共同管理、「商業養殖」と「天然サケ」の保全の対立的問題などである。

## 引用・参考文献

(和文)

渥美一弥

- 1991 「虹を掲げた人々—ニシカ族の教育と神話的世界」『民族学研究』56 (2) : 209-218。
- 1996a 「『伝統文化』を『名乗る』こと—カナダ・サーニッチ族の神話、地名、個人名の今日的意味について」『民族学研究』61 (1) : 105-125。
- 1996b 「『伝統的な』名と『伝統的に』名づけること—カナダ・北西海岸先住民の『インディアン名』と命名儀式的今日的意味について」『地域研究』12: 48-64。
- 1998 「『文化』を過去形で語ること—カナダ西岸先住民・サーニッチのサケ漁リーフネットに関する『語り』について」北海道立北方民族博物館編『第12回北方民族文化シンポジウム報告—北方における漁撈と文化変容の関係—サケをめぐる文化』pp.55-70, 網走: 北方文化振興協会。
- 2005 「『情報』としての『民族』—カナダ先住民サーニッチの『文化復興運動』における政治・経済的状況」北海道立北方民族博物館編『北太平洋沿岸の文化—政治経済と先住民社会』(第19回北方民族文化シンポジウム報告) pp.51-56, 網走: 北方文化振興協会。
- 2008 「『資源』としての民族誌的『情報』—カナダ・プリティッシュ・コロンビア州先住民サ

ーニッチの教育自治と「文化」復興』『立教アメリカン・スタディーズ』30:37-76。

天野哲也

1990 「クマの胆考」『古代文化』42(10):26-35。

2003 『クマ祭りの起源』東京:雄山閣。

2008 『古代の海洋民オホーツク人の世界—アイヌ文化をさかのぼる』東京:雄山閣。

池田貴夫

2007 「クマ祭り(飼育を伴うクマの霊送り)の研究—民族文化情報とその表現をめぐる諸問題」名古屋大学大学院人間情報学研究科学位申請論文。

池谷和信

1999 「シベリア北東部におけるチュクチのトナカイ牧畜と放牧テリトリー」『北海道立北方民族博物館研究紀要』8:1-30。

2002 「シベリア北東部におけるチュクチの文化変容—チャウンスキー地区の事例から」煎本孝編『北東アジア諸民族の文化動態』pp.283-317, 札幌:北海道大学図書刊行会。

2006 「シベリア北東部におけるチュクチの海獣狩猟の生態人類学」北海道立北方民族博物館編『文化の十字路—北太平洋沿岸の文化』(第20回北方民族文化シンポジウム報告)pp.35-41, 網走:北方文化振興協会。

2007a 「チュコトカ自治管区におけるトナカイ牧畜の変化と多様性—危機に対するチュクチの対応」煎本孝・山田孝子編『北の民の人類学—強国に生きる民族性と帰属性』pp.149-162, 京都:京都大学学術出版会。

2007b 「人類の生態と地球環境問題—ポスト社会主義下におけるクジラの利用と保護」煎本孝・山岸俊男編『現代文化人類学の課題—北方研究からみる』pp.100-125, 京都:世界思想社。

2007c 「人類の生態とテリトリー—極北の民チュクチからの展望」秋道智彌編『資源人類学8 資源とコモنز』pp.89-113, 東京:弘文堂。

石田英一郎

1952 「沙流アイヌの共同調査報告について」『民族学研究』16(3・4):186。

井上紘一

2003 「石油・天然ガス開発の原住民に対する影響」村上隆編『サハリン大陸棚石油・ガス開発と環境保全』pp.258-395, 札幌:北海道大学図書刊行会。

2009 「サハリンのウイルト(オロッコ)におけるトナカイ飼育の百年」谷本一之・井上紘一編『渡鴉(ワタリガラス)のアーチ(1903-2002)』(国立民族学博物館調査報告82)pp.289-313, 大阪:国立民族学博物館。

井上敏昭

1996 「クランから『ネイティブ・アメリカン』へ—アラスカ先住民の儀礼とそこに見るアイデンティティの所在の変化について」『城西国際大学紀要』4(1):187-206。

1999 「『文化伝統』としてのビーズワーク—アラスカ・グイッチン社会におけるビーズワークの役割とそこに見る社会的重要性に関する考察」『北海道立北方民族博物館研究紀要』8:31-56。

2003a 「リアルフードとカリブースキンジャケット—内陸アラスカ先住民グイッチン社会における生物資源利用の諸相」北海道立北方民族博物館編『北太平洋沿岸の文化—資源利用のあり方』(第17回北方民族文化シンポジウム報告)pp.1-5, 網走:(財)北方文化振興協会。

2003b 「内陸アラスカ先住民社会におけるサケ資源の利用と管理の諸問題」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』(国立民族学博物館調査報告46)pp.131-160, 大阪:

国立民族学博物館。

- 2007 「『我々はカリブーの民である』アラスカ・カナダ先住民のアイデンティティと開発運動」  
煎本孝, 山田孝子編『北の民の人類学 強国に生きる民族性と帰属性』pp. 95-122, 京都:  
京都大学学術出版会。
- 2008 「社会資源としてのサケ—ユーコン川上流域の先住民社会におけるサケの重要性とそれを  
とりまく諸問題」岸上伸啓編『海洋資源の流通と管理の人類学』(みんぱく実践人類学シ  
リーズ3) pp.41-68, 東京: 明石書店。
- 2009 「アラスカの先住民と石油開発」岸上伸啓編『開発と先住民族』(みんぱく実践人類学シ  
リーズ7) pp.305-330, 東京: 明石書店。
- 2011 「越境する先住民社会—ユーコン川流域環境の改善に取り組む先住民政府間協議会」松  
本博之編『海洋環境保全の人類学』(国立民族学博物館調査報告97) pp.141-167, 大阪: 国  
立民族学博物館。
- 2012 「アラスカ先住民の石油開発/環境汚染への対応」北海道立北方民族博物館編『環境変化  
と先住民の生業文化—陸域生態系における適応』(第26回北方民族文化シンポジウム報告)  
pp.17-24, 網走: (財) 北方文化振興協会。
- 2015 「アラスカにおける石油開発と先住民権の歴史」北海道立北方民族博物館編『環境変化と  
先住民の生業文化—開発と適応』(第29回北方民族文化シンポジウム報告) pp.11-16, 網  
走: (財) 北方文化振興協会。

煎本孝

- 1988 「アイヌは如何にして熊を狩猟したか—狩猟の象徴的意味と行動戦略」『民族学研究』53  
(2): 125-154。
- 2001 「まりも祭りの創造—アイヌの帰属性と民族的共生」『民族学研究』66 (3): 320-343。
- 2007a 「アイヌ文化における死の儀礼の復興をめぐる葛藤と帰属性」煎本孝・山田孝子編『北の  
民の人類学—強国に生きる民族性と帰属性』pp.9-36, 京都: 京都大学学術出版会。
- 2007b 「トナカイ遊牧民, 循環のフィロソフィー—極北ロシア・カムチャツカ探検記」東京: 明  
石書店。
- 2007c 「北方研究の展開」煎本孝・山岸俊男編『現代文化人類学の課題—北方研究からみる』pp.4-  
30, 京都: 社会思想社。
- 2010 『アイヌの熊祭り』東京: 雄山閣。

煎本孝編

- 2002 『北東アジア諸民族の文化動態』札幌: 北海道大学図書刊行会。

煎本孝・山岸俊男編

- 2007 『現代文化人類学の課題—北方研究からみる』京都: 社会思想社。

煎本孝・山田孝子編

- 2007 『北の民の人類学—強国に生きる民族性と帰属性』京都: 京都大学学術出版会。

岩崎グッドマンまさみ

- 1998 「カナダ北西海岸先住民族のサケ漁の歴史的変遷」北海道立北方民族博物館編『北方にお  
ける漁撈と文化変容の関係—サケをめぐる文化』(第12回北方民族文化シンポジウム報告)  
P29-36, 網走: 北方文化振興協会。
- 1999 「サケ資源の減少とナムギースの人々」秋道智彌編『自然はだれのものか』pp.65-84, 京都:  
昭和堂。
- 2002 「カナダ北西海岸におけるサケをめぐる対決」秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海』pp.168-

- 188, 京都：人文書院。
- 2003 「次世代のための資源管理——カナダ西部極北地域における海洋資源共同管理」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告46）pp.49-71, 大阪：国立民族学博物館。
- 2004 「商業と文化のはざまに」北海道立北方民族博物館編『北太平洋沿岸の文化——文化接触と先住民社会』（第18回北方民族文化シンポジウム報告）pp.29-36, 網走：北方文化振興協会。
- 2005a 「アイヌの生態環知識の再構築」『言語文化研究』16（3）：13-18。
- 2005b 「沙流川流域のアイヌ民族の食文化に関する応用研究（上）」『新人文学』2：114-179。
- 2005c 「社会影響評価の手法と二風谷ダムの事例」『開発論集』76：89-109。
- 2006 「サケをめぐる混沌」北海道立北方民族博物館編『環北太平洋の環境と文化』pp.213-225, 網走：北海道立北方民族博物館。
- 2007a 「沙流川流域のアイヌ民族の食文化に関する応用研究（下）」『新人文学』3：112-160。
- 2007b 「ダム建設と沙流川流域の人々の生活」『開発論集』79：61-78。
- 2008 「サケの民カナダ北西海岸先住民：サケの保存・調理・分配」岸上伸啓編『海洋資源の流通と管理の人類学』（みんぱく実践人類学シリーズ3）pp.95-120, 東京：明石書店。
- 2009 「沙流川流域を変えた二つのダム建設」岸上伸啓編『開発と先住民』（みんぱく実践人類学シリーズ7）pp.157-182, 東京：明石書店。

宇井眞紀子

- 2009 『アイヌときどき日本人』（増補改訂版）東京：社会評論社。

大島稔

- 1984 「アリュートの海獣猟と語彙」『人文研究』67：53-74。
- 1989 「アリュートの言語資料より見た民族接触に関する諸問題」北方言語・文化研究会編『民族接触——北の視点から』pp. 88-99, 東京：六興出版。
- 1995 「コリヤーク語比較方言音韻資料：カラガとレスナヤ」谷本一之編『北方諸民族文化国際フェスティバル・シンポジウム報告』pp.71-79, 札幌：北海道教育大学。
- 1998a 「コリヤークのトナカイ飼育：1996年ベンジナ地区スラウトノイエにおける調査」大島稔編『カムチャツカ半島諸民族の生業・社会・芸能』pp.117-133, 小樽：小樽商科大学言語センター。
- 1998b 「コリヤークの漁撈——1997年ベンジナ地区マニリ周辺における調査」大島稔編『カムチャツカ半島諸民族の生業・社会・芸能』pp.135-144, 小樽：小樽商科大学言語センター。
- 1998c 「北東シベリア・コリヤークの儀礼と芸能」煎本孝編『周極地域諸文化の比較研究：言語・生態・世界観』pp.17-22, 札幌：北海道大学文学部。
- 2002a 「カムチャツカ半島における水産資源の利用と管理」秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海』pp.190-208, 京都：人文書院。
- 2002b 「ロシア・カムチャツカ半島における水産資源の生態・利用・管理」岸上伸啓編『先住民による海洋資源利用と管理：漁業権と管理をめぐる人類学的研究』（平成11年度～平成13年度科学研究費補助金基盤研究A（2）研究成果報告書）pp.101-107, 吹田：国立民族学博物館。
- 2002c 「儀礼におけるアイヌとカムチャツカ先住民の関係」北海道立北方民族博物館編『北方諸民族文化のなかのアイヌ文化——文化交流の諸相をめぐる』（第16回北方民族文化シンポジウム報告）pp.1-5, 網走：北方文化振興協会。
- 2004 「産業化と集住化がもたらしたコリヤーク社会の変化」北海道立北方民族博物館編『北太

平洋沿岸の文化—文化接触と先住民社会』（第18回北方民族文化シンポジウム報告）pp.7-10, 網走：北方文化振興協会。

- 2005 「コリヤークのトナカイ遊牧に関する政治経済的考察—カムチャツカ州カラギンスキー地区を例に」北海道立北方民族博物館編『北太平洋沿岸の文化—政治経済と先住民社会』（第19回北方民族文化シンポジウム報告）pp.1-4, 網走：北方文化振興協会。

#### 大塚和義

- 1987 「ふくろう送り, コタンコルカムイ・イオマンテ」『季刊 民族学』48：81-84。  
 1994 「ニヅフのアザラシ猟と送り儀礼」『国立民族学博物館研究報告』19（4）：543-583。  
 1995 『海浜と水辺の民』東京：新宿書房。  
 1996 「アイヌにおける観光の役割—同化政策と観光政策の相克」石森秀三編『観光の20世紀』pp.111-32, 東京：ドメス出版。  
 1999 「首都圏におけるアイヌ運動組織の歩み」青柳清孝・松山利夫編『先住民と都市—人類学の新しい地平』pp.93-103, 東京：青木書店。  
 2002 「国立民族学博物館におけるアイヌ外来研究員の受け入れについて」『民博通信』96：99-109。  
 2011 「国立民族学博物館におけるアイヌ研究と博物館活動の過去・現在・未来」『国立民族学博物館研究報告』36（1）：113-141。

#### 大塚和義編

- 2001 『ラッコとガラス玉—北太平洋の先住民交易』大阪：国立民族学博物館。  
 2003 『北太平洋の先住民交易と工芸』京都：思文閣出版。

#### 大貫静夫・佐藤宏之編

- 2005 『ロシア極東の民族考古学—温帯森林狩猟民の居住と生業』東京：六一書房。

#### 大貫良夫

- 1977 「トーテム・ポール—その社会的ならびに歴史的意味について」『民族学研究』41（4）：317-329。

#### 大西秀之

- 2009 『トビニタイ文化からのアイヌ文化史』東京：同成社。

#### 大林太良

- 1985 「熊祭りの歴史民族学的研究」『国立民族学博物館研究報告』10（2）：427-449。  
 1992 「北太平洋地域の神話と儀礼における鮭」『北海道立北方民族博物館研究紀要』1：1-16。  
 1993 「アイヌの靈魂の観念」『北海道立北方民族博物館研究紀要』2：1-12。  
 1994 「アイヌ神話における文化英雄」『北海道立北方民族博物館研究紀要』3：1-7。  
 1995 「日本の神話伝説における北方的要素」『北海道立北方民族博物館研究紀要』4：1-14。  
 1996 「アイヌの靈魂観とツングースの靈魂観」『北海道立北方民族博物館研究紀要』5：1-4。

#### 大村敬一

- 1993 「視覚芸術の構造を探る試み—北米大陸北西海岸インディアンの象徴的画像の造形素」『象徴図像研究』7：5-28。  
 2006 「視覚芸術の構造を探る試み—北米大陸北西海岸インディアンの象徴的画像にみる造形素分析の可能性」松枝到編『象徴図像研究—動物と象徴』pp.245-279, 東京：言叢社。

#### 岡田淳子

- 1999 『北の民族誌』京都：アカデミア出版会。  
 2000a 「メトラカトラ・コミュニティ開発の原動力を探る」岡田淳子編『変容する Metlakatla

- Indian Community』(平成10・11年度科学研究費補助金国際学術研究 基盤 (2) (B)「北西  
海岸インディアンの開発人類学的研究」研究成果報告書) pp.18-21, 札幌:北海道東海大学。
- 2000b 「メトラカトラの現地調査成果:中間報告」岡田淳子編『変容する Metlakatla Indian  
Community』(平成10・11年度科学研究費補助金国際学術研究 基盤 (2) (B)「北西海岸イ  
ンディアンの開発人類学的研究」研究成果報告書) pp.40-47, 札幌:北海道東海大学。
- 岡田淳子編
- 2000 『変容する Metlakatla Community』(平成10・11年度科学研究費補助金国際学術研究 基盤 (2)  
(B)「北西海岸インディアンの開発人類学的研究」研究成果報告書) 札幌:北海道東海大  
学。
- 2013 『M—インディアン共同体が歩んだ道—ある先住民村の自己開発』(岡田淳子) 私家版。
- 岡田宏明
- 1994 『北の文化誌』京都:アカデミア出版会。
- 1997 「ロシア期におけるアリュートの文化変化」『北海道立北方民族博物館』6: 1-7。
- 2000 「メトラカトラ住民の生業戦略と適応過程」岡田淳子編『変容する Metlakatla Indian  
Community』(平成10・11年度科学研究費補助金国際学術研究 基盤 (2) (B)「北西海岸イ  
ンディアンの開発人類学的研究」研究成果報告書) pp.22-25, 札幌:北海道東海大学。
- 岡田宏明・岡田淳子編
- 1992 『北の人類学』京都:アカデミア出版会。
- 岡庭(松林)義行
- 2000 「アラスカ・チムシアンと宣教師ダンカン」岡田淳子編『変容する Metlakatla Indian  
Community』(平成10・11年度科学研究費補助金国際学術研究 基盤 (2) (B)「北西海岸イ  
ンディアンの開発人類学的研究」研究成果報告書) pp.34-38, 札幌:北海道東海大学。
- 2004a 「アラスカ・チムシアンにおける文化接触」北海道立北方民族博物館編『北太平洋沿岸の  
文化—文化接触と先住民社会』(第18回北方民族文化シンポジウム報告) pp.15-19, 網走:  
(財)北方文化振興協会。
- 2004b 「パフォーマンスの人類学—カナダ・クワキウトゥルにおける〈ツェカ〉の劇場性」『帯  
広大谷短期大学紀要』41: 46-65。
- 2008 「アラスカ・ツィムシアンとアラスカ先住民法—「先住民」の開発を選ばなかった先住民  
たち」岸上伸啓編『北アメリカ先住民の社会経済開発』(みんぱく実践人類学シリーズ4)  
pp.193-219, 東京:明石書店。
- 小川正人
- 1997 『近代アイヌ教育制度史研究』札幌:北海道大学出版会。
- 2013 「対雁学校の歴史—北海道に強制移住させられた樺太アイヌの教育史」『教育学研究』80  
(3): 1-13 (309-321)。
- 萩原真子
- 1992 「チュクチのシャマニズム—北東シベリアの民族文化の一特質」岡田宏明・岡田淳子編  
『北の人類学—環極北地域の文化と生態』pp.185-210, 京都:アカデミア出版会。
- 1995 『東北アジアの神話・伝説』東京:東方書店。
- 1996 『北方諸民族の世界観』東京:草風館。
- 萩原真子, ヴァレンチーナ・V・ゴルバチョーヴァ, 古原敏宏編
- 2007 『ロシア民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』東京:草風館。

長田英己

- 1999 「サハリンニブフの生業活動—タルルーに生きるニヴウंक」『北海道立北方民族博物館研究紀要』8: 57-84。

春日直樹

- 2011 「序章 人類学の静かな革命—いわゆる存在論的転換」春日直樹編『現実批判の人類学』pp.9-31, 京都: 世界思想社。

加藤九祚・小谷凱宣編

- 1987 『ピウスツキ資料と北方諸民族文化の研究』(『国立民族学博物館研究報告別冊』第5号) 大阪: 国立民族学博物館。

萱野茂

- 2001 「アイヌ民族における神送りの研究—沙流川流域を中心に」総合研究大学院大学文化科学研究科学学位請求論文。

- 2003 『五つの心臓を持った神—アイヌの神作りと送り』東京: 小峰書店。

菊池勇夫

- 1994 「鷺羽と北方交易」『宮城学院女子大学キリスト教文化研究所研究年報』27: 25-49。

菊池俊彦

- 1995 『北東アジア古代文化の研究』札幌: 北海道大学図書刊行会。

- 2004 『環オホーツク海古代文化の研究』札幌: 北海道大学図書刊行会。

岸上伸啓

- 1995 「ロシア極東民族コリヤークの宗教と社会について」谷本一之編『北方諸民族文化国際フェスティバル・シンポジウム (1994)』pp.57-69, 札幌: 北海道教育大学。

- 1997a 「コリヤーク民族誌点描—世界観と儀礼からみた海岸コリヤークの世界」『環オホーツク1996』4: 1-28。

- 1997b 「ロシア極東カムチャツカ半島のコリヤークとエヴェン—1996年エツソ調査報告」『人文論究』64: 47-87。

- 1997c 「アイヌの『飼い型』の送り儀礼と北方交易」『民博通信』76: 109-115。

- 2001 「北米北方地域における先住民による諸資源の交易について—毛皮交易とその諸影響を中心に」『国立民族学博物館研究報告』25 (3): 293-354。

- 2002a 「18-20世紀におけるベーリング海峡地域の先住民交易と社会組織」佐々木史郎編『開かれた系としての狩猟採集民社会』(国立民族学博物館調査報告34) pp.39-50, 大阪: 国立民族学博物館。

- 2002b 「北東アジア沿岸地域の諸民族における社会構造の比較研究試論」煎本孝編『北東アジア諸民族の文化動態』pp.505-544, 札幌: 北海道大学図書刊行会。

- 2005 「日本人による北アメリカ先住民研究の動向について—1990年代以降を中心に」『人文論究』74: 13-42。

- 2007 「クジラ資源はだれのものか—アラスカ北西部における先住民捕鯨をめぐるポリティカル・エコノミー」秋道智彌編『資源とコモンズ』(資源人類学 第8巻) pp. 115-136, 東京: 弘文堂。

- 2009 「文化の安全保障の視点から見た先住民生存捕鯨に関する予備的考察—アメリカ合衆国アラスカ北西地域の事例から」『国立民族学博物館研究報告』33 (4): 493-550。

- 2011 「米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの祝宴アプガウティについて」『人文論究』80: 97-110。

- 2012a 「米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの捕鯨グループについて」『人文論究』81：1-12。
- 2012b 「アメリカ・アラスカにおける先住民生存捕鯨について」岸上伸啓編『捕鯨の文化人類学』pp.1-30, 東京：成山堂書店。
- 2012c 「米国アラスカ州バロー村のイヌピアットによるホッキョククジラ肉の分配と流通について」『国立民族学博物館研究報告』36 (2)：147-179。
- 2012d 『北極海の狩人たち—クジラとイヌピアットの人々』札幌：風土デザイン研究所。
- 2013 「米国アラスカ州バロー村におけるイヌピアットの捕鯨祭ナルカタックについて—祝宴における共食と鯨肉の分配を中心に」『国立民族学博物館研究報告』37 (3)：393-419。
- 2014a 「アラスカの捕鯨民イヌピアットの真夏の祭典ナルカタック」高倉浩樹・山口未花子編『食と儀礼をめぐる地球の旅—先住民文化からみたシベリアとアメリカ』pp. 91-120, 仙台：東北大学出版会。
- 2014b 「アラスカ北西地域におけるイヌピアットの食料の安全保障問題」『人文論究』83：75-83。
- 2014c 『クジラとともに生きる—アラスカ先住民社会の現在』京都：臨川書店。
- 2014d 「カナダにおける北西海岸先住民ヌーチャムススの捕鯨と先住権」『北海道立北方民族博物館研究紀要』23：23-34。
- 2015 「アラスカ・イヌピアット社会における使者祭りについて」『人文論究』84：51-62。
- 木村和男  
2002 『毛皮交易が創る世界—ハドソン湾からユーラシアへ』東京：岩波書店。
- 木村英明・本田優子編  
2007 『アイヌのクマ送りの世界』（ものが語る歴史13）東京：同成社。
- 久保田亮  
2005 「儀礼とダンスの断絶—宣教師の活動をめぐるアラスカ先住民ユピックの歴史認識」『東北人類学論壇』4：1-20。
- 2006a 「今日の客は誰だ？—ダンス・パフォーマンスの組成に関する試論」北海道立北方民族博物館編『文化の十字路—北太平洋沿岸の文化』（第20回北方民族文化シンポジウム報告）pp.71-76, 網走：北方文化振興協会。
- 2006b 「社交期としての冬—冬季娯楽行事にみるユピック/チュピック社会生活の変化と持続」『東北人類学論壇』5：1-17。
- 2008 「現代ユピックの『生き方』と金鉱開発プロジェクト」岸上伸啓編『北アメリカ先住民の社会経済開発』（みんぱく実践人類学シリーズ4）pp.161-192, 東京：明石書店。
- 2009a 「チュピック村落社会の学校にみる先住民の自律」窪田幸子・野林厚志編『「先住民」とはだれか』pp.179-200, 京都：世界思想社。
- 2009b 「法概念『サブシステム』の成立—先住民権利保障へのドミナント文化の影響」『東北人類学論壇』8：22-53。
- 2011 「歌の帰郷—民族誌的資料の『返還』と『活用』に向けた取り組みについて」『北海道立北方民族博物館研究紀要』20：11-24。
- 2012 「伝統ダンス進展期における先住民と文化の関係—ユピック・ダンスがつなく社会関係について」高谷紀夫・沼崎一郎編『つながりの文化人類学』pp. 297-333, 仙台：東北大学出版会。
- 2013 「アラスカ先住民による漁撈活動と気候変動の関係—ユーコン=クスコクウィムデルタの事例検討」北海道立北方民族博物館編『環境変化と先住民の生業文化—海洋生態系にお

- ける適応』(第27回北方民族文化シンポジウム報告) pp.41-46, 網走: 北方文化振興協会。
- クライナー, ヨーゼフ  
1987 「ヨーロッパにおけるアイヌ関係コレクションの歴史と現状」加藤九祚, 小谷凱宣編『ピウスツキ資料と北方諸民族文化の研究』(『国立民族学博物館研究報告別冊』第5号) pp.417-453, 大阪: 国立民族学博物館。
- クルブニク, イーゴリ  
2009 「『ジェサップ2』が第2『十年期』を迎える」谷本一之・井上紘一編『「渡鴉のアーチ」(1903-2002) —ジェサップ北太平洋調査を追試検証する』(国立民族学博物館調査報告82) pp.1-28, 大阪: 国立民族学博物館。
- クルブニク, イーゴリ, ニコライ・ヴァフチン  
2009 「記憶と忘却—ポスト・ジェサップ期のチュコトカにおける文化変化と土着的知識」谷本一之・井上紘一編『「渡鴉のアーチ」(1903-2002) —ジェサップ北太平洋調査を追試検証する』(国立民族学博物館調査報告82) pp.209-232, 大阪: 国立民族学博物館。
- 呉人恵, 齋藤玲子  
2005 「トナカイ遊牧民コリャークの植物利用に関するレポート」『北海道立北方民族博物館研究紀要』14: 63-92。
- 黒田信一郎  
1992 「チュクチの抵抗—北東シベリア原住民の受難史」岡田宏明・岡田淳子編『北の人類学—環極北地域の文化と生態』pp.161-184, 京都: アカデミア出版会。
- 小谷凱宣  
1993 「フレデリック・スターのアイヌ関係コレクション」岡田宏明編『環極北文化の比較研究(科研報告書)』pp.121-136, 札幌: 北海道大学文学部。  
1994 『フレデリック・スターのアイヌ研究資料の民族学的研究(科研報告書)』名古屋: 名古屋大学大学院人間情報学研究所。  
1996 「アイヌ文化」ヨーゼフ・クライナー編『日本民族学の現在—1980年代から90年代へ』pp.224-237, 東京: 新曜社。
- 小谷凱宣編  
1997 『欧米アイヌ・コレクションの比較研究』(文部科学省科学研究費補助金(1994年-1996年度)国際学術研究(学術調査)研究成果報告書)名古屋: 名古屋大学大学院人間情報学研究所。  
2001 『在外アイヌ関係資料にもとづくアイヌ文化の再構築』(文部科学省科学研究費補助金(1998年-2000年度)基盤研究(A)(2)研究成果報告書)名古屋: 南山大学人類学研究所。  
2004 『海外アイヌ資料にもとづくアイヌ文化の地域差・時代差に関する研究』(文部科学省科学研究費補助金(2001年-2003年度)基盤研究(B)(1)研究成果報告書)名古屋: 南山大学人類学研究所。
- 小谷凱宣, 荻原真子編  
2004 『海外アイヌ・コレクション総目録』(文部科学省科学研究費補助金(2001-2003年度)基盤研究(B)(2)研究成果報告書)名古屋: 南山大学人類学研究所。
- 近藤社秋  
2014 「北方樹林の愛鳥家—内陸アラスカにおける動物を殺す/生かすこと」『文化人類学』79(1): 48-60。

齋藤玲子

- 1995 「北太平洋沿岸地域における植物性繊維製品についての考察—織物を中心とする物質文化研究」『北海道立北方民族博物館』4：113-134。
- 1996 「現代社会におけるアイヌの工芸のあり方—観光をとおした研究に向けて」『北海道立北方民族博物館研究紀要』5：103-114。
- 1998 「北極地域における毛皮革の利用と技術」『北海道北方民族博物館研究紀要』7：69-85。
- 1999 「阿寒観光とアイヌ文化に関する研究ノート—昭和40年代までの阿寒紹介記事を中心に」『北海道立北方民族博物館研究紀要』8：111-124。
- 2000 「メトラカトラにおける観光と芸能・工芸に関する活動」岡田淳子編『変容する Metlakatla Indian Community』(平成10・11年度科学研究費補助金国際学術研究 基盤(2)(B)「北西海岸インディアンの開発人類学的研究」研究成果報告書) pp.30-34, 札幌：北海道東海大学。
- 2008 「アラスカ・ツィムシヤンの観光開発と文化復興」岸上伸啓編『北アメリカ先住民の社会経済開発』(みんぱく実践人類学シリーズ4) pp.221-246, 東京：明石書店。

齋藤玲子, 大村敬一, 岸上伸啓編

- 2010 『極北と森林の記憶—イヌイットと北西海岸インディアンの版画』京都：昭和堂。

笹倉いる美

- 1994 「資料解説 北西海岸インディアンの意匠」『北海道立北方民族博物館研究紀要』3：161-167。
- 1996 「コリヤークのガーディアンとチャーム」『北海道立北方民族博物館研究紀要』5：115-129。
- 1998 「ウイльта文化聞き書きノート1—刺繍」『北海道立北方民族博物館研究紀要』7：93-103。
- 2009 「ウイльта文化聞き書きノート(3)クマ送りに使われた首飾り」『北海道立北方民族博物館研究紀要』18：73-76。

佐々木史郎

- 1996 『北方からきた交易民—絹と毛皮とサンタン人』(NHK ブックス) 東京：日本放送出版協会。
- 1997a 「18, 19世紀におけるアムール川下流域の住民の交易活動」『国立民族学博物館研究報告』22(4)：683-763。
- 1997b 「広域経済システムとウデへの狩猟」『社会人類学年報』23：1-28。
- 2006 「ロシア極東沿海地方の先住民族ウデへの森林資源利用史」佐々木史郎編『北東アジアにおける森林資源の商業的利用と先住民族』pp.127-158, 大阪：国立民族学博物館。
- 2015a 「クロテンの森の先住民族：極東ロシアの森林開発・森林保護とウデへの人々」北海道立北方民族博物館編『環境変化と先住民の生業文化—開発と適応』(第29回北方民族文化シンポジウム報告) pp.27-32, 網走：(財)北方文化振興協会。
- 2015b 「北東アジア先住民族の歴史・文化表象—中国黒竜江省敖其村の赫哲族ゲイケル・ハラの人々の事例から」『国立民族学博物館研究報告』39(3)：321-373。

佐々木史郎編

- 2002 『開かれた系としての狩猟採集社会』(国立民族学博物館調査報告34) 大阪：国立民族学博物館。
- 2006 『北東アジアにおける森林資源の商業的利用と先住民族』pp.127-158, 大阪：国立民族学博物館。

佐々木史郎, 古原敏宏, 小谷凱宣編

- 2008 『北海道内の主要アイヌ資料の再検討』(科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告

書) 大阪：国立民族学博物館。

佐々木亨

1996 「千島アイヌの伝統文化と文化変化について」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』2：37-44。

佐々木利和

2004 『アイヌ絵誌の研究』東京：草風館。

佐藤孝雄

2013 「飼熊儀礼の研究—現状と課題」『ビオストーリー』20：34-43。

佐藤宏之

1996 「狩猟システムのエスノアーキオロジー—ロシア沿海州ウデへの民族調査から」『古代』102：15-35。

佐藤宏之編

1998 『ロシア狩猟文化誌』東京：慶友社。

シュニレルマン, ヴィクトル・A

2002 「階層制社会とその経済的基盤—カムチャツカの事例から」佐々木史郎編『開かれた系としての狩猟採集社会』(国立民族学博物館調査報告 34) pp.71-93, 大阪：国立民族学博物館。

白石英才, 笹倉いる美

2007 「ニプフ(ギリヤーク)の縫い方」『北海道立北方民族博物館研究紀要』16：69-76。

鈴木ひろ美

1996 「アイヌの下紐(ウプソル)について」『北海道立北方民族博物館研究紀要』5：47-83。

スチュアート ヘンリ

1987a 「セント・ローレンス島発見の凍結ミイラについて」『ドルメン』17：111-117。

1987b 「アリュート民族のミイラ作り風習」『北海道考古学』23：89-100。

1993a 「アリュート民族のミイラ風習」日本ミイラ研究グループ編『日本・中国ミイラ信仰の研究』pp.333-354, 東京：平凡社。

1993b 「セント・ローレンス島発見の凍結ミイラ」日本ミイラ研究グループ編『日本・中国ミイラ信仰の研究』pp.355-368, 東京：平凡社。

関口由彦

2007 『首都圏に生きるアイヌ民族—「対話」の地平から』東京：草風館。

祖父江孝男

1972 『アラスカ・エスキモー』東京：社会思想社。

高倉新一郎

1943 『アイヌ政策史』東京：日本評論社。

高野孝子

2009 「大地とのつながりを求めて(1)—アラスカ州コディアク島での教育プログラムとアイデンティティの構築」『北海道立北方民族博物館研究紀要』18：29-58。

2010 「大地とのつながりを求めて(2) アラスカ州ロシアンミッション村, 地域文化と伝統を織り込んだ教育課程」『北海道立北方民族博物館研究紀要』19：15-42。

田口洋美

2002 「ロシア極東アムール流域と東シベリアにおける先住民の狩猟漁労活動」佐々木史郎編『開かれた系としての狩猟採集社会』(国立民族学博物館調査報告 34) pp.165-214, 大阪：国立民族学博物館。

立川陽仁

- 1999a 「[研究動向] ポトラッチ研究史と将来の展望」『社会人類学年報』25：167-185。
- 1999b 「クワクワカワクゥ貴族層の衰退—カナダ植民地統治期における世界観とポトラッチの変容」『民族学研究』64 (1)：1-22。
- 2002a 「サケ漁業・缶詰業とレクウィルトクの経済活動」『社会人類学年報』28：79-105。
- 2002b 「クワクワカワクゥはいかに漁業に参入したか—企業家の誕生、感動と戦略」『文化人類学研究』3：120-142。
- 2003 「海上におけるサケの『管理』—カナダ、北西海岸のサケ漁業漁師に見られる実践と認識」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告46）pp.174-183、大阪：国立民族学博物館。
- 2004a 「〈意味〉と〈型〉—ポトラッチをめぐるクワクワカワクゥ内外の視点」渡邊欣雄編『世界の宴会』（『アジア遊学』61）pp.174-183、東京：勉誠出版。
- 2004b 「カナダの北西海岸先住民にとってのサケの社会・経済的な意義—現代のクワクワカワクゥ漁師の経済活動に関する事例から」『国立民族学博物館研究報告』29 (2)：307-352。
- 2006 「北西海岸先住民の漁業漁師とオヒョウ」北海道立北方民族博物館編『北の十字路口—北太平洋沿岸の文化』（第20回北方民族文化シンポジウム報告）pp.9-15、網走：北方文化振興協会。
- 2007 「リクルーター制度と労働組合—カナダ、北西海岸先住民によるサケ漁業操業を支えた経済的環境について」『人文論叢』24：179-192。
- 2008a 「現代カナダにおける北西海岸先住民の生業活動—クワクワカワクゥの漁業漁師の例から」『立教アメリカン・スタディーズ』30：77-93。
- 2008b 「カナダ・バンクーバー島の先住民クワクワカワクゥとサケの養殖業」岸上伸啓編『北アメリカ先住民の社会経済問題』（みんぱく実践人類学シリーズ4）pp.273-300、東京：明石書店。
- 2009 『カナダ先住民と近代産業の民族誌—北西海岸におけるサケ漁と先住民漁師の技術的適応』東京：お茶の水書房。
- 2010 「先住民養殖業協会の設立と活動」『人文論叢』27：191-204。
- 2013 「チーフはだれか—現代カナダにおけるある判決と先住民社会をめぐる」『人文論叢』30：73-85。
- 2014 「北西海岸先住民の現代における歓待について—フィールドワーカーの経験からの覚書」『人文論叢』31：73-85。

谷本一之

- 1992 『北極圏 ツンドラと氷原を渡る響き—チュクチの歌』（地球の音楽 67）東京：日本ビクター。
- 1994 「古老は Jochelson のコリヤク録音をいかに聴いたか（その1）」谷本一之編『北方諸民族文化国際フェスティバル・シンポジウム報告』pp.93-97、マガダン：マガダン教育大学。
- 1998 「古老は Jochelson のコリヤク録音をいかに聴いたか（その2）」大島稔編『カムチャツカ半島諸民族の生業・社会・芸能』pp.91-115、小樽：小樽商科大学。
- 1999 「北方諸民族芸能のタイポロジー」『月刊 言語』21 (8)：70-75。
- 2000 『アイヌ絵を聴く—変容の民族音楽誌』札幌：北海道大学出版会。
- 2005 「ベーリング海峡の響き—両大陸を行き交う太鼓」『北海道立北方民族博物館研究紀要』14：1-8。

- 2009 「古老はBogorasの録音をいかに聴いたか—北太平洋の「音の文化」」谷本一之・井上紘一編『渡鴉（ワタリガラス）のアーチ（1903-2002）』（国立民族学博物館調査報告82）pp.233-245, 大阪：国立民族学博物館。
- 谷本一之, 井上紘一編  
2009 『渡鴉のアーチ』（1903-2002）—ジェサップ北太平洋調査を追試検証する』（国立民族学博物館調査報告82）大阪：国立民族学博物館。
- 谷本一之, 森田稔  
1992 『北極圏 エスキモーの歌と踊り—シベリアからグリーンランドまで（地球の音楽66）』東京：日本ビクター。
- 田村将人  
2006 「20世紀前半のある樺太アイヌ村落の歴史的な位置づけ」『北海道開拓記念館研究紀要』34：113-128。  
2007 「白浜における集住政策の意図と樺太アイヌの反応」『北海道開拓記念館研究紀要』35：87-100。  
2011 「先住民の島・サハリン—樺太アイヌの日露戦争への対処」原輝の編『日露戦争とサハリン島』（北海道大学スラブ研究センタースラブ・ユーラシア叢書10）pp.97-127, 札幌：北海道大学出版会。  
2013 「サハリン先住民族ウイльтаおよびニヅフの戦後・冷戦期の去就・樺太から日本への〈引揚げ〉とソビエト連邦での〈残留〉,そして〈帰国〉」蘭信三編『帝国以後の人の移動 ポストコロニアリズムとグローバリズムの交錯点』pp.209-248, 東京：勉誠社。
- チャード, チェスター・S  
1961 「北太平洋海岸文化の起源」『民族学研究』26（1）：63-66。
- 津田命子  
2014 「アイヌ衣文化の研究」総合研究大学院大学文化科学研究科学学位請求論文。
- 手塚薫  
2003 「千島列島におけるラッコ猟とグローバル経済」北海道立北方民族博物館編『北太平洋沿岸の文化—資源利用のあり方』（第17回北方民族文化シンポジウム報告）pp.33-37, 網走：（財）北方文化振興協会。  
2008 「アラスカ・コディアック島の先住民による商業サケ漁」岸上伸啓編『海洋資源の流通と管理の人類学』（みんぱく実践人類学シリーズ3）pp.69-93, 東京：明石書店。  
2010 「千島列島における先史文化の適応と資源獲得・流通の検討」『北海学園大学人文論集』46：73-95。  
2011 『アイヌの民族考古学』（ものが語る歴史23）東京：同成社。
- 手塚薫・水島未記  
1997 「ロシア・ハバロフスク地域におけるエヴェンキ, ネギダール, オロチの植物利用」『北海道開拓記念館研究紀要』25：97-119。
- 出利葉浩司  
1989 「アイヌの伝統的漁具（マレク）の成立背景に関する一試論」『物質文化』51：19-55。  
1993 「近世末期上下ヨイチ場所におけるアイヌの毛皮獣狩猟活動とその周辺—クマはどれだけ狩猟されたか・文献資料による考察」『北海道開拓記念館研究報告』13：31-60。  
1995 「狩猟具からみた北海道アイヌおよび北東アジア諸民族の小型毛皮獣狩猟活動の意味—特に罫・仕掛け弓の比較検討をとおして」北海道開拓記念館編『北の歴史・文化交流研究事

- 業 研究報告』pp.305-331, 札幌：北海道開拓記念館。
- 1997a 「博物館資料はいかに収集されたか—明治年間に残された外国人の記録から」『北海道開拓記念館研究紀要』25：67-96。
- 1997b 「20世紀前半におけるアイヌ社会の変容について—試論—日米アイヌ・コレクションの比較を通して」小谷凱宣編『欧米アイヌ・コレクションの比較研究（科研報告書）』pp.45-61, 名古屋：名古屋大学。
- 2002 「近世末期におけるアイヌの毛皮獣狩猟活動について」佐々木史郎編『開かれた系としての狩猟採集社会』（国立民族学博物館調査報告34）pp.97-163, 大阪：国立民族学博物館。
- 2012 「博物館と『政治的アイデンティティ』—北海道の地方博物館を例に」太田好信編『政治的アイデンティティの人類学 21世紀の権力変容と民主化にむけて』pp.138-160, 京都：昭和堂。
- 出利葉浩司, 手塚薫
- 1994 「アイヌの毛皮獣狩猟とその北東アジアにおける歴史的な位置—アイヌ民族の狩猟活動研究の方向の示唆にむけての試論」『1993年度「北の歴史・文化交流研究事業」研究報告』pp.305-331, 札幌：北海道開拓記念館。
- 中田篤
- 1998 「北方地域におけるイヌの利用—行動操作の技術と行動学的背景」『北方民族博物館研究紀要』7：105-121。
- 2000 「北海道周辺地域における犬ぞり文化—国内博物館所蔵資料に関する調査概報」『北海道立北方民族博物館研究紀要』9：105-126。
- 野本正博
- 1998 「現代に生きるアイヌのサケ利用文化」北海道立北方民族博物館編『北方における漁撈と文化変容の関係—サケをめぐる文化』（第12回北方民族文化シンポジウム報告）pp.77-80, 網走：（財）北方文化振興協会。
- ベリョスキ, ユーリー
- 2009 「『渡鴉のアーチ』とコンピューター・データベース—ジェサップ調査以降百年の神話を比較する」谷本一之・井上紘一編『渡鴉のアーチ（1903-2002）—ジェサップ北太平洋調査を追試検証する』（国立民族学博物館調査報告82）pp.61-86, 大阪：国立民族学博物館。
- 北海道開拓記念館編
- 1991 『1990年度 北の歴史・文化交流事業—中間報告』札幌：北海道開拓記念館。
- 1995 『北の歴史・文化交流事業—研究報告』札幌：北海道開拓記念館。
- 1998 『北の文化交流史研究事業—中間報告』札幌：北海道開拓記念館。
- 2003 『北方文化共同研究事業 2000-2002年度の調査報告』札幌：北海道開拓記念館。
- 2005 『北方文化共同研究事業 18世紀以降の北海道とサハリン州・黒竜江省・アルバートル州における諸民族と文化』札幌：北海道開拓記念館。
- 2008 『北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史—2005-2007年度調査報告』札幌：北海道開拓記念館。
- 2010 『北方の資源をめぐる先住者と移住者の近現代史—北方文化共同研究報告』札幌：北海道開拓記念館。
- 2013 『北方地域の人と環境の関係史—2010-12年度調査』札幌：北海道開拓記念館。
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター編
- 2010 『アイヌ研究の現在と未来』札幌：北海道大学出版会。

## 北海道立北方民族博物館編

2006 『環北太平洋の環境と文化』 網走：北海道立北方民族博物館。

## 本多俊和, 葉月浩林

2006 「アイヌ民族の表象に関する考察—博物館展示を事例に」『放送大学研究年報』24：57-68。

## 本田優子

2002 「近世北海道におけるアットウシの物産化と流通」『北海道立アイヌ民族文化研究センター紀要』8：1-40。

2003 「近代北海道におけるアットウシ産出の様相を解明するための予備的考察—開拓使の統計資料の整理と分析を中心に」『北海道立アイヌ民族文化研究センター紀要』9：35-79。

2004 「アイヌ口承文芸にあらわれる衣服について」『北海道立アイヌ民族文化研究センター紀要』10：33-67。

2005 「近世北海道におけるアットウシ着用の様相」『北海道立アイヌ民族文化研究センター紀要』11：73-107。

## 本田優子編

2010 『伝承から探るアイヌの歴史』札幌：札幌大学附属総合研究所。

## 益子待也

1982 「ポトラッチの神話学—トリンギット族における死と再生の論理」『民族学研究』47 (3)：221-244。

1992 「トリンギットの社会と儀礼—南東アラスカの『ポトラッチ』における言葉の交換」岡田宏明・岡田淳子編『北の人類学』pp.79-105, 京都：アカデミア出版会。

1993 「鮭の村を訪れた少年—北米北西海岸インディアンの異界訪問譚」『口承文芸研究』16：29-48。

2000 「メトラカトラにおける『伝統』の創造について」岡田淳子編『変容する Metlakatla Indian Community』(平成10・11年度科学研究費補助金国際学術研究・基盤(2)(B)「北西海岸インディアンの開発人類学的研究」研究成果報告書) pp.26-28, 札幌：北海道東海大学。

2002 「『ポトラッチ』の観念について(下)」『金沢学院大学文学部紀要』7：50-70。

## 松林義行

1998 「〈ダンカンニアン〉という名の先住民：Alaska-Tsimshian における Duncon Society Model」『政治学研究論集(明治大学研究論集)』7：93-111。

## 宮岡伯人

1978 『エスキモーの言語と文化』東京：弘文堂。

1987 『エスキモー—極北の文化誌』東京：岩波書店。

1992 「環北太平洋の言語」宮岡伯人編『北の言語：類型と歴史』pp.3-65, 東京：三省堂。

## 宮岡伯人編

1992 『北の言語：類型と歴史』東京：三省堂。

## 山崎幸治

2008 「博物館と先住民研究—アイヌ・先住民研究センターが模索する可能性」北海道立北方民族博物館編『北太平洋の文化—北方地域の博物館と民族文化②』(第22回北方民族文化シンポジウム報告書) pp.41-46, 網走：(財)北方文化振興協会。

## 山崎幸治, 伊藤敦規編

2012 『世界のなかのアイヌ・アート』(先住民文化アート・プロジェクト報告書) 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

山田孝子

1994 『アイヌの世界観—「ことば」から読む自然と宇宙』東京：講談社。

山田仁史, 永山ゆかり, 藤原潤子編

2014 『水・雪・氷のフォークロア』東京：勉誠社。

ラフリン, ウィリアム (スチュアート ヘンリ 訳)

1986 『アリュート民族—極北の海洋民』東京：六興出版。

ローン, タチャーナ (永山ゆかり / 木村美希共訳, 津曲敏郎 / 加藤博文監訳)

2005 『サハリンのウイльта—18-20世紀半ばの伝統的経済と物質文化に関する歴史・民族学的研究』札幌：北海道大学大学院文学研究科。

和田完編著

1999 『サハリン・アイヌの熊祭—ピウスツキの論文を中心に』東京：第一書房。

渡辺仁

1988 「北太平洋沿岸文化圏—狩猟採集民からの視点 I」『国立民族学博物館研究報告』13 (2) : 297-356。

1992 「北洋沿岸文化圏—狩猟採集民文化の共通性とその解釈問題」宮岡伯人編『北の言語—類型と歴史』pp.67-107, 東京：三省堂。

渡辺操, 岡正雄, 杉原荘介編

1961 『アラスカ』東京：古今書院。

渡部裕

1992 「アイヌの海獣狩猟」『北海道立北方民族博物館研究紀要』1 : 53-76。

1994 「北東アジアにおける海獣狩猟 (I)—海獣狩猟の技術」『北海道立北方民族博物館研究紀要』3 : 61-82。

1995 「北東アジアにおける海獣狩猟 (II)—利用と精神文化を中心に」『北海道立北方民族博物館研究紀要』4 : 65-86。

1996 「北東アジア沿岸におけるサケ漁 (I)—資源と捕獲・利用とその意義」『北海道立北方民族博物館研究紀要』5 : 85-102。

1997 「北東アジア沿岸におけるサケ漁 (II)—加工・保存, 精神文化, 商業捕獲の影響を中心に」『北海道立北方民族博物館研究紀要』6 : 199-216。

1999 「カムチャツカ先住民の生業活動 (I)—伝統と現代」『北海道立北方民族博物館研究紀要』8 : 85-110。

2000 「カムチャツカ先住民の生業活動 (II)—伝統と現代—トナカイ飼育を中心に (中間報告)」『北海道立北方民族博物館研究紀要』9 : 69-84。

2001 「カムチャツカ先住民の文化接触—北洋漁業と先住民の関係」『北海道立北方民族博物館研究紀要』10 : 17-46。

2002 「カムチャツカにおける経済構造の変化と先住民経済—伝統的経済活動と政治・経済体制」『北海道立北方民族博物館研究紀要』11 : 61-78。

2003 「「クングス」と「兵丹パン」の間—カムチャツカにおける文化接触の象徴」『北海道立北方民族博物館研究紀要』12 : 37-49。

2004 「カムチャツカ先住民社会における経済の現状と狩猟の意味」『北海道立北方民族博物館研究紀要』13 : 1-10。

2005 「ポスト社会主義経済下のトナカイ飼育産業—カムチャツカの現状と将来」『北海道立北方民族博物館研究紀要』14 : 9-28。

- 2006 「カムチャツカ先住民社会における集団化, 集落再編とその影響」『北海道立北方民族博物館研究紀要』15: 19-28。
- 2007 「トナカイ飼育はだれのためか—文化的表象としてのトナカイ飼育と先住民文化」『北海道立北方民族博物館研究紀要』16: 13-22。
- 2008a 「カムチャツカにおけるトナカイ飼育の課題—新たな政策とトナカイ飼育の意味」『北海道立北方民族博物館研究紀要』17: 37-46。
- 2008b 「カムチャツカ先住民社会とサケ資源の分配・流通—その歴史の変遷と選択」岸上伸啓編『海洋資源の流通と管理の人類学』(みんぱく実践人類学シリーズ3) pp.121-146, 東京: 明石書店。
- 2009 「カムチャツカ先住民文化をめぐるツーリズムの現状」『北海道立北方民族博物館研究紀要』18: 59-72。
- 2010 「ベレストロイカ以降のカムチャツカ先住民社会」『北海道立北方民族博物館研究紀要』19: 57-68。
- 2012 「カムチャツカ・カラガ地区北部の伝統集落と集団化—伝統的生業とトナカイ遊牧」『北海道立北方民族博物館研究紀要』21: 41-64。
- 2015 「伝統的資源利用のあり方からみたカムチャツカ先住民社会と政治・経済体制との関係」『北海道立北方民族博物館研究紀要』24: 1-22。

(欧文)

Aikens, C. Mervin

- 1981 The Last 10,000 Years in Japan and Eastern North America: Parallels in Environment, Economic Adaptation, Growth of Societal Complexity and the Adoption of Agriculture. In Shuzo Koyama and David Hurst Thomas (eds.) *Affluent Foragers: Pacific Coasts East and West* (Senri Ethnological Studies 9), pp.261-273. Osaka: National Museum of Ethnology.

Arutiunov, Serigei A.

- 1997 Twenty-five Centuries of Stability and Continuity in Beliefs of the Bering Strait Eskimos. In Takako Yamada and Takashi Irimoto (eds.) *Circumpolar Animism and Shamanism*, pp.185-206. Sapporo: Hokkaido University Press.

Boas, Franz

- 1968 The Jesup North Pacific Expedition. In *International Congress of Americanists* (Thirteenth Session Held in New York 1902) pp.91-100. Nendeln/Liechtenstein: Kraus (reprint).
- 2001 The Results of the Jesup Expedition; Opening Address at the 16th International Congress of the Americanists, Vienna 1908. In Igor Krupnik and William W. Fitzhugh (eds.) *Gateways: Exploring the Legacy of the Jesup North Pacific Expedition, 1807-1902*, pp.17-24. Washington, DC: Arctic Studies Center, National Museum of Natural History, Smithsonian Institution.

Boas, Franz and George Hunt

- 1905 *Kwakiutl Texts* (Memoir of the American Museum of Natural History, Vol. 3). New York: G. E. Stechert.
- 1908 *Kwakiutl Texts: Second Series* (Memoir of the American Museum of Natural History, Vol. 10, Part 1). New York: G. E. Stechert.
- 1909 *The Kwakiutl of Vancouver Island* (Memoir of the American Museum of Natural History, Vol. 5, Part 2). Leiden: E. J. Brill.

Bodenhorn, Barbara

- 1988 Whales, Souls, Children, and Other Things That Are 'Good to Share': Core Metaphors in a Contemporary Whaling Society. *Cambridge Anthropology* 13 (1) : 1-19.
- 1989 The Animals Come to Me; They Know I Share: Inupiaq Kinship, Changing Economic Relations and Enduring World Views on Alaska's North Slope. Unpublished Ph.D. Dissertation, Cambridge University.
- 1990 'I'm Not the Great Hunter; My Wife is' : Inupiat and Anthropological Models of Gender. *Études/Inuit/Studies* 14 (1-2) : 55-74.
- 1993 Gendered Spaces, Public Places: Public and Private Revisited on the North Slope of Alaska. In B. Bender (ed.) *Landscape: Politics and Perspectives*, pp.169-203. Oxford: Berg.
- 2000a It's Good to Know Who Your Relatives Are. In G. W. Wenzel, G. Hovelsrud-Broda and N. Kishigami (eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-Gatherers* (Senri Ethnological Studies No.53), pp.27-60. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2000b 'He Used to Be My Relative' : Exploring the Bases of Relatedness among Inupiat of Northern Alaska. In J. Carsten (ed.) *Cultures of Relatedness: New Approaches to the Study of Kinship*, pp.128-148. Cambridge: Cambridge University Press.
- 2003 Fall Whaling in Barrow, Alaska: A Consideration of Strategic Decision-Making. In Allen P. McCartney (ed.) *Indigenous Ways to the Present: Native Whaling in the Western Arctic*, pp. 277-306. Edmonton: CCI Press.
- 2005 Sharing Costs: An Exploration of Personal and Individual Property, Equalities and Differentiation. In Thomas Widlok and Wolde Gossa Tadesse (eds.) *Property and Equality* Vol. 1 (Ritualisation, Sharing, Egalitarianism), pp.77-104. New York and Oxford: Berghahn Books.

Bogoras, W.

- 1904-1909 The Chukchee (The Jesup North Pacific Expedition 7), *Memoirs of the American Museum of Natural History*. Leiden; E. J. Brill and New York; G. E. Stehert.

Burch, Ernest S., Jr.

- 1975 *Eskimo Kinsmen: Changing Family Relationships in Northwest Alaska*. Saint Paul, MN: West Publishing Company.
- 1980 Traditional Eskimo Society in Northwest Alaska. In Yoshinobu Kotani and William B. Workman (eds.) *Alaska Native Culture and History* (Senri Ethnological Studies 4), pp.253-304. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 1994 Rationality and Resource Use among Hunters. In Takashi Irimoto and Takako Yamada (eds.) *Circumpolar Religion and Ecology: An Anthropology of the North*, pp.163-185. Tokyo: University of Tokyo Press.
- 1998 *The Inupiat Eskimo Nations of Northwest Alaska*. Fairbanks: University of Alaska Press.
- 2005 *Alliance and Conflict: The World System of the Inupiat Eskimos*. Lincoln, NE: University of Nebraska Press.
- 2006 *Social Life in Northwest Alaska: The Structure of Inupiaq Eskimo Nations*. Fairbanks: University of Alaska Press.

Carothers, Courtney

- 2012 Enduring Ties: Salmon and the Alutiiq/Sugpiaq Peoples of the Kodiak Archipelago, Alaska. In Benedict J. Colombi and James F. Brooks (eds.) *Keystone Nations: Indigenous Peoples and Salmon*

- across the North Pacific*, pp.133–160. Santa Fe: School for Advanced Research Press.
- Chance, Norman  
 1990 *The Inupiat of Arctic Alaska: An Ethnography of Development*. Fort Worth: Holt, Rinehart and Winston.
- Charles, George P.  
 2004 Cultural Identity through Yupiaq Narrative. In Takashi Irimoto and Takako Yamada (eds.) *Circumpolar Ethnicity and Identity* (Senri Ethnological Studies 66), pp.41–62. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Chasussonnet, Valérie (ed.)  
 1995 *Crossroads Alaska: Native Cultures of Alaska and Siberia*. Washington DC: Arctic Studies Center, National Museum of Ethnology, Smithsonian Institution.
- Cohen, Mark N.  
 1981 Pacific Coast Foragers: Affluent or Overcrowded? In Shuzo Koyama and David Hurst Thomas (eds.) *Affluent Foragers: Pacific Coasts East and West* (Senri Ethnological Studies 9), pp.275–295. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Colombi, Benedict J.  
 2012 ‘Salmon and His People’: Encounters with Global Capitalism. In Benedict J. Colombi and James F. Brooks (eds.) *Keystone Nations: Indigenous Peoples and Salmon across the North Pacific*, pp.183–206. Santa Fe: School for Advanced Research Press.
- Colombi, Benedict J. and James F. Brooks (eds.)  
 2012 *Keystone Nations: Indigenous Peoples and Salmon across the North Pacific*. Santa Fe: School for Advanced Research Press.
- Csonka, Yvon (ed.)  
 2007 A Special Issue of Tchoukotka/Chukotka. *Études/Inuit/Studies* 31 (1–2) : 321–323.
- De Laguna, Frederica  
 1960 *The Story of a Tlingit Community: A Problem in the Relationship between Archeological, Ethnological, and Historical Methods* (Bureau of American Ethnology, Bulletin 172). Washington DC: U.S. Government Printing Office.
- Deriha, Koji  
 2009 How Can We Approach the Issue of Ainu Trap?: Ainu Hunting of Small Animals in the Nineteenth Century Fur Trade System. In Shiro Sasaki (ed.) *Human–Nature Relations and the Historical Backgrounds of Hunter–Gatherer Cultures in Northwest Asian Forests: Russian Far East and Northeast Japan* (Senri Ethnological Studies 72), pp.101–115. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Diver, Sibyl  
 1995 *Tales from the Dena: Indian Stories from the Tanana, Koyukuk & Yukon River*. Seattle & London: University of Washington Press.  
 2012 Columbia River Tribal Fisheries: Life History Stages of a Co–management Institution. In Benedict J. Colombi and James F. Brooks (eds.) *Keystone Nations: Indigenous Peoples and Salmon across the North Pacific*, pp.207–235. Santa Fe: School for Advanced Research Press.
- Fienup–Riordan, Ann  
 1983 *The Nelson Island Eskimo: Social Structure and Ritual Distribution*. Anchorage, AK: Alaska Pacific

- University Press.
- 1986 *When Our Bad Season Comes: A Cultural Account of Subsistence Harvesting & Harvest Disruption on the Yukon Delta*. Anchorage, AK: Alaska Anthropological Assn.
- 1990 *Eskimo Essays: Yup'ik Lives and How We See Them*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press.
- 1991 *The Real People and the Children of Thunder: The Yup'ik Eskimo Encounter With Moravian Missionaries John and Edith Kilbuck*. Norman, OK: University of Oklahoma Press.
- 1994 *Boundaries and Passages: Rule and Ritual in Yup'ik Eskimo Oral Tradition*. Norman, OK: University of Oklahoma Press.
- 1995 *Freeze Frame: Alaska Eskimos in the Movies*. Seattle, WA: University of Washington Press.
- 1996 *The Living Tradition of Yup'ik Masks: Agayuliyaraput (Our Way of Making Prayer)*. Seattle, WA: University of Washington Press.
- 1997 The Human Hand in Yup'ik Eskimo Iconography and Oral Tradition. In Takako Yamada and Takashi Irimoto (eds.) *Circumpolar Animism and Shamanism*, pp. 167–181. Sapporo: Hokkaido University Press.
- 2000a *Hunting Tradition in a Changing World: Yup'ik Lives in Alaska Today*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press.
- 2000b *Where the End Other Oral Traditions from Southwestern Alaska*. Recorded by Hans Himmelheber, translated by Kirt and Ester Vitt, edited and annotated by Ann Fienup-Riordan, AK: University of Alaska Press.
- 2001 *What's in a Name: Becoming a Real Person in a Yup'ik Community*. Lincoln, NE: University of Nebraska Press.
- 2004 Learning from Our Elders: Yup'ik Culturalism at the Umkumiut Culture Camp. In Takashi Irimoto and Takako Yamada (eds.) *Circumpolar Ethnicity and Identity* (Senri Ethnological Studies 66), pp.63–79. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Fienup-Riordan, Ann and Alice Rearden
- 2005 *Wise Words of the Yup'ik People: We Talk to You because We Love You*. Lincoln, NE: University of Nebraska Press.
- Fienup-Riordan, Ann Marie Meade and Alice Rearden
- 2005 *Yup'ik Words of Wisdom: Yupiit Qanruyutait*. Lincoln, NE: University of Nebraska Press.
- Fienup-Riordan, Ann Jammie Fredda and Alice Rearden
- 2007 *Yuungnaqpiallerput/The Way We Genuinely Live: Masterworks of Yup'ik Science and Survival*. Seattle, WA: University of Washington Press.
- Fienup-Riordan, Ann and Lawrence Kaplan
- 2007 *Words of the Real People: Alaska Native Literature in Translation*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Fitzhugh, Ben
- 2003 The Evolution of Complex Hunter-Gatherers on the Kodiak Archipelago. In Junko Habu, James M. Savelle, Shuzo Koyama and Hitomi Hongo (eds.) *Hunter-Gatherers of the North Pacific Rim* (Senri Ethnological Studies 63), pp. 13–48. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Fitzhugh, William W. and Valérie Chaussonnet (eds.)
- 1994 *Anthropology of the North Pacific Rim*. Washington and London: Smithsonian Institution Press.

- Fitzhugh, William W. and Aron Crowell  
 1988 Crossroads of Continents; Beringian Oecumene. In William W. Fitzhugh and Aron Crowell (eds.) *Crossroads of Continents: Cultures of Siberia and Alaska*, pp. 9-16. Washington DC: Smithsonian Institution Press.
- Fitzhugh, William W. and Aron Crowell (eds.)  
 1988 *Crossroads of Continents: Cultures of Siberia and Alaska*. Washington DC: Smithsonian Institution Press.
- Freeman, Milton M. R.  
 1986 The North Pacific Marine Ecosystem. In the Committee for the Symposium on the Peoples and Cultures in the North (ed.) *International Symposium on Marintime Adaptations in the North Pacific*. pp. 5-17. Abashiri, Japan: the City of Abashiri.
- Gamo, Masao  
 1980a Alaskan Studies by Japanese Anthropologists. In Y. Kotani and W. Workman (eds.) *Alaskan Native Culture and History* (Senri Ethnological Studies 4), pp. 17-21. Osaka: National Museum of Ethnology.  
 1980b The Band Structure and Acculturation among the Eskimos of Nelson Island, Southwest Alaska. In Y. Kotani and W. Workman (eds.) *Alaskan Native Culture and History* (Senri Ethnological Studies 4), pp. 157-167. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Grant, Bruce  
 1995 *In the Soviet House of Culture: A Century of Perestroikas*. Princeton: Princeton University Press.
- Gray, Patty A.  
 2000 Chukotkan Reindeer Husbandry in the Post-Socialist Transition, *Polar Research* 19 (1) : 31-37.  
 2005 *The Predicament of Chukotka's Indigenous Movement: Post-Soviet Activism in the Russian Far North*. New York: Cambridge University Press.
- Grossman, Zoltán and Alan Parker (eds.)  
 2012 *Asserting Native Resilience: Pacific Rim Indigenous Nations Face the Climate Crisis*. Corvallis: Oregon State University Press.
- Gunther, Erna  
 1926 An Analysis of the First Salmon Ceremony. *American Anthropologist* 28 (4) : 605-617.  
 1928 A Further Analysis of the First Salmon Ceremony. *University of Washington Publications in Anthropology* 2: 129-173.
- Habu, Junko, James M. Savelle, Shuzo Koyama and Hitomi Hongo (eds.)  
 2003 *Hunter-Gatherers of the North Pacific Rim* (Senri Ethnological Studies 63). Osaka: National Museum of Ethnology.
- Hensel, Chase  
 1996 *Telling Ourselves: Ethnicity and Discourse in Southwest Alaska*. New York and Oxford: Oxford University Press.
- Hensel, Chase and Phyllis Morrow  
 1992 Hidden Dimension: Minority-Majority Relationships and the Use of Contested Terminology. *Arctic Anthropology* 29 (1) : 38-53.
- Hudson, Mark J., Ann-Elise Lewallen and Mark K. Watson (eds.)  
 2014 *Beyond Ainu Studies: Changing Academic and Public Perspectives*. Honolulu: University of Hawaii

- Press.
- Ikeya, Kazunobu
- 1997 Bear Rituals of the Matagi and the Ainu in Northeastern Japan. In Takako Yamada and Takashi Irimoto (eds.) *Circumpolar Animism and Shamanism*, pp.55–63. Sapporo: Hokkaido University Press.
- 2001 Chukuchi Reindeer Grazing and Changes to Grazing Territory in Northwestern Siberia. In David G. Anderson and Kazunobu Ikeya (eds.) *Parks, Property, and Power: Managing Hunting Practice and Identity within State Policy Regimes* (Senri Ethnological Studies 59), pp.81–99. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2004 Historical Changes in Reindeer Herding by the Chukchi and Preservation of the Identity. In Takashi Irimoto and Takako Yamada (eds.) *Circumpolar Ethnicity and Identity* (Senri Ethnological Studies 66), pp.269–278. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Ikuta, Hiroko
- 2004 ‘We Dance Because We Are Inupiaq’, Inupiaq Dance in Barrow: Performance and Identity. MA Thesis, Department of Anthropology, University of Alaska, Fairbanks.
- 2007 Inupiaq Pride: *Kivgiq* (Messenger Feast) on the Alaskan North Slope. *Études/Inuit/Studies* 31 (1–2) : 343–364.
- 2011 Embodied Knowledge, Relations with the Environment, and Political Negotiation: St. Lawrence Island Yupik and Inupiaq Dance in Alaska. *Arctic Anthropology* 48 (1) : 54–65.
- Inoue, Toshiaki
- 2001 Hunting as a Symbol of Cultural Tradition: The Cultural Meaning of Subsistence Activities in Gwich’in Athabaskan Society of Northern Alaska. In Ian Keen and Takako Yamada (eds.) *Identity and Gender in Hunting and Gathering Societies* (Senri Ethnological Studies 56), pp.89–101. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2004 The Gwich’in Gathering: The Subsistence Tradition in Their Modern Life and the Gathering against Oil Development by the Gwich’in in Athabaskan. In Takashi Irimoto and Takako Yamada (eds.) *Circumpolar Ethnicity and Identity* (Senri Ethnological Studies 66), pp.183–204. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Irimoto, Takashi
- 1992 *Ainu Bibliography*. Sapporo: Hokkaido University.
- 1994 Religion, Ecology, and Behavioral Strategy: A Comparison of Ainu and Northern Athapaskan. In Takashi Irimoto and Takako Yamada (eds.) *Circumpolar Religion and Ecology: An Anthropology of the North*, pp.317–340. Tokyo: University of Tokyo Press.
- 1997 Ainu Shamanism: Oral Tradition, Healing, and Dramas. In Takako Yamada and Takashi Irimoto (eds.) *Circumpolar Animism and Shamanism*, pp.21–46. Sapporo: Hokkaido University Press.
- 2004a Northern Studies in Japan. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 5 : 55–89.
- 2004b *The Eternal Cycle: Ecology, Worldview and Ritual of Reindeer Herders of Northern Kamchatka* (Senri Ethnological Reports 48). Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2004c Creation of the Marimo Festival: Ainu Identity and Ethnic Symbiosis. In Takashi Irimoto and Takako Yamada (eds.) *Circumpolar Ethnicity and Identity* (Senri Ethnological Studies 66), pp.11–38. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2011 Revival of the Ainu Bear Festival—The Mind, Ethnic Symbiosis and Continuity of Traditional Culture. In Takako Yamada and Takashi Irimoto (eds.) *Continuity, Symbiosis, and the Mind in*

- Traditional Cultures of Modern Societies*, pp.223–256. Sapporo, Hokkaido University Press.
- 2014 *The Ainu Bear Festival*. Sapporo: Hokkaido University Press.
- Irimoto, Takashi and Takako Yamada (eds.)
- 1994 *Circumpolar Religion and Ecology: An Anthropology of the North*. Tokyo: University of Tokyo Press.
- 2004 *Circumpolar Ethnicity and Identity* (Senri Ethnological Studies 66). Osaka: National Museum of Ethnology.
- Iwasaki-Goodman, Masami and Masahiro Nomoto
- 2013 Whaling in the Northern Seas off Japan, In Nobuhiro Kishigami, Hisashi Hamaguchi, and James M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp.197–212. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Johelson, W.
- 1908 *The Koryak. The Jesup North Pacific Expedition 6. Memoirs of the American Museum of Natural History*. Leiden: E. J. Brill and New York: G. E. Stchert.
- Jolles, Carol Z. and Elinor Miaghaq Oozeva
- 2002 *Faith, Food, and Family in a Yupik Whaling Community*. Seattle: University of Seattle Press.
- Kan, Serigei
- 1989 *Symbolic Immorality: The Tlingit Potlatch of the Nineteenth Century*. Washington DC: Smithsonian Institution Press.
- 1999 *Memory Eternal: Tlingit Culture and Russian Orthodox Christianity through Two Centuries*. Seattle: University of Washington Press.
- Kasten, Erich
- 2012 Koryak Salmon Fishery: Remembrances of the Past, Perspectives for the Future, In Benedict J. Colombi and James F. Brooks (eds.) *Keystone Nations: Indigenous Peoples and Salmon across the North Pacific*, pp.65–88. Santa Fe: School for Advanced Research Press.
- Kendall, Laurel and Igor Krupnik (eds.)
- 2003 *Constructing Cultures Then and Now: Celebrating Franz Boas and the Jesup North Pacific Expedition* (Contribution to Circumpolar Anthropology 4). Washington, DC: Arctic Studies Center, National Museum of Natural History, Smithsonian Institution.
- Kerttula, Anna
- 1997 Antler on the Sea: Creating and Maintaining Cultural Group Boundaries among the Chukchi, Yupik, and Newcomers of Sireniki, *Arctic Anthropology* 34 (1) : 212–226.
- 2000 *Antler on the Sea: The Yupik and Chukchi of the Russian Far East*. Ithaca: Cornell University Press.
- King, Alexander D.
- 1999 Soul Suckers: Vampiric Shamans in Northern Kamchatka, Russia, *Anthropology of Consciousness* 10 (4) : 57–68.
- 2002 Without Deer There Is No Culture Nothing, *Anthropology and Humanism* 27 (2) : 133–164.
- 2011 *Living with Koryak Traditions: Playing with Culture in Siberia*. Lincoln and London: University of Nebraska Press.
- 2013a The Patterning of Style: Indices of Performance through Ethnographic Analysis of Century-old Wax Cylinders, *Journal of Folklore Research* 50 (1–3) : 41–77.
- 2013b Linguistic Expedition to Kamchatka Documenting the Koryak Language, December 2012–August 2013, *Sibirica* 13 (3) : 79–92.

Kishigami, Nobuhiro

- 1998 Names and Naming of the Reindeer Koryak and Even; Research from Esso District on Kamchatka Peninsula, Russia, In Minoru Oshima (ed.) *Subsistence, Society and Folk Art of Indigenous Peoples in Kamchatka Region* (Report of Grants-in-aid for Scientific Research) pp.73-81, Otaru: The Center for Language Studies at Otaru Shodai.
- 2004 Trends in Native North American Studies in Japan since the 1990s. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 5 : 91-121.
- 2010 Climate Change, Oil and Gas Development, and Inupiat Whaling in Northwest Alaska. *Études/Inuit/Studies* 34 (1) : 91-107.
- 2013a Aboriginal Subsistence Whaling in Barrow, Alaska. In N. Kishigami, H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.) *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84), pp. 101-120. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2013b On Sharing of Bowhead Whale Meat and Maktak in an Inupiat Community of Barrow, Alaska, USA. *Bulletin of Hokkaido Museum of Northern Peoples* 22: 1-19.
- 2013c (Research Report) *Sharing and Distribution of Whale Meat and Other Edible Whale Parts by the Inupiat Whalers in Barrow, Alaska, USA*. Osaka: Kishigami's Office, National Museum of Ethnology.

Koester, David

- 2005a Publicity and Native Life in the 21st Century. In Hokkaido Museum of Northern Peoples (ed.) *The Proceedings of the 19th International Abashiri Symposium*, pp.33-42. Abashiri: The Association for the Promotion of Northern Cultures.
- 2005b Global Movements and Local Historical Events: Itelmens of Kamchatka Appeal to the United Nations. *American Ethnologist* 32 (4) : 642-659.
- 2011 Crosscutting Narratives: Legacies of Religious Repression and Resistance in Soviet Kamchatka. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 36 (1) : 77-92.
- 2012 Shades of Deep Salmon: Fish, Fishing and Itelmen Cultural History. In Benedict J. Colombi and James F. Brooks (eds.) *Keystone Nations: Indigenous Peoples and Salmon across the North Pacific*, pp.47-64. Santa Fe: School for Advanced Research Press.

Koester, David and Liivo Niglas

- 2011 Itelmen Stories: Filming a Past Practice in a Disappearing Language. *Siberica* 10 (3) : 55-81.

Kotani, Yoshinobu and William B. Workman (eds.)

- 1980 *Alaska Native Culture and History* (Senri Ethnological Studies 4). Osaka: National Museum of Ethnology.

Koyama, Shuzo and David Hurst Thomas (eds.)

- 1981 *Affluent Foragers: Pacific Coasts East and West* (Senri Ethnological Studies 9). Osaka: National Museum of Ethnology.

Krupnik, Igor

- 2001 A Jesup Bibliography: Tracking the Published and Archival Legacy of the Jesup Expedition. In Igor Krupnik and William W. Fitzhugh (eds.) *Gateways: Exploring the Legacy of the Jesup North Pacific Expedition, 1897-1902* (Contribution to Circumpolar Anthropology 1), pp. 297-316. Washington, DC: Arctic Studies Center, National Museum of Natural History, Smithsonian Institution.

Krupnik, Igor and Dyanna Jolly (eds.)

- 2002 *The Earth Is Faster Now: Indigenous Observations of the Arctic Environmental Change*. Fairbanks:

- Arctic Research Consortium of the United States.
- Krupnik, Igor, Rachel Mason and Tonia Horton (eds.)  
 2004 *Northern Ethnographic Landscapes: Perspectives from Circumpolar Nations*. Washington DC: Arctic Studies Center, National Museum of Natural History, Smithsonian Institution.
- Krupnik, I. and N. Vakhtin  
 1997 Indigenous Knowledge in Modern Culture: Siberian Yupik Ecological Legacy in Transition. *Arctic Anthropology* 34 (1) : 236-252.
- Krupnik, Igor and William W. Fitzhugh (eds.)  
 2001 *Gateways: Exploring the Legacy of the Jesup North Pacific Expedition, 1897-1902* (Contribution to Circumpolar Anthropology 1). Washington, DC: Arctic Studies Center, National Museum of Natural History, Smithsonian Institution.
- Kurebito, Megumi  
 2004 Incorporation as a Linguistic Identity in Koryak. In Takashi Irimoto and Takako Yamada (eds.) *Circumpolar Ethnicity and Identity* (Senri Ethnological Studies 66), pp.279-291. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Kwon, Heonik  
 1998 The Saddle and the Sledge: Hunting as Comparative Narrative in Siberia and Beyond. *Journal of the Royal Anthropological Institute* 4 (1) : 115-127.
- Laughlin, William S.  
 1980 *Aleuts: Survivors of the Bering Land Bridge*. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- Leroi-Gourhan, André  
 1946 *Archéologie du Pacifique-Nord: Matériaux pour l'étude des Relations entre les Peuples Riverains d'Asie et d'Amérique*. Travaux et Mémoires de L'Institut d'Ethnologie 42. Paris.
- Mashiko, Machiya  
 2006 A Comparative Study of Raven Myths in the North Pacific Region. *Bulletin of Kanazawa Gakuin University, Literature and Art* 4: 43-57.
- Matsubayashi, Yoshiyuki  
 1998 Immigration and Christianity in Alaska-Tsimshan. *Bulletin of Hokkaido Museum of Northern Peoples* 7: 31-50.
- McCartney, Allen P., Hiroaki Okada, Atsuko Okada and William B. Workman (eds.)  
 1998 Special Issue: North Pacific and Bering Sea Maritime Societies: The Archaeology of Prehistorical and Early Historic Coastal Peoples. *Arctic Anthropology* 35 (1).
- Mckennan, Robert A.  
 1965 *Chandalar Kutchin*. Arctic Institute of North America Technical Paper 17, Montreal: Arctic Institute of North America.
- Menzies, Charles R.  
 2012 The Disturbed Environment: The Indigenous Cultivation of Salmon. In Benedict J. Colomby and James F. Brooks (eds.) *Keystone Nations: Indigenous Peoples and Salmon across the North Pacific*, pp.161-182. Santa Fe: School for Advanced Research Press.
- Mishler, Craig  
 1993 *The Crooked Stovepipe: Athapaskan Fiddle Music and Square Dancing in Northeast Alaska and Northwest Canada*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press.

- Mishler, Craig and William E. Simeone  
 2004 *Han: People of the River*. Fairbanks: University of Alaska Press.
- Miyaoka, Osahito  
 1994 The Yupik World Seen through Linguistic Demonstratives. In Takashi Irimoto and Takako Yamada (eds.) *Circumpolar Religion and Ecology: An Anthropology of the North*, pp.237-245. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Miyaoka, Osahito, Osamu Sakiyama and Michael E. Krauss (eds.)  
 2007 *The Vanishing Languages of the Pacific Rim*. New York: Oxford University Press.
- Morrow, Phyllis  
 1990 Symbolic Actions, Indirect Expressions: Limits to the Interpretation of Yupik Society. *Études/Inuit/Studies* 14 (1-2) : 141-158.
- Nelson, Richard K.  
 1973 *Hunters of the Northern Forest: Designs for Survival among Alaskan Kutchin*. Chicago: The University of Chicago Press.  
 1980 Athapaskan Subsistence Adaptations in Alaska. In Yoshinobu Kotani and William B. Workman (eds.) *Alaska Native Culture and History* (Senri Ethnological Studies 4), pp.205-232. Osaka: National Museum of Ethnology.  
 1983 *Make Prayers to the Raven: A Koyukon View of the Northern Forest*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Nomoto, Masahiro  
 2001 Revitalizing the Relationship between Ainu and Salmon: Salmon Rituals in the Present. In David G. Anderson and Kazunobu Ikeya (eds.) *Parks, Property and Power: Managing Hunting Practice and Identity within State Policy Regimes* (Senri Ethnological Studies 59), pp.27-46. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Obayashi, Taryo  
 1994 The Annual Cycle of the Ancient Emishi. In Takashi Irimoto and Takako Yamada (eds.) *Circumpolar Religion and Ecology: An Anthropology of the North*, pp.125-135. Tokyo: University of Tokyo Press.  
 1996 Salmon in Myth and Ritual in the Northern Pacific Area. In Juha Pentikainen (ed.) *Shamanism and Northern Ecology*, pp.313-329. Berlin: Mouton de Gruyter.  
 1997 The Ainu Concept of the Soul. In Takako Yamada and Takashi Irimoto (eds.) *Circumpolar Animism and Shamanism*, pp.9-20. Sapporo: Hokkaido University Press.
- Okada, Hiroaki and Atsuko Okada  
 2000 Port Moller: An Ecological Climax under Changing Climate. *Bulletin of the Hokkaido Museum of Northern Peoples* 9: 1-16.
- Okada, Yasuhiro  
 2003 Jomon Culture of Northeastern Japan and the Sannai Maruyama Site. In Junko Habu, James M. Savelle, Shuzo Koyama and Hitomi Hongo (eds.) *Hunter-Gatherers of the North Pacific Rim* (Senri Ethnological Studies 63), pp.173-186. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Olson, Ronald L.  
 1967 *Social Structure and Social Life of the Tlingit in Alaska*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.

Onishi, Hideyuki

- 2014 The Formation of the Ainu Cultural Landscape: Landscape Shift in a Hunter-Gatherer Society in the Northern Part of the Japanese Archipelago. *Journal of World Prehistory* (Springer) 27 (2) (DOI 10.1007/s10963-014-9080-2).

Oshima, Minoru

- 1982 On Causative and Transitive Constructions in Aleut, Eskimo and Aynu. *Jinbunkenkyu* 64: 201-216.
- 1994 Prosody and Vowel Reduction in Eastern Aluet. In Osahito Miyaoka (ed.) *Languages of the North Pacific Rim* (Hokkaido University Publications in Linguistics 7), pp. 149-157. Sapporo: Department of Linguistics, Faculty of Letters, Hokkaido University.
- 1997 Subsistence Hunting and Hunting Rituals in Lesnaja Koryak in Kamchatka Peninsula. *Otaru University of Commerce Jinbunkenkyu* 94: 1-26.
- 1999 Changes in Reindeer Breeding as Koryak Subsistence in Kamchatka. In Hokkaido Museum of Northern Peoples (ed.) *The Proceedings of the 13th International Abashiri Symposium*, pp.33-40. Abashiri: The Association for the Promotion of Northern Cultures.
- 2000a Ainu Cultural Elements Found in the Cultures of Indigenous Peoples in Kamchatka. In Hokkaido Museum of Northern Peoples (ed.) *The Proceedings of the 14th International Abashiri Symposium*, pp.33-42. Abashiri: The Association for the Promotion of Northern Cultures.
- 2000b Two Traditional Stories of Bering Island Aleut. In Osahito Miyaoka (ed.) *Languages of the North Pacific Rim* (No. 5), pp.125-138. Kyoto: Graduate School of Letters, Kyoto University.
- 2003 *Linguistic Materials of Bering Island Aleut: Dictionary and Texts* (ELPR (Endangered Languages of the Pacific Rim) Publication Series A2-031) Osaka: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.

Osgood, Cornelius

- 1936 *Contribution to the Ethnography of the Kutchin*. (Yale University Publications in Anthropology 14) New Haven: Yale University Press.

Otsuka, Kazuyoshi

- 1999 Tourism, Assimilation, and Ainu Survival Today. In William W. Fitzhugh and Chisato O. Dubrell (eds.) *Ainu: Spirit of a Northern People*, pp. 374-376. Washington, DC and Seattle: Arctic Studies Center, National Museum of Natural History, Smithsonian Institution in association with University of Washington Press.

Plattett, Patrick

- 2003 Les rites de deuil et les commémorations funéraires chez les éleveurs de rennes Koriaks du Nord-Kamchatka. In Y. Droz (ed.) *La violence et les morts: Éclairage anthropologique sur la mort et les rites funéraires*, pp.198-201. Genève: Georg.
- 2005 The Double Game of Fortune: Imitation and Substitution in Contemporary Shamanic Rituals of Two North-Kamchtkan Rural Populations: The Maritime Hunters of Lesnaïa and the Reindeer Herders of Achaivaïam. Ph.D Thesis, Ethnology and Anthropology, University of Neuchâtel, Switzerland.
- 2011 Landscapes in Motion: Opening Pathways in Kamchatkan Hunting and Herding Rituals. In P. Jordan (ed.) *Landscape and Culture in Northern Eurasia*. Walnut Creek: Left Coast Press.

Plattett, Patrick and Virginie Vaté

- 2008 Interactions religieuses dans le Nord-Est russe (Kamchatka, Tchoukotka): note de recherche. *Études Mongoles, Sibériennes, Centrasiatiques et Tibétaines* 38: 155-183.

Reedy-Maschner, Katherine L.

- 2010 *Aleut Identities: Tradition and Modernity in an Indigenous Fishery*. Montreal: McGill-Queen's University Press.
- 2012 Deprivations amid Abundance: The Role of Salmon and 'Other Natural Resources' in Sustaining Indigenous Aleut Communities. In Benedict J. Colombi and James F. Brooks (eds.) *Keystone Nations: Indigenous Peoples and Salmon across the North Pacific*, pp.109-131. Santa Fe: School for Advanced Research Press.

Rethmann, Petra

- 1997 Chto Delat?: Ethnography in the Post-Soviet Cultural Context, *American Anthropologist* 99 (4) : 770-774.
- 2000a A Hopeless Life?: The Story of a Koryak Woman in the Russian Far East, *Anthropologica* 42 (1) : 29-42.
- 2000b Skins of Desire: Petry and identity in Koriak Women's Gift Exchange. *American Ethnologist* 27 (1) : 52-71.
- 2001 *Tundra Passages: History and Gender in the Russian Far East*. Park, PA: Pennsylvania University Press.

Sakakibara, Chie

- 2008 'Our Home is Drowning': Inupiat Storytelling and Climate Change in Point Hope, Alaska, *Geographical Review* 98 (4) : 456-475.
- 2009 'No Whale, No Music': Inupiat Drumming and Global Warming, *Polar Record* 45 (235) : 289-303.
- 2010 *Kiavallakkikput Agviq* (Into the Whaling Cycle) : Cetaceousness and Climate Change among the Inupiat of Arctic Alaska, *Annals of the Association of American Geographers* 100 (4) : 1003-1012.

Sasaki, Shiro

- 1994 Economic-Cultural Types and Historical-Ethnographic Regions in the Lower Amur Basin and Sakhalin Island, In Takashi Irimoto and Takako Yamada (eds.) *Circumpolar Religion and Ecology: An Anthropology of the North*, pp. 403-414. Tokyo: University of Tokyo Press.
- 2000 Comparative Study of Hunting Techniques of the Native People of the Lower Amur Basin and the Primor'e Region; with the Focus on Traps for Fur Game Animals, In Hokkaido Museum of Northern Peoples (ed.) *The Proceedings of the 14th International Abashiri Symposium (2000)*, pp. 11-21. Abashiri: The Association for the Promotion of Northern Cultures.
- 2009 Historical Background to the Distribution of Hunting Techniques and Equipment of the Peoples of the Lower Amur and Primor'e Regions: Focusing on the Traps Used by the Udehe to Catch Fur-bearing Animals, In Shiro Sasaki (ed.) *Human-Nature Relations and the Historical Backgrounds of Hunter-Gatherer Cultures in Northeast Asian Forests: Russian Far East and Northeastern Japan* (Senri Ethnological Series 72), pp. 75-99. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 2010 Voices of Hunters on the Socialist Modernization; From a Case Study of the Udehe in the Russian Far East, *Inner Asia* 12 (1) : 177-197.
- 2011 Sacred Places and Masters of Hunting Luck in the Forest Worlds of the Udehe People of the Russian Far East, In Peter Jordan (ed.) *Landscape and Culture in Northern Eurasia*, pp. 257-278. Walnut Creek, California: Left Coast Press.

Sasaki, Shiro (ed.)

- 2009 *Human-Nature Relations and the Historical Backgrounds of Hunter-Gatherer Cultures in Northeast*

- Asian Forests: Russian Far East and Northeastern Japan* (Senri Ethnological Series 72). Osaka: National Museum of Ethnology.
- Sasamori, Takefusa  
 1997 Healing Arts of the Itako. In Takako Yamada and Takashi Irimoto (eds.) *Circumpolar Animism and Shamanism*, pp.47-54. Sapporo: Hokkaido University Press.
- Schweitzer, Peter P.  
 2003 Levels of Inequality in the North Pacific Rim: Cultural Logics and Regional Interaction. In Junko Habu, James M. Savelle, Shuzo Koyama and Hitomi Hongo (eds.) *Hunter-Gatherers of the North Pacific Rim* (Senri Ethnological Studies 63), pp.83-101. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Sharakhmatova, Victoria N.  
 2012 Indigenous Peoples' Traditional Fishing in Kamchatka and Local Community Development Concept Based on Sustainable Use of Fish Resources: Problems and Solutions. In Benedict J. Colombi and James F. Brooks (eds.) *Keystone Nations: Indigenous Peoples and Salmon across the North Pacific*, pp.89-107. Santa Fe: School for Advanced Research Press.
- Sheehan, Glenn  
 1997 *In the Belly of the Whale: Trade and War in Eskimo Society*. Anchorage: Alaska Anthropological Association.
- Shnirelman, Victor A.  
 2001 Strange Customs; Incipient Social Differentiation in Kamchatka through the Eyes of the First Russian Explorers. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 25 (4) : 625-640.
- Someone, William E.  
 1995 *Rifles, Blankets, and Beads: Identity, History, and Northern Athapaskan Potlatch*. Norman and London: University of Oklahoma Press.
- Slobodin, Richard  
 1962 *Band Organization of the Peel River Kutchin* (Anthropological Series 55, National Museum of Canada Bulletin 179). Ottawa: National Museum of Canada.
- Spencer, Robert  
 1959 *The North Alaskan Eskimo: A Study in Ecology and Society* (Smithsonian Institution, Bureau of American Ethnology Bulletin 171). Washington DC: Smithsonian Institution.
- Spevakovsky, Alexander B.  
 1994 Animal Cults and Ecology: Ainu and East Siberian Examples. In Takashi Irimoto and Takako Yamada (eds.) *Circumpolar Religion and Ecology: An Anthropology of the North*, pp.103-108. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Stewart, Henry et al. (eds.)  
 2014 *The Ainu: Indigenous People of Japan*. Sapporo: Hokkaido University Center for Ainu and Indigenous Studies.
- Suttles, Wayne (ed.)  
 1990 *Northwest Coast* (Handbook of North American Indians Vol.7). Washington DC: Smithsonian Institution Press.
- Swanton, John  
 1905 *Contributions to the Ethnography of the Haida* (Memoir of the American Museum of Natural History, Vol.5 Part 1). New York: G. E. Stechert.

- Takakura, Hiroki
- 2007 The Ainu and Indigenous Trading in Maritime Northeast Asia: A Comparative Review of the Histories of Hokkaido, Amur-Sakhalin and Chukotka. *Northeast Asian Studies* 11: 115-136.
- Tezuka, Kaoru
- 1998 Long-distance Trade Networks and Shipping in Ezo Region. *Arctic Anthropology* 35 (1): 350-360.
- 2009 Ainu Sea Otter Hunting from the Perspective of Sino-Japanese Trade. In Shiro Sasaki (ed.) *Human-Nature Relations and the Historical Backgrounds of Hunter-Gatherer Cultures in Northeast Asian Forests* (Senri Ethnological Studies 72), pp.117-131. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Thornton, Thomas F.
- 2008 *Being and Place among the Tlingit*. Seattle: University of Washington Press.
- 2010 A Tale of Three Parks: Tlingit Conservation, Representation and Repatriation in Southeast Alaska's National Parks. *Human Organization* 69 (2) : 107-118.
- Thornton, Thomas F. and H Kitka
- 2015 An Indigenous Model of a Contested Pacific Herring Fishery in Sitka, Alaska. *International Journal of Applied Geospatial Research* 6 (1) : 94-117.
- Thornton, Thomas F. and Jamie, Hebert
- 2014 Neoliberal and Neo-communal Herring Fisheries in Southeast Alaska: Reframing Sustainability in Marine Ecosystems. *Marine Policy*: (doi:10.1016/j.marpol.2014.11.015)
- Thornton, T. F., M. L. Moss, V. L. Butler, J. Herbert and F. Funk
- 2010 Local and Traditional Knowledge and the Historical Ecology of Pacific Herring in Alaska. *Journal of Ecological Anthropology* 13 (1) : 81-88.
- Townsend, Joan B.
- 1980 Ranked Societies of the Alaskan Pacific Rim, In Yoshinobu Kotani and William B. Workman (eds.) *Alaska Native Culture and History* (Senri Ethnological Studies 4 ), pp. 123-156. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Townsend-Gault, Charlotte, Jennifer Kramer, and Ki-Ke-In (eds.)
- 2013 *Native Art of the Northwest Coast: A History of Changing Ideas*. Vancouver: UBC Press.
- Turner, Edith
- 1994 The Effect of Contact on the Religion of Inupiat Eskimo. In Takashi Irimoto and Takako Yamada (eds.) *Circumpolar Religion and Ecology: An Anthropology of the North*, pp. 143-161. Tokyo: University of Tokyo Press.
- 2004 Advocacy Anthropology among the Inupiat of Northern Alaska and the General Role of Ethnology in the Present Decade. In Takashi Irimoto and Takako Yamada (eds.) *Circumpolar Ethnicity and Identity* (Senri Ethnological Studies 66), pp.95-105. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Wada, Kan
- 1996 Some Shamanistic Features of Ainu Religion. In Juha Pentikainen (ed.) *Shamanism and Northern Ecology*, pp. 305-311. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Watanabe, Hitoshi
- 1993 The Northern Pacific Maritime Culture Zone: A Viewpoint on Hunter-Gatherer Mobility and Sedentism. In M. Akiens and S. N. Rhee (eds.) *Pacific Northeast Asia in Prehistory: Hunter-Fisher-Gatherers, Farmers and Sociopolitical Elites*, pp. 105-109. Pullman, WA: Washington State University Press.

- 1994 The Animal Cult of Northern Hunter-Gatherers: Patterns and Their Ecological Implications. In Takashi Irimoto and Takako Yamada (eds.) *Circumpolar Religion and Ecology: An Anthropology of the North*, pp.47-67. Tokyo: University of Tokyo Press.
- Watson, Mark K.  
2014 *Japan's Ainu Minority in Tokyo: Diasporic Indigeneity and Urban Politics*. London and New York: Routledge Press.
- Willerslev, Rane  
2004 Not Animal, Not Not-Animal: Hunting, Imitation and Empathetic Knowledge among the Siberian Yukaghirs. *Journal of the Royal Anthropological Institute* 10 (3) : 629-652.  
2007 *Soul Hunters: Hunting, Animism, and Personhood among the Siberian Yukaghirs*. Berkeley: University of California Press.  
2012 The New as Always the Same: A Critical Perspective on Yukaghir Hunting Adaptations to Climate Change. *Bulletin of the Hokkaido Museum of Northern Peoples*. 21: 1-18.
- Wilson, Emma  
2012 The Oil Company, the Fish, and the Nivhi; The Cultural Value of Sakhalin Salmon. In Benedict J. Colombi and James F. Brooks (eds.) *Keystone Nations: Indigenous Peoples and Salmon across the North Pacific*, pp.25-45. Santa Fe: School for Advanced Research Press.
- Worl, Rosita  
1980 The North Slope Inupiat Whaling Complex. In Yoshinobu Kotani and William B. Workman (eds.) *Alaska Native Culture and History* (Senri Ethnological Studies 4), pp.305-320. Osaka: National Museum of Ethnology.
- Yamada, Takako  
1994 Animals as the Intersection of Religion with Ecology: An Ainu Example. In Takashi Irimoto and Takako Yamada (eds.) *Circumpolar Religion and Ecology: An Anthropology of the North*, pp.69-102. Tokyo: University of Tokyo Press.  
2000 The Revival of Rituals among the Sakha-Yakut and the Hokkaido Ainu. *Acta Borealia* (A Nordic Journal of Circumpolar Societies) 1 (2000) : 77-115.  
2001 Gender and Cultural Revitalization Movements among the Ainu. In Ian Keen and Takako Yamada (eds.) *Identity and Gender in Hunter-Gatherer Societies* (Senri Ethnological Series 56), pp. 237-257. Osaka: National Museum of Ethnology.  
2003 Anthropological Studies of the Ainu in Japan: Past and Present. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 4: 75-106.
- Yamada, Takako and Takashi Irimoto (eds.)  
1997 *Circumpolar Animism and Shamanism*. Sapporo: Hokkaido University Press.
- Vaté, Virginie  
2005 Maintaining Cohesion through Rituals: Chukchi Herders and Hunters, a People of the Siberian Arctic. In Kazunobu Ikeya and Elliot Fratkin (eds.) *Pastoralists and Their Neighbours in Asia and Africa* (Senri Ethnological Studies 69), pp.45-68. Osaka: National Museum of Ethnology.